

390.7
A82
3 ②



* 0055564000 *

0055564-000

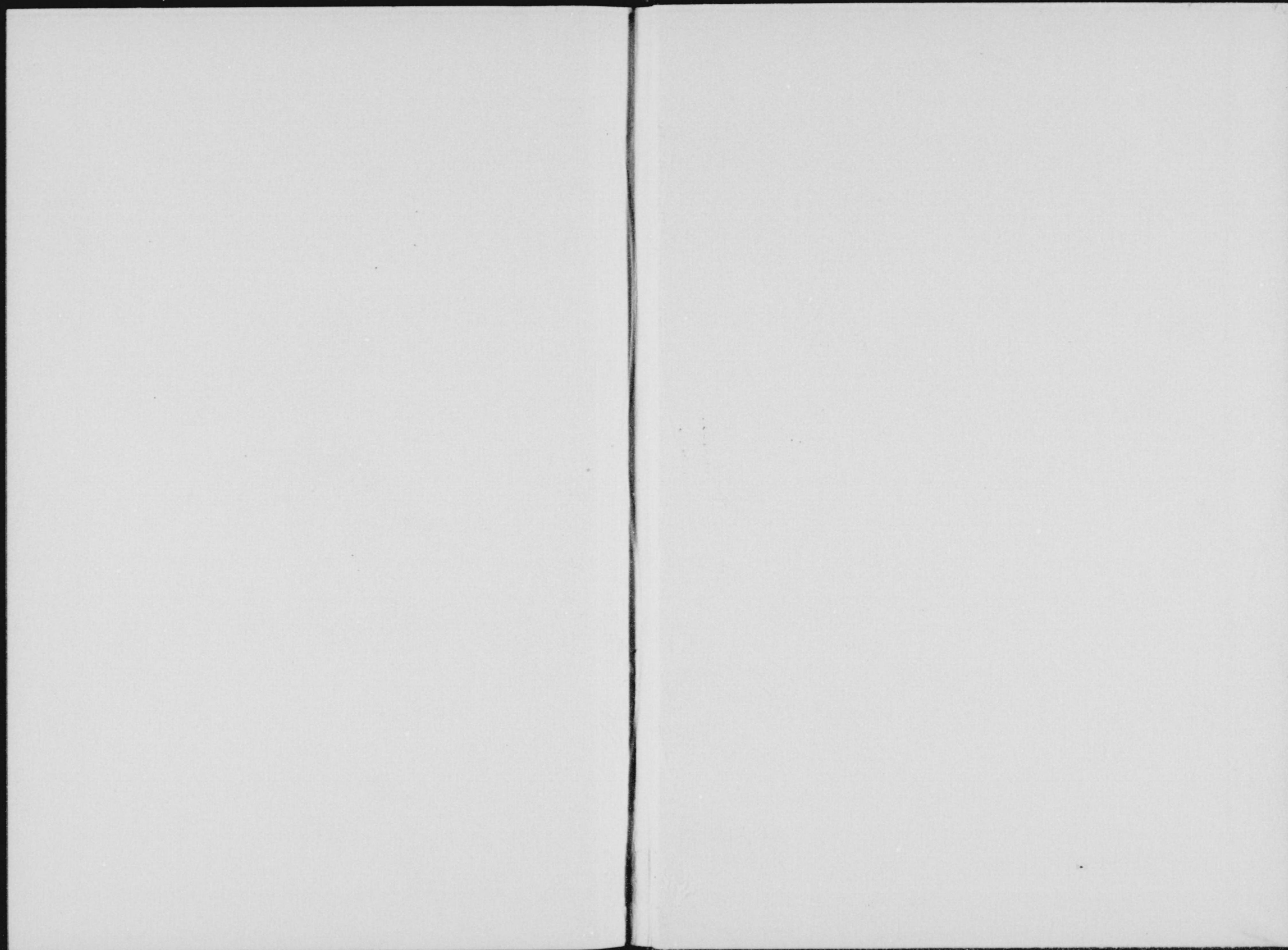
390.7-A82-3ウ

海軍少年飛行兵

朝日新聞社

昭和19

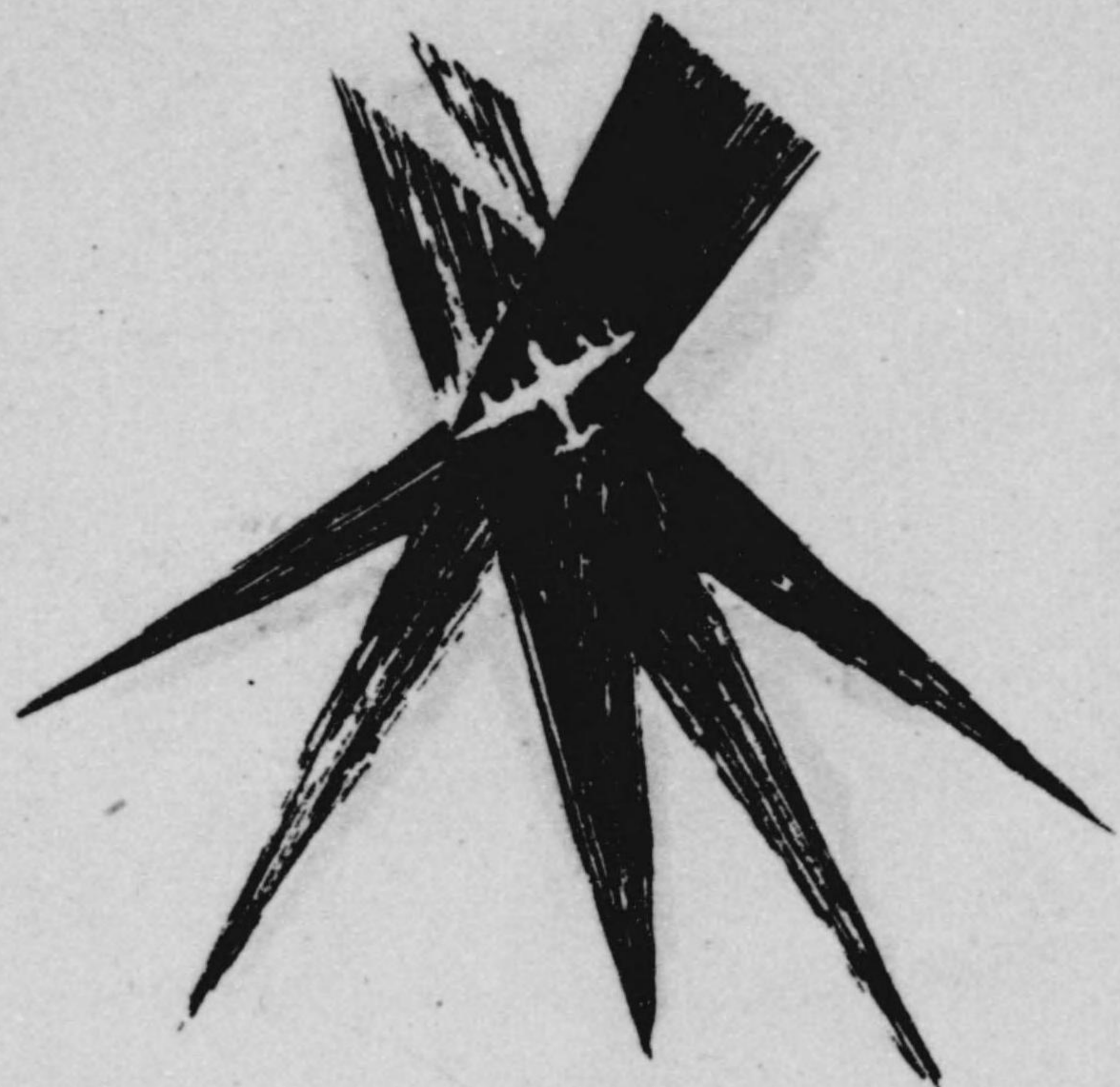
AJA



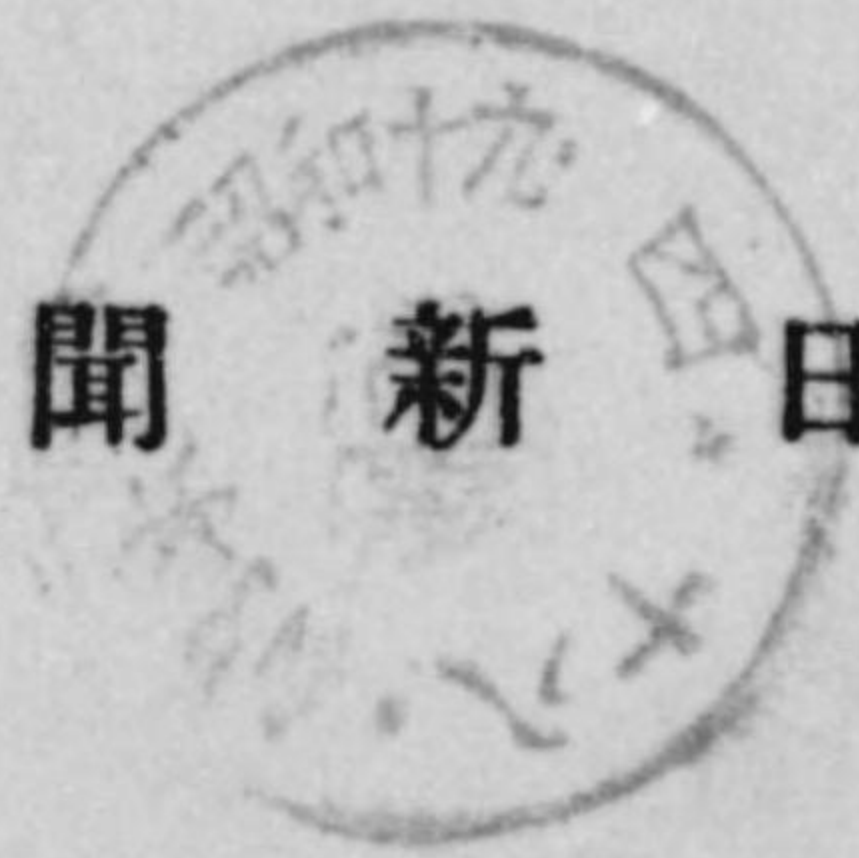
工2R30

390.7
A82
3

海軍少年飛行兵



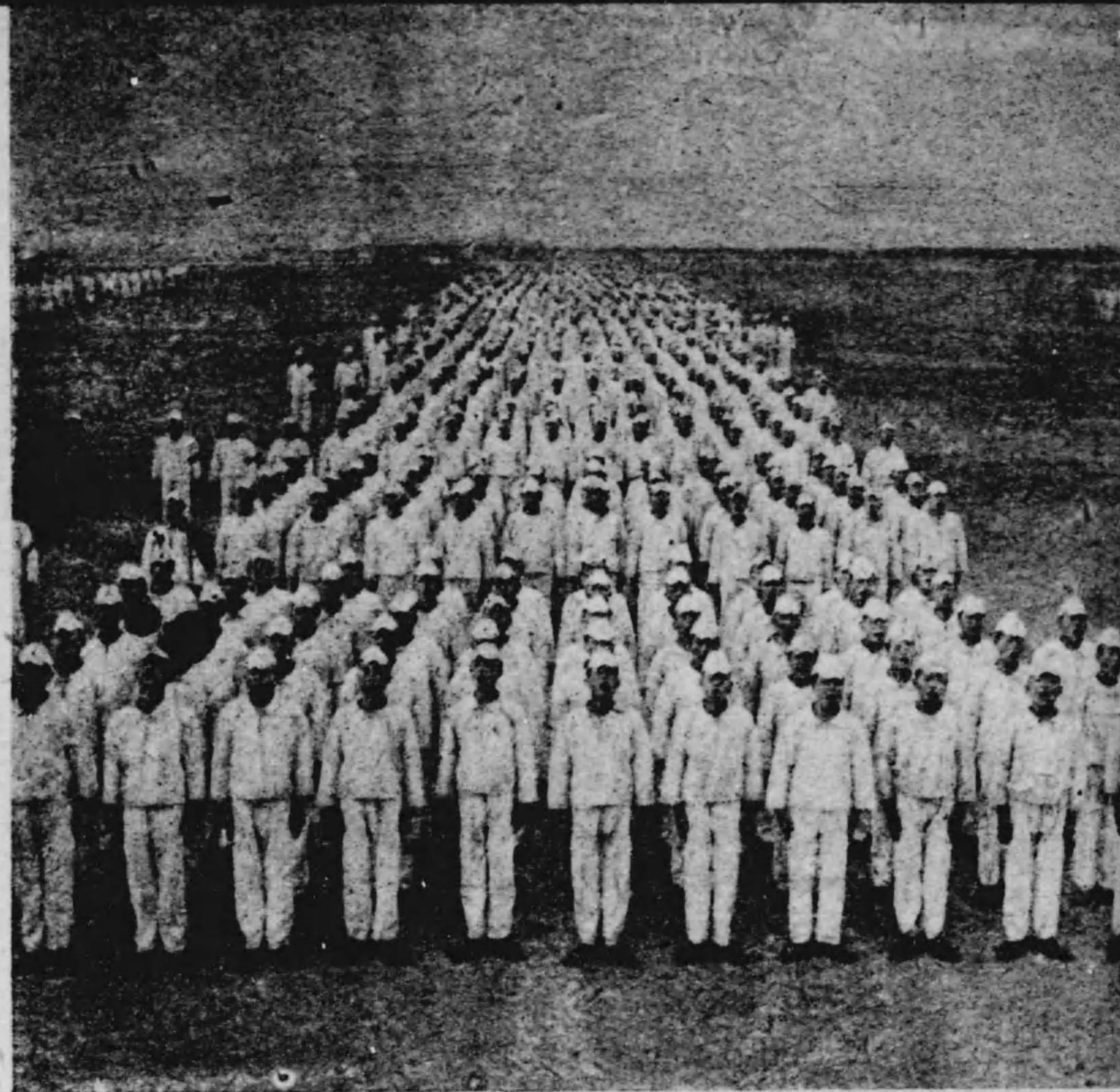
朝日新聞社編



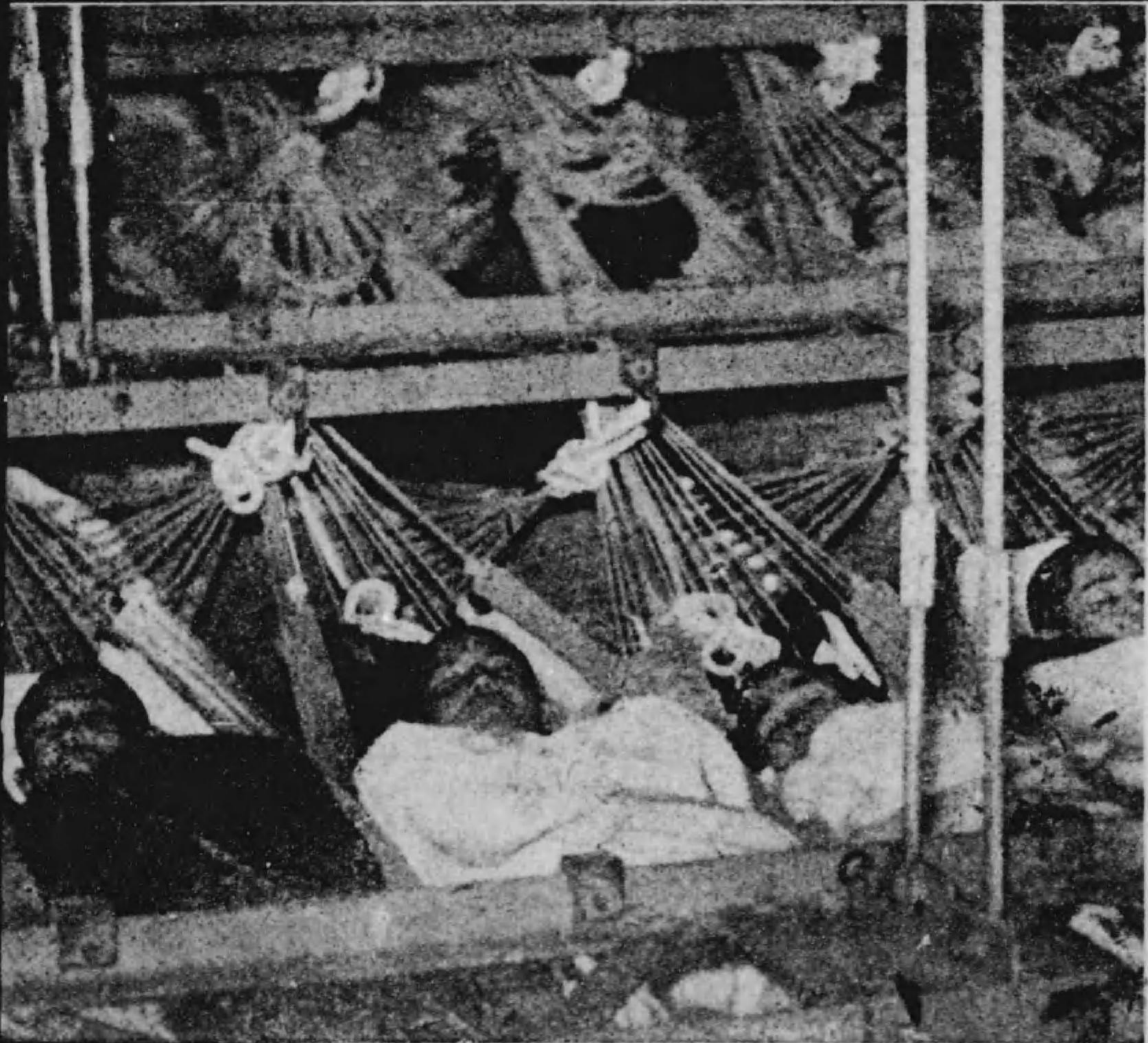


鷲若の海む笑微に上機





(上) 御製奉唱の聖なる朝のひととき
(下) 歩調そろへて軍歌の練習



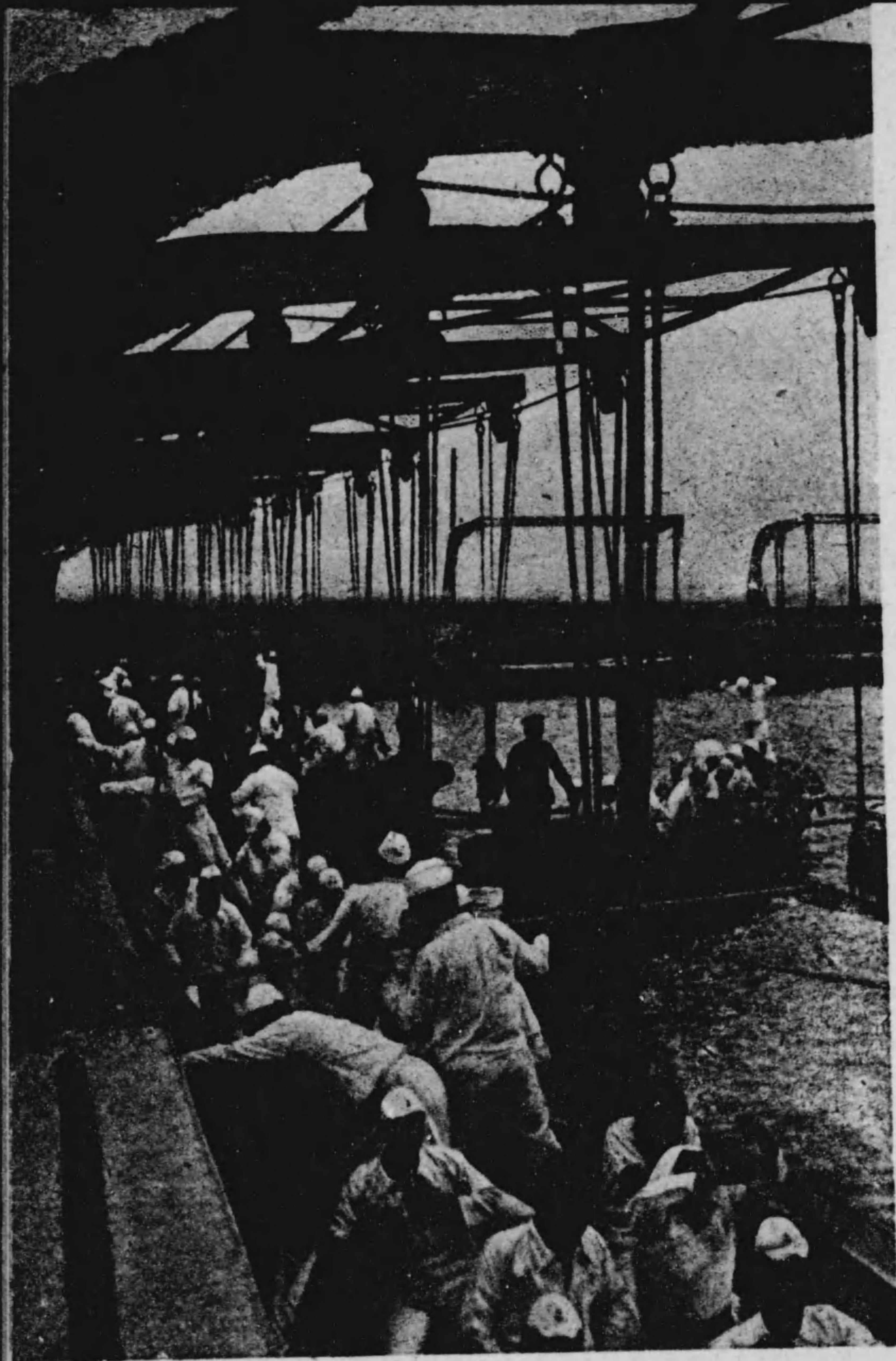
(上) 希望に胸ふくらませて晴れの入隊
(下) 入隊第一夜、釣床に通ふは故郷の夢か憧憬の空飛ぶ姿か



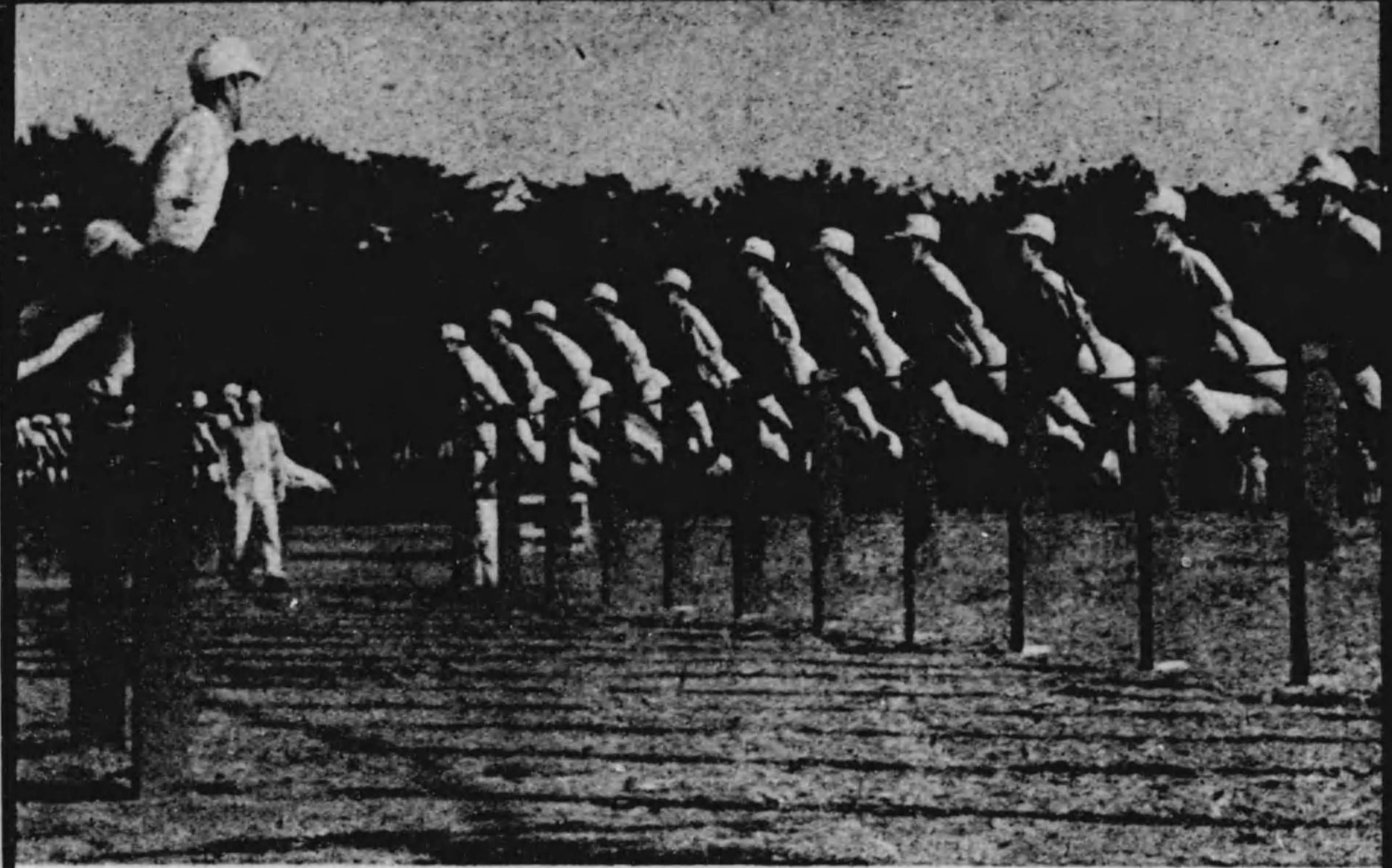
(上)整備講堂で講義を聴く
(下)日頃練磨の腕を示す試し斬り



るなくしら人軍てけ抜も氣婆姿に第次 練訓戦陸

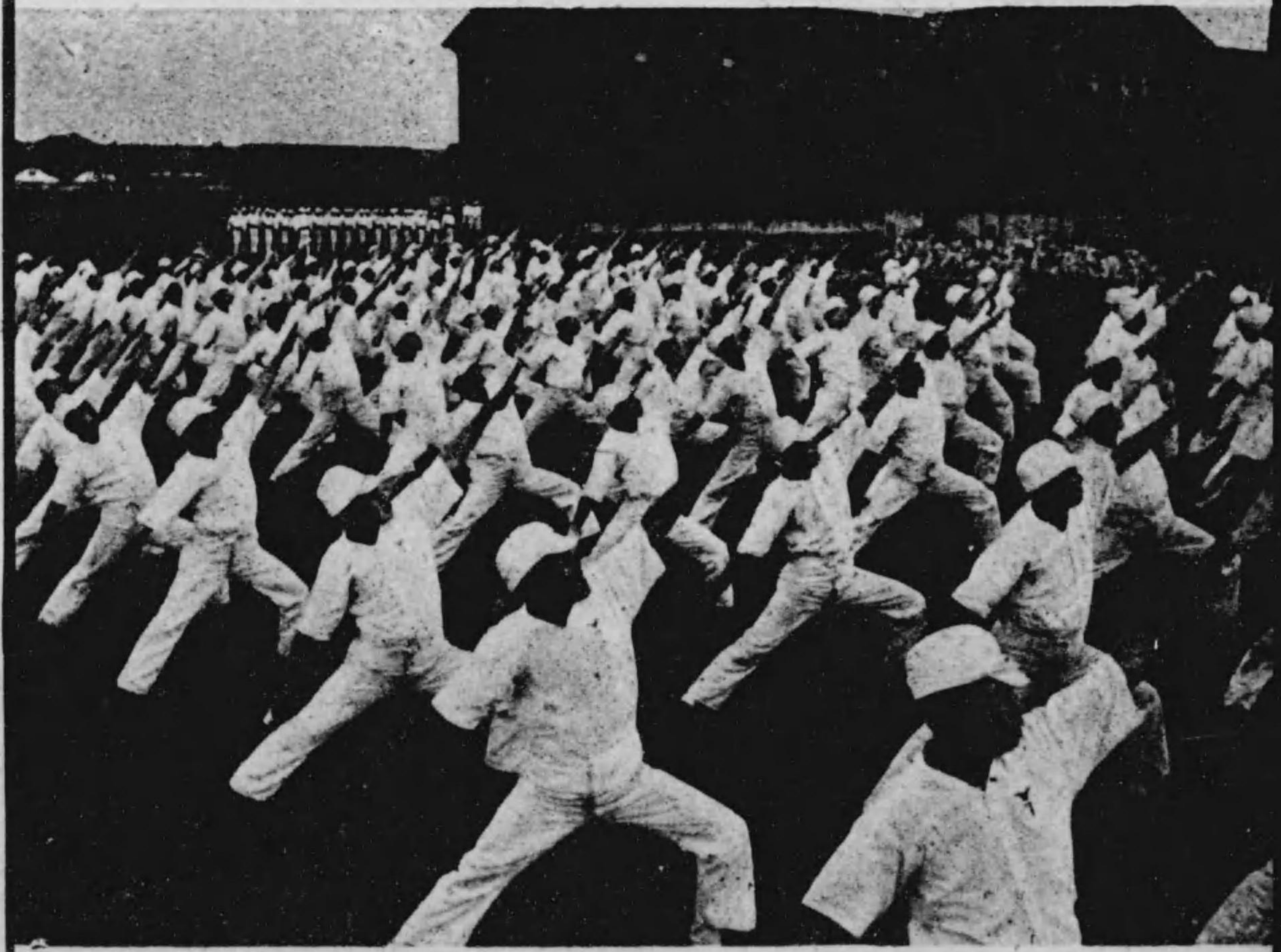


豫科練魂を鍛へる漕漕訓練



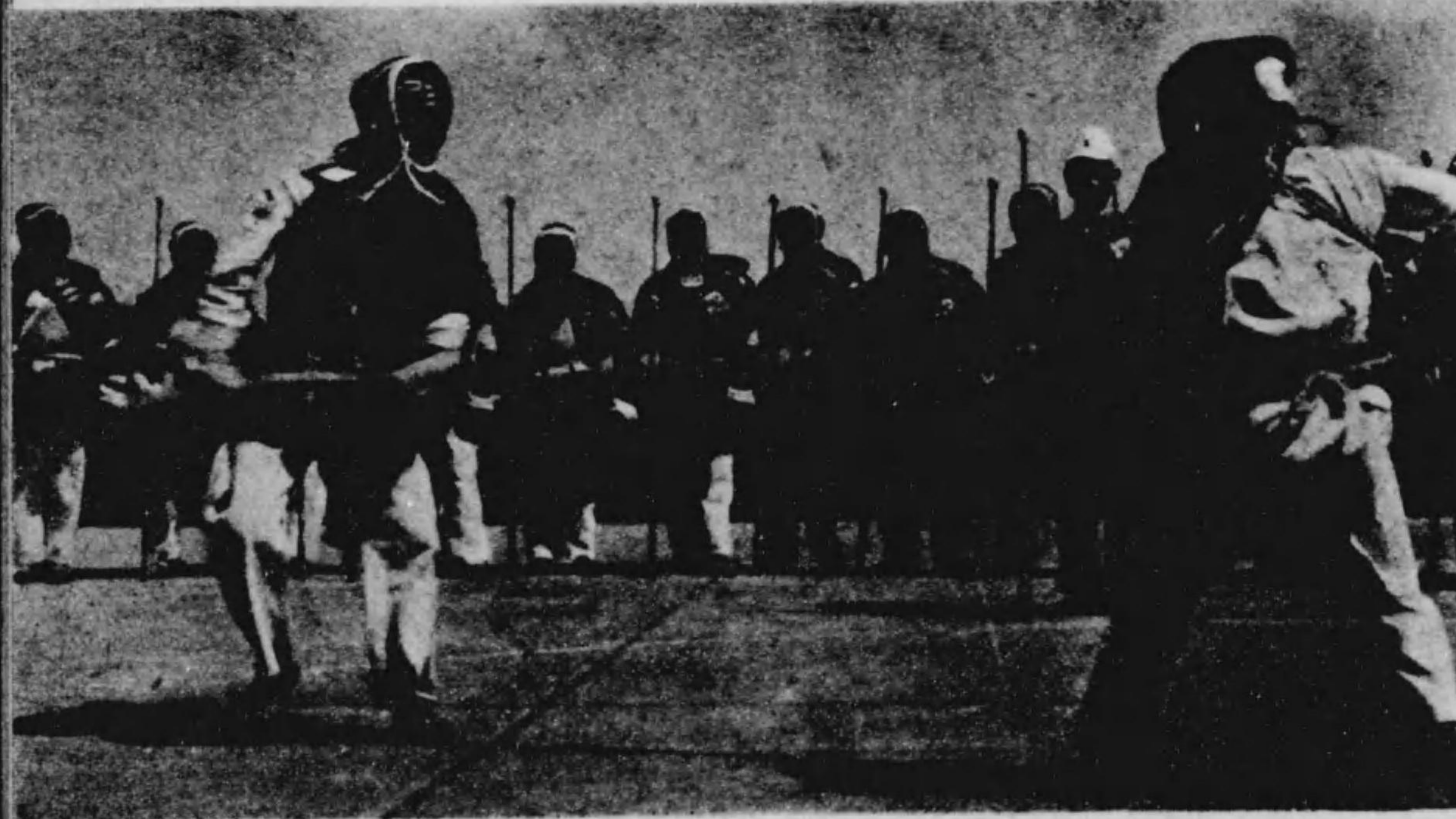
鐵棒に體を練る

全身の力をこめて徒手體操





る練を技武で場道剣大の敷畳百千 一界世に正さ廣のそ



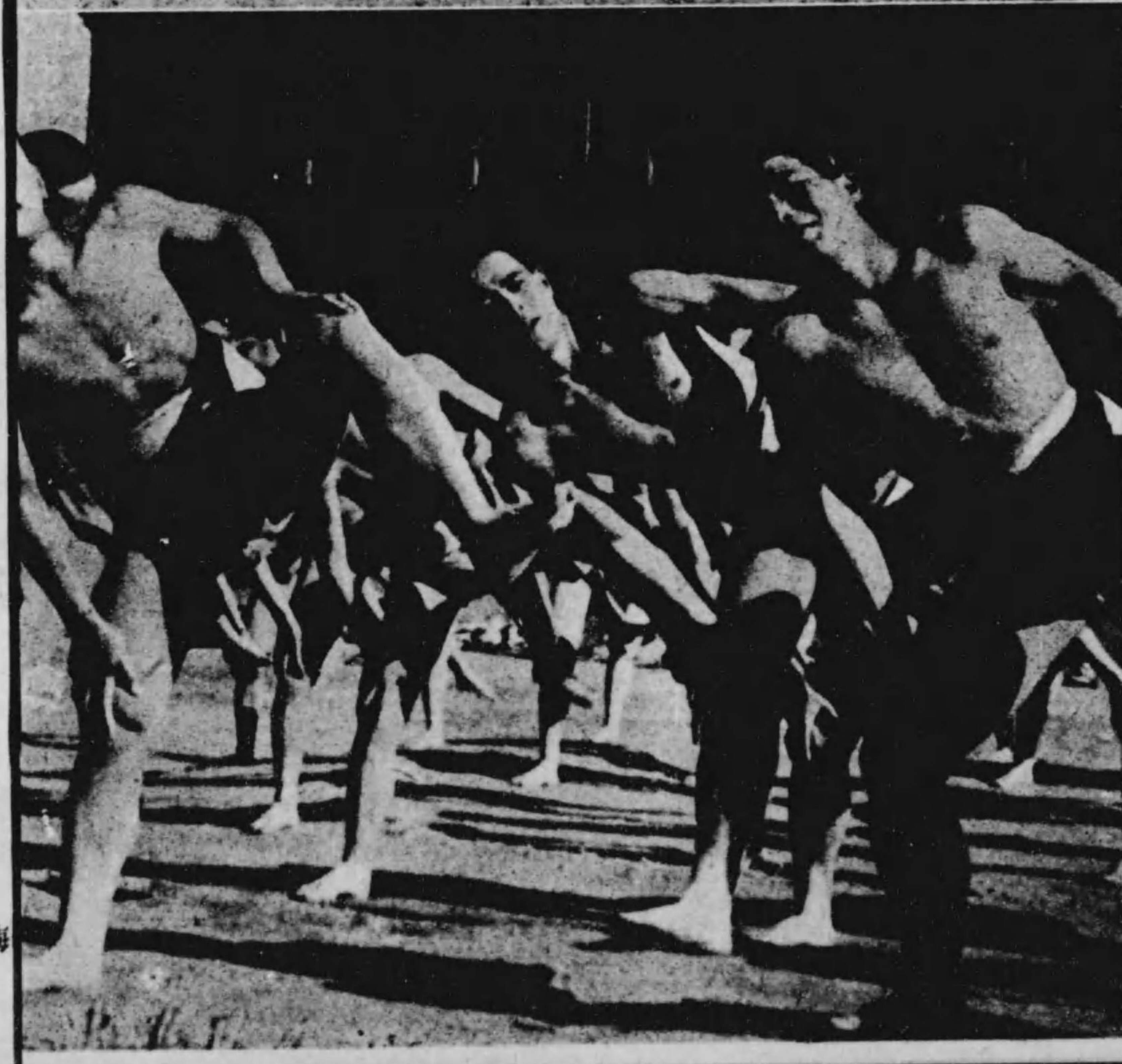
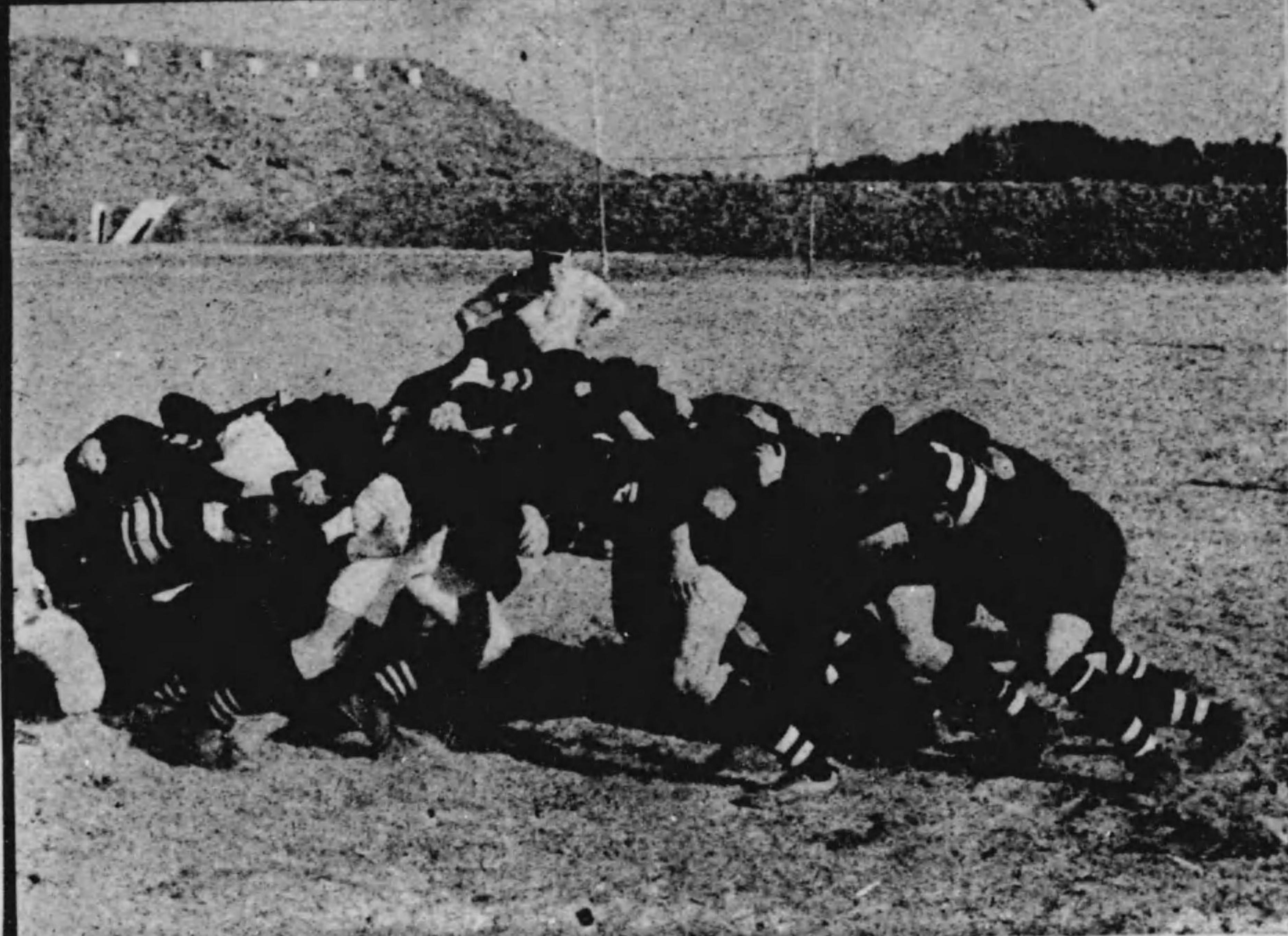
古稽の術剣銃く鋭も合氣



薫風を切つて帆走訓練



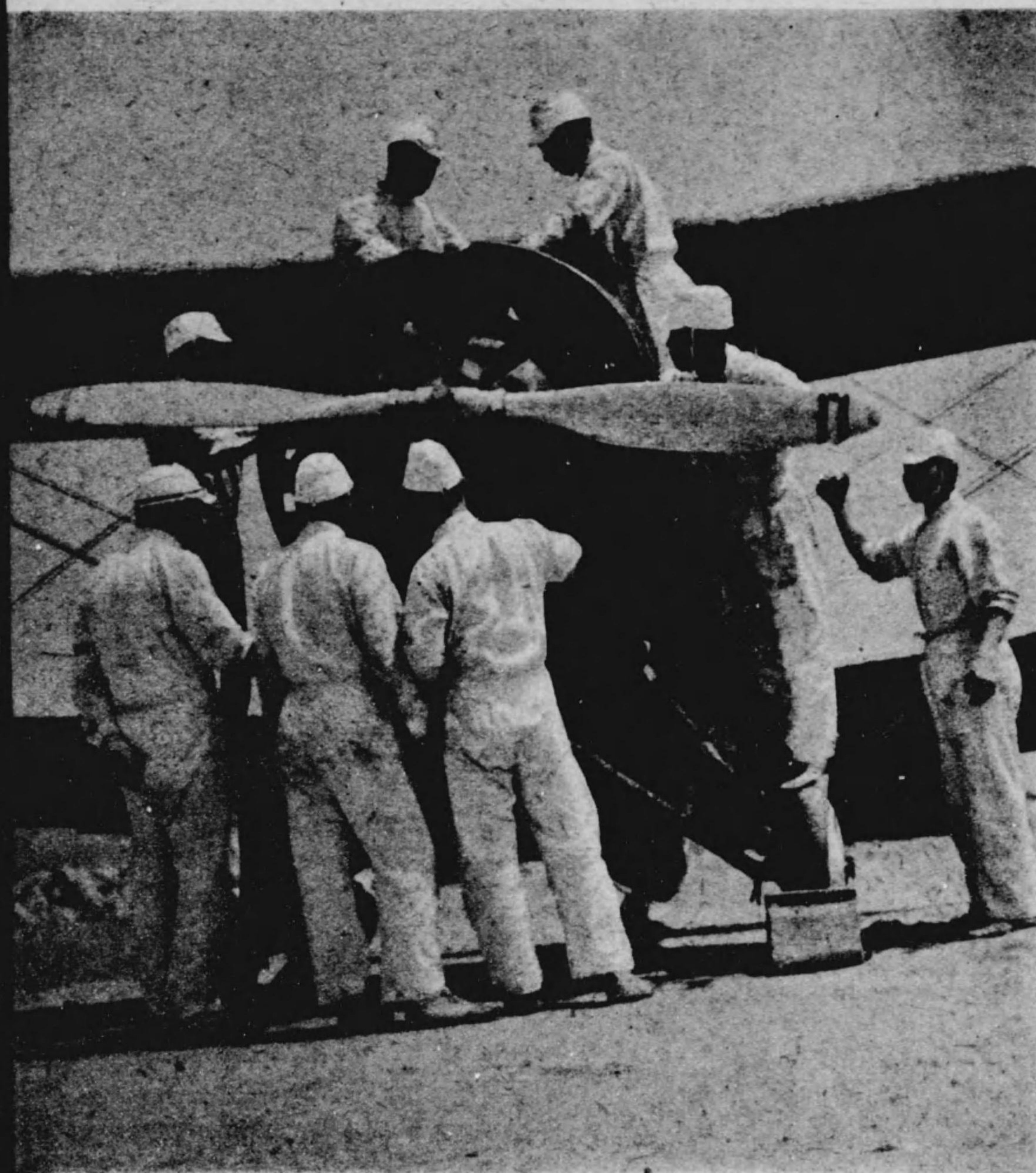
ぶ學を測天な切大てしと礎基の法航中空航や海



(上)技よりも意氣と力、天下無敵の豫科練ラグビー
(下)四股を踏んで 相撲の烈しい稽古も海軍獨特の傳統だ



適性飛行の前官操縦要領を教える



整備実習 航空機についでついでに造船を学ぶ



機上における射撃訓練



飛行兵士としての基礎が出来た
飛行練習生など驚かす飛行機

390.7 A82 3

9 6 9
1 1 5

序

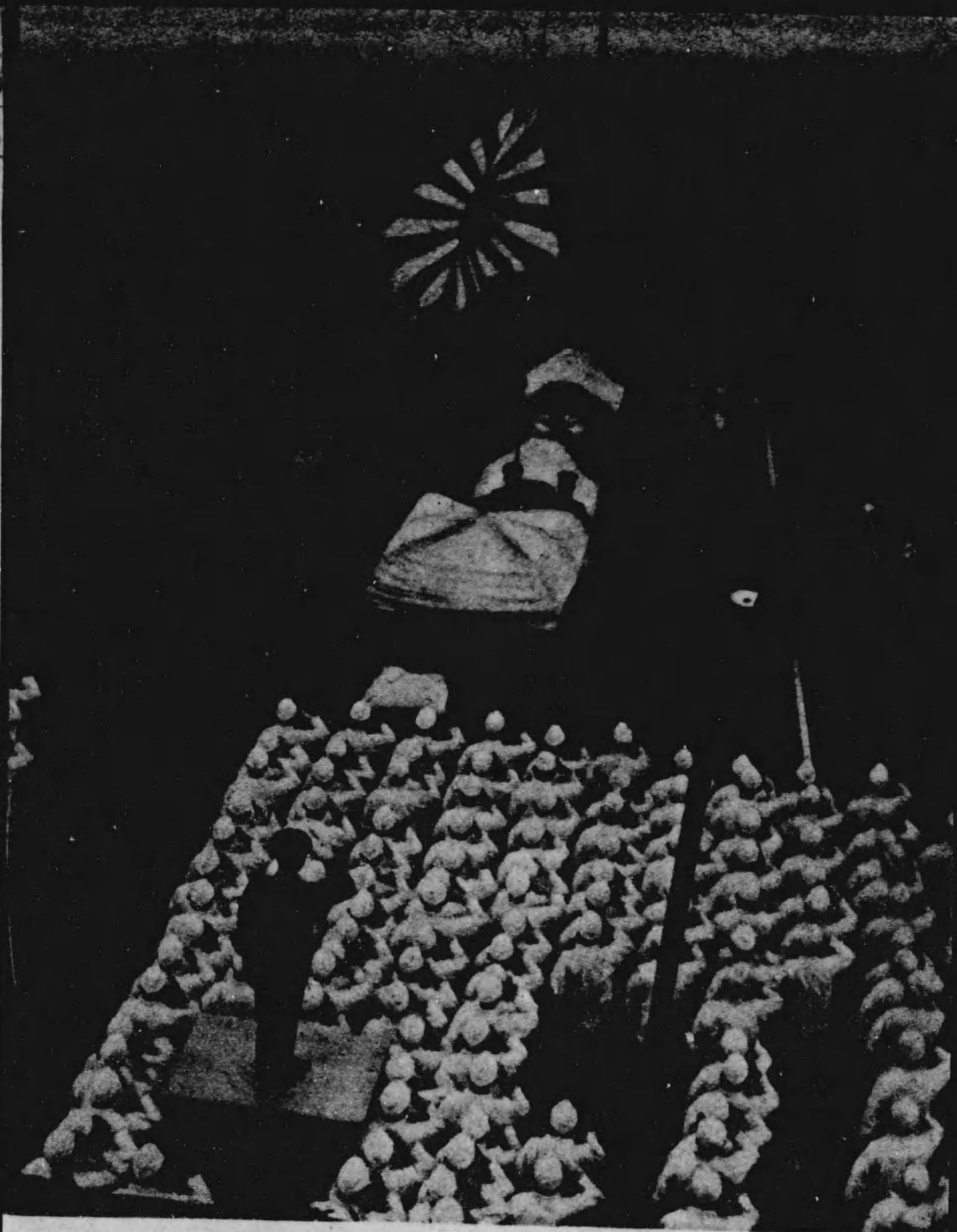
海軍少年飛行兵こそは、精強世界に冠たるわが海軍航空部隊の中核である。

願れば支那事變勃發以來こゝに五年、ひきつゞきわが國は驕米狡英と戦端をひらき、大東亞戦争を迎へたが、緒戦以來今日に至るまでの世界戦史に未だかつて見ざる赫々たるわが海軍航空部隊の活動は、昭和五年創設以來日夜御勅諭を奉體し、孜々としてよく奮勵、よく努力、黙々として大いに實力の向上と精神の錬磨とに心血を注げる海軍少年飛行兵に負ふところ極めて大いなるものがあるのである。

彼我の航空決戦は益々激化の一途を辿り、皇國の興廢は一にかゝつて航空兵力の充實整備にあり、而してわが海軍航空部隊の責務いよいよ重大を加へるときに當り、朝日新聞社が豊富なる資料と優秀なる筆陣とによつて、海軍少年飛行兵の制度、その生活、訓練等の實際をあますところなく平易懇切に紹介せられたる本書を公にせられたるは、誠に時宜に

序

一



習實務艦 嘯唳たる音のもとに軍艦はあがる

390.7 A82 3

969
115

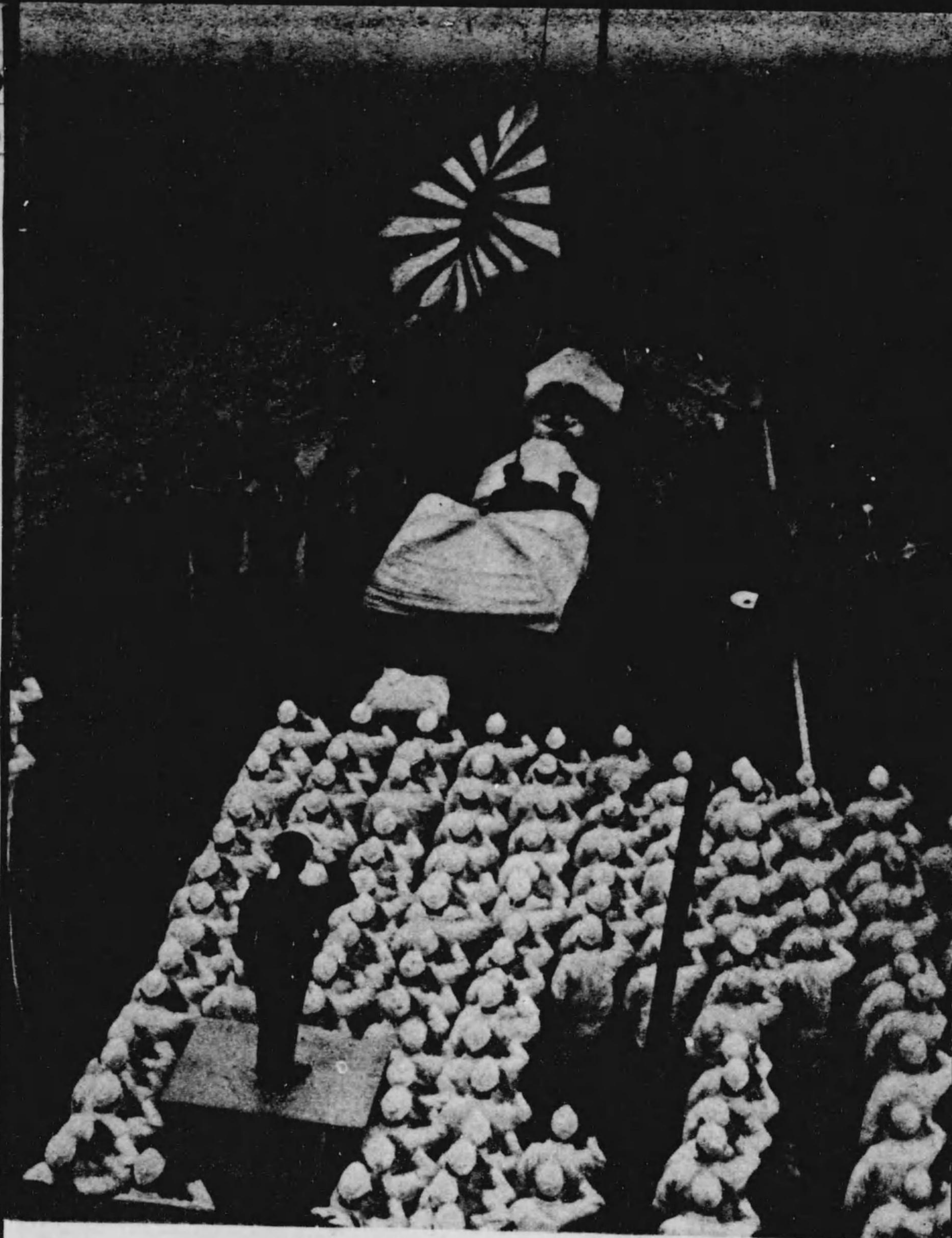
序

海軍少年飛行兵こそは、精強世界に冠たるわが海軍航空部隊の中核である。
 顧れば支那事變勃發以來こゝに五年、ひきつゞきわが國は驕米狡英と戦端をひらき、大東亞戦争を迎へたが、緒戦以來今日に至るまでの世界戦史に未だかつて見ざる赫々たるわが海軍航空部隊の活動は、昭和五年創設以來日夜御勅諭を奉體し、孜孜としてよく奮勵、よく努力、黙々として大いに實力の向上と精神の錬磨とに心血を注げる海軍少年飛行兵に負ふところ極めて大いなるものがあるのである。

彼我の航空決戦は益々激化の一途を辿り、皇國の興廢は一にかゝつて航空兵力の充實整備にあり、而してわが海軍航空部隊の責務いよいよ重大を加へるときに當り、朝日新聞社が豊富なる資料と優秀なる筆陣とによつて、海軍少年飛行兵の制度、その生活、訓練等の實際をあますところなく平易懇切に紹介せられたる本書を公にせられたるは、誠に時宜に

序

一



習實務艦 嘯囉たるた音のもとに軍艦はあがる

適したる企てといふべきである。本書は海軍少年飛行兵志願者にとつては必ずや絶好の手引書となるのみならず、一般讀書子にとつては、潑刺として無邪氣なる紅顔の少年たちが、必死の訓練と努力とをつみ、一度び廣茫萬里の戦空を翔つては勇戦奮闘、隨所に敵を撃滅し、一死よく盡忠の大精神を發揮し、悠久の大義に生くる海鷲日頃の鍊磨を知る一端ともなり、誠に感銘深きものがあると信ずる次第である。

皇國の隆替を決すべきこの大東亞戦争の歸趨は、むしろかゝつて今後にあるが、この一戦を完遂し、我等が祖先の偉烈をつぎ、皇國を磐石の安きにおかんとする熱血にもゆる少年諸子が、これによつてわが海軍航空に投ずべく奮起せられんことを切望してやまぬ次第である。

こゝに本書を廣く世に推奨し、一言もつて序文とす。

昭和十九年二月

海軍航空本部長
海軍中將

塚原二四三

はしがき

本社は昭和十二年に「海軍少年飛行兵」なる一書を公にしましたが、航空機の増産とともに本當に魂のこもつた、肚のすわつた搭乗員が數多く必要とされる現在、更にこの方面の認識を深めるために、再び本書を編纂し、海軍少年飛行兵となるのにはどうしたらよいか、といふ志願の手續を初め、入隊後の服務や生活、その後の改正された規則など、およそ海軍少年飛行兵についての一切を網羅、詳述して遺憾なきを期し、しかも最も權威ある書たらしむべくつとめました。本書が海軍少年飛行兵を志願しようとする全國の少年諸君の良き伴侶ともなり、併せて世界に冠たる帝國海軍航空部隊の眞の精神に觸れる一端ともなれば、極めて欣快とするところであります。

本書を編纂するに當り、序文を賜りました海軍航空本部長、海軍中將塚原二四三閣下を初め、種々御幹旋を賜りました海軍省報道部、同航空本部教育部、同人事局並びに資料の

はしがき

四

蒐集、寫眞撮影等に關し、終始絶大の御指導と御便宜とを賜りました土浦海軍航空隊、三重海軍航空隊に對し、深く感謝の意を表する次第であります。

昭和十九年二月

朝日新聞社

目次

序文

海軍航空本部長海軍中將 塚原二四三

はしがき

入隊するまで……………三

- 一、志願するにはどうしたらよいか
- 二、採用試験はどんなものか

採用通知……………一六

晴れの入隊式……………二六

準備教育……………三〇

練習生の一……………三六

卒業するまで……………五三

教練査閲……………五四

目次

一

橈漕訓練……………五七
 一萬米駢足競争……………六七
 寒稽古……………七一
 冬休み……………七五
 三重空數へ歌……………七九
 軍刀術……………八三
 整備實習……………八六
 演藝會……………九一
 精神をねる……………九四
 楽しい幕營……………一〇四
 行幸を仰ぎ奉りて……………一二五
 夏休み……………一三三
 水泳競技……………一三五
 帆走遠航……………一三一

東京行軍……………一三六
 釣床教練……………一四一
 兎狩り……………一四六
 面會……………一五一
 辻堂演習……………一五五
 日曜外出……………一六一
 機上適性……………一六七
 艦務實習……………一七五
 出港……………一八二
 艦内の生活……………一八四
 軍艦旗掲揚……………一九一
 戦闘訓練……………一九四
 海上軍航空隊へ……………二〇五

(附 録)

海軍少年飛行兵を志願する人々のため.....二〇

海軍乙種飛行豫科練習生になるには

海軍甲種飛行豫科練習生になるには

海軍志願者身体検査規則

試験問題

海軍少年飛行兵實戦記

戦闘機隊員.....二四七

敵に會へる嬉しさ

後へ眼がつく

敵船団上五十米の空戦

攻撃機隊員.....二六六

基地の朝

真晝の敵襲

夜間空襲、敵機炎上

装 幀 山 路 眞 護

海軍關係寫眞の複寫複製は海軍省許可濟(第二二六號及第一四二〇號)

海軍少年飛行兵

入隊するまで

海軍少年飛行兵（飛行豫科練習生）とひと口にいつても、詳しくいふと甲種飛行豫科練習生、乙種飛行豫科練習生、丙種飛行豫科練習生の三種に分れてゐる。

わが海軍では航空機搭乗員たふじょうあんは若い少年たちに限るといふ點に着目して、列強にさきがけて海軍少年飛行兵の制度を設け、昭和五年横須賀の飛行豫科練習部に初めて高等小學校卒業程度の少年たちから約九十名の雛鷺を採用した。これが支那事變、大東亞戦争を通じて赫々たる偉勳をたて「世界の脅威」の的となつた海軍少年飛行兵の濫觴らんしやうであるが、その成績の良好なのに鑑みて、昭和十五年十一月、霞ヶ浦海軍航空隊水上班のあとに一個の航空隊となつて獨立し、土浦海軍航空隊となつたのである。最近では航空決戦が國家の興廢をも左右する重大性をもつてくるやうになつたので三重海軍航空隊も生れ、以後も引きつゞ

益々大擴充が行はれ、將來の海軍航空隊は全部少年飛行兵の出身者をもつてあてようといふくらゐになつてゐる。なほ昭和十八年五月土浦海軍航空隊司令官として、久邇宮朝融王殿下御自ら御就任あそばされたのをみても、いかに當局がこの制度に熱意を注ぎ、また少年飛行兵たちに深い期待をもたれてゐるかが判る。

さて少年飛行兵は、初め高等小學校を卒業した者だけを採用してゐたが、益々大量に有爲な少年を必要とするため昭和十二年からは中等學校三學年修了程度の者にも志願の道を開き、これを甲種飛行豫科練習生とよび、從來の者を乙種飛行豫科練習生とよぶこととしたのである。従つて甲種は一般の學力の基礎が出来てゐるために、それだけ豫科練で勉強する時間が少くてよいので、一年ばかり在隊日數が短くなる。それ以外には乙種と何の差別もないのであつて、所謂そこに甲乙がある譯ではない。

また丙種といふのは、一般志願兵として既に海軍に入つてゐる者の内から飛行兵として適當と思はれる者を採用するのであるから、これは一般の諸君には差當りのべる必要がないので、こゝには觸れないことにする。

一、志願するにはどうしたらよいか

海軍少年飛行兵となるのには、一體どんな資格があるかといふと、たゞ日本男子で甲種は數へ年十六歳から二十一歳まで、乙種は同じく十四歳以上二十歳未満といふ年齢の上に僅な規定があるのと、甲種は中等學校三年修了の程度、乙種は國民學校卒業程度の學力があればよいので、別にこれといつて難しい規定は何にもない（『附録』參照）。學力であるから、別段學校を出るとかいふ學歴はなくともよいので、例へば國民學校を卒業して職業につき、働きながら中學三年修了程度までの學力を身につけ、年齢さへ以上の規定に合つてゐれば甲種飛行兵を志願することが出来るのである。この「程度の學力」といふのもしよく判らなければ、知合ひの學校の先生にたづねてみればすぐ判る。早くいへばこの年齢内の者で以上の學力があれば、立派に應募資格がある譯である。

それではどんな手續をすればよいかといふと、毎年各府縣知事から翌年採用される海軍

志願兵募集の告示が出たり、海軍人事部のポスターが貼り出されたり、新聞、雑誌、ラジオなどでも知らされるから、志願したいと思ふ者は、飛行兵（飛行豫科練習生）を志願したい旨申出て、この本の附録にのつてゐるやうな規定された志願書をもらひ、それに必要な事柄を記入して差出せばよいのである。その書入れ方も役場の兵事係がよく知つてゐるから、判らないことがあつたら何でもきいてやればよいが、願書の締切期日については各地方、殊に暖い地方と寒い地方などでは多少ちがふ場合もあるから、定められた期日におくれないやうにしなければならぬ。そしてもう一つ注意したいのは朝鮮、臺灣その他外地にゐる者は、一應内地に寄留してから志願をすることである。この寄留の方法も役場へいつて訊けば教へてくれるから少しもむづかしいことはない。また破産の宣告をうけて復権しないものや、禁錮以上の刑に處せられたものは残念ながら志願出来ぬ。

なほつけ加へれば、この海軍志願兵の志願といふものは、兵役法で定められた規定によつてゐる極めて崇高なもので、この志願はどんなものにも妨げられることはないのである。例へば現在徴用令によつて徴用されてゐる者でも、或は年期契約の下に雇傭されてゐる者でも誰でも志願出来るのであつて、この志願の意志はどんな人も抑へとどめることは出来ないのである。たゞ父兄の承諾さへうれば、堂々と志願出来る性質のものだから、一旦志願しようと決意したら、志願の氣持をかへずに、これを貫くことである。

とも角、以上のやうな志願の手續をして役場の兵事係へいつて願書さへ出しておけば、あとは規定された期日に検査をうければよいのである。

二、採用試験はどんなものか

(イ) 第一次の検査

願書を出しておく、やがて第一回の検査の通知がある。この検査は他の海軍志願兵と同様に海軍の徴募官が各地方を廻つて施行してゐるのである。

試験の場所は、その府縣での大きい都市の有名な公會堂とか講堂であるから、その場所や時間を間違へないやうに、風呂へは當日か前日必ず入つて身體を清潔にし、肌着、衣服

は粗末でも汚れてゐないものを身につけて、規定の時間よりは必ず早目に、乗物があるところは乗物でもし故障しても十分間に合ふやうに餘裕をみて出かける方がよい。

いよいよその時間となると、徴募官からいろいろと注意や訓話があつて、乙種飛行豫科練習生志願の者は他の兵種の志願者と一緒に先づ學力試験が始る。これは讀書と數學の二科目であるが、これは國民學校高等科の教科書をよく勉強しておけば譯なく出来るやうな問題ばかりだから、一次検査の學力試験は大して骨を折らずともすむ譯だ。

たゞ答案を書くときは

一、まづ第一に番號と自分の姓名を必ず記入すること。これを忘れると折角よい答案を書いても何にもならないから、よく氣をつけることである。

二、次に問題は何度もよく讀みかへして、その意味を正しくとつて、答案を書くがよい。

三、答案の字は正しく丁寧に、また要領よくまとめること、誤字脱字があるかどうか、よく繰りかへして見て、與へられた時間一杯つかつて、よい答案を作ること。

大體、以上の點によく注意してかけば、學力試験もさしたることはない。

學力試験が終ると體格検査である。これは一般志願兵よりは幾分きびしいやうにいはれてゐるが、實際は年齢相應に發達してゐてどこにも故障がなければ立派に合格することが出来るのだ。勿論志願する人の素質のよし悪しは海軍航空隊の實力を左右するのであるから、みす／＼ひどい缺點のある者は採用しないが、たとへ身長や體重が多少足りなくても、將來伸びる可能性のある者なら採用されると思ふ。

また現在少年飛行兵として入隊してゐる人達の中にも、かつて心臟脚氣を患つた者もあるし、三年つゞけて志願して三年目にやうやく合格したといふ人もある。またとても風邪をひき易く試験の頃となると生憎と風邪をひいて駄目となつてゐたが、これでは少年飛行兵はおろか、何にもなれないと思つたので、山を歩いたり運動をして、す／＼で體を鍛鍊したので、風邪一つひかなくなり、これ亦目出たく検査を通つたといふのだから、弱い人は弱いなりに平素から十分鍛鍊して丈夫になればきつと目出たく採用となるのである。

この身體検査に通ると簡単な適性検査がある。この検査は係官にいはれた通りを一度練

習して、二度目に本當の試験をうけるやうになつてゐる。だからこの検査では最初係官からいはれた事をよくきいてゐて、いざといふ時にあわてし思はぬ失敗さへやらなければ少しも難しいものではない。

いろ／＼と検査されるけれども、どれもこれも大したことはないのだから、評判だけで怖氣ついて、いつぱし少年飛行兵になりたいと思つてゐるのに検査に怯えて斷念する必要は少しもない。自分一人で取越苦勞をして検査を遠慮するのは愚の骨頂で、案外検査官がみれば何でもないものもあるのだから、受けたいと思つたらどん／＼受けてみることである。しかも、ひとしきりは、數十倍の志願者が殺到して相當な試験地獄のやうに思つてゐる人があるかも知れないが、今は戦局の進展につれて航空機搭乗員はいくらあつても足りないのであるから、自分の體と學力が規定に合つてさへあれば、無制限に採用していただけるのであるから、競争率などといふことは念頭におかなくともよいといへる。

さて、この三つの検査に合格すると一人々々徵募官の前によび出されて易しい口頭試問が行はれるが、これは思つた通りを正直に正確にテキパキと答へればよいのだ。別段何の心配もいらない。かうして全部合格した者には合格證が渡されるから、その證書を大切に保存して第二次検査に呼出されるのを待てばよいのである。この試験はすべて一日で終了する。

甲種の方もすべて以上の通りである。たゞこの方の學力試験は、第一日（數學、物象學）第二日（國語漢文、地理歴史）といふやうに二日間にわたつて行はれる。

なほ甲種は中學三年修了が標準ではあるが、商業學校や農學校から入つた者に非常に優秀な者がゐて、ある年には一番が高崎商業、二番が新潟商業、三番が長岡商業の出身者の順で豫科練を卒業したこともある。だから中學校でないからといつて遠慮などすることなく、實業學校の生徒も志あるものはどし／＼受験することだ。

要するに甲種、乙種を問はず第一次検査は軍人として適當であるかどうかをみるのが眼目なのである。

それからこの少年飛行兵を志願する前には是非とも兩親か後見人の承諾をうけておくことを忘れてはならぬ。

(ロ) 第二次の検査

第一回の試験に合格してもまだ安心は出来ない。こゝでしつかり勉強もし、體をきたへて第二次の検査にそなへるのが大事である。この二次検査は第一次にパスした人々へ通知をして、役場から旅費を支給して各鎮守府毎に各々の航空隊へあつめて行はれるのである。

志願者が横須賀鎮守府なら土浦海軍航空隊、吳鎮守府なら吳海軍航空隊、佐世保鎮守府なら佐世保海軍航空隊へゆくとその練兵場には数名の下士官がこゝと笑顔で待ちうけてゐる。そして第一次を突破した譽の候補者たちは所屬の府縣によつて大體幾つかの組に分れる。これを班といつてにこゝとしてゐる下士官の方々が假班長として第二次検査の間、萬事につけて面倒をみて下さるのだ。

試験はこゝに寝起きして大體一週間ばかり行はれるが、これには身體検査、智能検査、心理適性検査、人物考査等が行はれる。

第二回目の身體検査は第一次のと大體同じだがたゞ一層綿密に行はれる。この身體検査では第一次検査以後、健康への注意が足らなかつたため不合格となる者もあるからよく氣をつけなくてはならない。

この特殊身體検査は、檢熱、檢尿、血液型と血沈、レントゲンによる胸部の検査、呼氣力、水銀柱保留、聽器、鼻、咽喉、血壓、身體均衡(轉倒試験、片足直立、跳躍歩行)、回轉椅子でぐる／＼と廻して眼球のふるへをみる後發性眼球震蕩、感覺反應、筋神などをみるが、特に重視されるのは眼の検査である。

飛行機操縦士として、眼が大切なことはいふまでもないが、これは屈折器、視器、光覺力、識色力、調節機、眼精疲勞、視野、眼筋平衡、實體視器などと九種類近くも行はれる。しかしこれも平素から勉強するときは立派な姿勢で、照明にも氣をつけてやつてゐれば格別むつかしいことではない。以前は視力一・二でなくては採用しなかつたが、最近では當分の間、一・〇までゆるめられてゐる。殊に眼は平素いくら注意してゐてもその時々々の體の状態によつて甚だ影響されるものであるから、検査が迫つたら規則正しい生活をし

て、夜更しや睡眠不足や過度の勉強はさけていたゞきたい。

航空隊の方々も「眼さへよければきつと立派な飛行兵に仕上げてみせます」といつてをられるくらゐだから、よく氣をつけていたゞきたい。

次に心理適性検査であるが、これは操縦動作検査、協應操縦動作、速度目測検査、複雑選擇判斷検査、處置判斷検査、形態記憶検査、間歇記憶検査といふやうなものである。名前はどれもむつかしさうであるが、普通の體の者ならば、難なく通つてしまふ。

二次検査は結局飛行機搭乗員として適當かどうかとみられるのであるが、この二次検査の間には、ずつと兵舎に寝泊りして兵食を給せられる。だから少年飛行兵の勇ましい日常生活にもふれることも出来れば、また假班長から時々實戦の話も海軍航空のお話もうかゞふことが出来る。かうしてゐる間には身許調査も行はれ、全部一旦郷里へかへされ、改めて入隊の知らせをまつのである。

家にかへつて待つてゐると、試験されたときによつて異なるが甲種は大體四月一日と十月一日、乙種の方は六月一日と十二月一日に入隊せよといふ通知が、この入隊日の半月位ま

へに諸君の手許にくる。

さうしたら益々體には注意して、入隊時の身體検査にそなへてゐれば、名立たる海軍少年飛行兵の榮冠は燦として諸君の頭上に輝くのである。

採用通知

採用通知だ！苦心の甲斐あつて今ぞ一次、二次の難關もパスしたのだ。一生忘れられない感激の日である。全國民期待の中心たる飛行豫科練習生となる日ももう旬日の後に迫つてゐる。體一杯に光榮と名譽とがみち、楽しい想ひが眼前をとぶ。

家族は勿論、親戚友人も「しつかりしてくれ。立派な搭乗員になつて敵機をやつつけてくれ」と心から勵まして下さつた。

いよ／＼家を出る日。

祖母は「お前は君に捧げた體だ。家のものでなくお國のものだ。一步家を出た以上は家の敷居がまたげると思ふな」といつた。父にも挨拶をした。父は「俺はまだ十分働けるから家のことは心配するな」と腕をさすつて勵ましてくれた。けれど頭をみるとひよろ／＼

とした毛が少しばかり淋しさうに立つてゐた。自分は「なあ／＼にお父さん、今にお父さんが田圃を打つてゐる上を飛んでみせるよ」といつて別れた。

郷社に詣で武運の長久を祈つて汽車にのる。

長いが嬉しい汽車の旅。航空隊のある土浦とは、三重とは一體どんなところだらう。地圖を出して楽しく夢想してみる。航空隊だから、見渡す限り廣々とした野原だらう。空には飛行機がとんでゐるだらう。

驛へつくと隊の方が見えてをられて、すぐ航空隊差廻しのバスにのつて隊へ向ふ。隊門の兩側に我らを歓迎するかの如く、日章旗がひるがへつてゐるのも忘れられない。

初めてみる土浦海軍航空隊、三重海軍航空隊。入る場所こそ違へ、共にいかめしい衛兵所、廣々とした練兵場、廣大でよく清掃のゆきとゞいた清潔な兵舎、……すべてが珍しく勇ましく、驚くばかりであつた。

入隊者一同は廣大な練兵場の一角に府縣別に、まち／＼の服装で、それ／＼手には風呂敷包などを下げて並んでゐる。見渡せば流石に各府縣から選ひ選ばれたあの身體、この

姿。この元氣一杯な少年達が今日からは同じ隊に起居して生死を共にする戦友となり、兄弟となり、海軍精神の權化ごんげとなつて大空をとび廻るのかと思ふと、思はず力強さ頼もしさが胸にみちて元氣は百倍した。簡単な點呼の後、それ／＼病室へいつて軍醫官から入隊直前の最後の身體検査をうける。

入隊の前の晩は、流星にこの検査ではねられたらどうしよう、故郷の人たちはあんなに盛大な旗の波で送つて下さつたのにと思ふと父母、近親の顔などが眼先にちらついて、なかなか眠れなかつたが、この最後の難關も二次検査がすんでからも十分身體に氣をつけてゐたので難なく通過してしまふ。

身體各部の検査がすんでゆく毎に、一抹の不安にとらへられてゐた心もだん／＼と軽くなり落着いてきた。最後に検査官の前にいつて判定をうける。検査官の手許には今までみられた自分の體の状態が詳細にかき出されてあるが、それに眼を通して最後の決を下されるまで、不動の姿勢で立つてゐる一、二分の間が、どんなに長かつたことであらうか。

「合格！」

遂に決定した。

底力のある検査官の一語は、さながら天の恵みのやうに尊いものに響いた。

あゝ！ 今ぞ難關を突破して憧れの飛行豫科練習生となれたのだと思ふと、頭の中にかぶ肉親の人々の顔々々が、一度ににこ／＼と笑ひ出して、國を出るときの歡呼の聲が再び力強く胸の奥から突きあげるやうにわいてくる。

自分は〇〇分隊第〇班と定められたので、第〇班と貼紙のしてあるところへゆくと、もう四、五人同じ仲間がきてゐる。みると誰も彼もがうれしさうな希望に眼を輝かせて、新しい決意が一文字に結んだ口許にみなぎつてゐる。思はず自分も

「ようし、今日からは、どんな猛訓練でもやり通すゾ」

と咳かすにはゐられなかつた。

〇班の仲間は次々とやつてくるが、肉づきのよい者、背の高い者、一見してみんな自分より大きくガッチリしてゐるやうな氣がして仕方がない。町でもよい體の方だとほめられてゐたが、こゝへ来てみると忽ちベチャンコだ。こんな大きいのと一緒にやらねばならぬ

かと思ふと一寸壓倒されたやうに思つたが、こゝが負けじ魂の發揮しどころと思つて頑張る決意をますます固めた。

分隊の總員が集つたところで、直接我々のお世話をして下さる分隊長、分隊士、班長の紹介が行はれ、終つて兵舎へゆく。そこで身長の順に整列すると、班長から衣囊が渡された。中を開いてみると、軍服、襦袢、袴下、靴下、靴まで全部入つてゐる。

「班長、これは全部私のものですか」
と誰か感嘆のあまり質問する。本當に全くよくこんなに細かく氣を配つて揃へて下さつたものだ。

班長が「うん、さうだ」
と當り前のやうな顔をして答へられると

「うわッ、凄いな」
と一同大喜びだ。

班長は卓子の周圍にみんなを集めて點數を調べるとともに、いろいろと名前を教へて下

さる。

「さ、か、これが事業服だ。お前たちが今少したつて整備實習をするときだとか、その他いろいろ諸作業のときに用ふるものだ。その下にある頸のところくびに黒い筋の入つたのは冬シャツだ。ボタンが後の方へついてゐるから、着るときに間違へるな」

見るものが一々珍しい。

衣囊の説明が終ると手箱や自分の持物の整理で目のまはる忙しさだ。大分整理のついたころ、家からきてきた學生服をぬいで、新しい軍服を身につける。

皆は待つてゐましたとばかり憧れの軍服にきかへる。服をぬぎシャツをぬぎ、丸裸になる。新しいシャツに七つ釦ぼたんの新しい制服をきるともう一人前の兵隊さんだ。さあ、これで姿も形も軍人らしくなつた。心まで今までとは違つてきたやうだ。しかも、この同じ制服のやうに、皆が全部同じ心になつて、國家のためにつくすのかと思ふと、また新なうれしさがかこみあげてくる。

「どうだい君。い、いだらう」

初めて隣りの仲間が聲をかけて、にこ／＼顔で擧手の禮をする。その姿をみるともうすつかり兵隊さんだ。

母親らしい附添の人が入つてきて、初めてみる息子の軍服姿をみて悦に入つてゐるかと思へば、今まで着てゐた學生服を小包にしてゐる者もある。風呂敷に包んで面會所で待つてゐるお父さんのところへ、鬼の首でもとつたやうに喜んで今日の晴姿をみせに一目散にかけ出してゆく者もある。お父さんはきつと「軍人らしくなつた」といつて喜ばれてゐるにちがひない。

軍服を着終ると班長に現金や貴重品をあづける。班長は

「金をあづける者はこつちへ來い。ない者は向側へゆけ」と二、三回もくりかへしていはれたが、悲しいかな、自分には言葉がよくきくとれない。「軍隊といふところは随分早口だな」と半ば感心し、半ば呆氣にとられてゐると、今度は

「ぼや、ぼやするなよ」

と呶鳴られる。自分はこれに非常におそれをなして、餘計氣があせつた。

どうも、勝手がちがふので、見かけだけは少年飛行兵だがまご／＼する。

「服を着終つた者は集まれ。今から釣床の釣り方を教へる」

班長の聲にバタ／＼とまた卓子の周圍にあつまる、一つ／＼手にとるやうに丁寧に教へて下さる。

「さいか。判つたか。皆もう一度やつてみる」

といはれて、やつて見たが、なか／＼難しい。力の入れどころがあるのだらうが、判らない。矢鱈に力を入れてみるが、締らない。今日から何年間か判らぬが、毎日毎晩眠らなければならぬ釣床が上手に扱へないやうでは駄目だと思ひながら、一生懸命やつてみるが、なか／＼班長殿のやうに樂にいかない。やつとのことで結んでみると、蛇が蛙をのんだやうである。

烹炊所へ食事當番として食事をとりに行くことも一々丁寧に教へられた。烹炊所へいつてみると、白い事業服をきて班別に區分けされた棚から飯やお菜を受とりにきてゐる。食卓番は、一班に四人ゐて、交代でとりに行くのである。食事をとりに行くのにも、歩いて

五分位はかゝりさうだ。航空隊はどこまで廣いか、底が知れない位である。

食事がすむと、故郷や友人にあてし、入隊のよろこびを書き送る。一等飛行兵になつた先輩の補習生から、再び釣床の釣り方を教へられて初めて隊内の釣床にねる。

もう周囲は暗く、電燈がついてゐる。

胸が一杯でねたやうな氣がしない。ねようと思つても眠られない。なれぬ釣床が左右にゆれる。先刻手紙をかいた故郷の人達のこと戀しく、悲しいやうになつてくる。

「だが、何を馬鹿な！」

小さくても、軍人が悲しがつてどうする。

親が戀しかつたならば、立派な飛行機乗りとなつて、一日も早く敵をやつしけにゆくのだ。そしたら結局親に逢ふのも同じではないか。

晝間班長や教員のいはれたことが思ひ出される。その聲こそ大きい、心の中にはいふにいはれぬ親切味がこもつてゐた。それは力強いやうなやさしい聲だつた。

まるで一日で、兄弟のやうになつた同じ分隊の者がこんなに澤山釣床で眠つてゐるでは

ないか。

「お前たちの體は、俺がもらつた」といはれた分隊長、分隊士、班長、——同班の仲間たち！ 軍隊とはこんなにも和氣藹々としたものかと沁々とうれしかつた。

明日からは張切つた新しい生活が始るだらう。

晴れの入隊式

今日は晴れの入隊式だ。

清らかな廣々とした練兵場の號令臺の前には、いづれも七つ釦をさらめかせ新しい軍装に身をかためた雛鷺たちが整列した。

「氣をつけ」

の號令一下、凜然とした氣が一瞬びりつと漲ると思ふ間もなく、嚙曉たる「君が代」のラツバにつれて、輝く大軍艦旗は燦たる陽光に照らされつゝ、靜々と橋頭高く掲げられてゆく。

まづ鎮守府司令長官は、號令臺の左右に各教官威儀を正して居並ぶ中を、悠揚と臺上へのぼられ、恭しくまた朗々と軍人に賜はれる御勅諭を奉讀された。

つゞいて、號令臺に立たれた航空隊司令は答禮を終られると、深い慈愛にみちた眼ざしで一同を見廻されて、徐ろに口を開かれた。

「何某以下〇〇名、海軍二等飛行兵を命ず」

その聲は凜として四邊を壓し、我等の胸奥深く激しい感動をまき起さずにはゐなかつた。一同は感極つて、思はず打ちふるへる手で敬禮をすると、司令はつゞいて

「建國以來未曾有の大戦下、諸子は只今かねてより切望せる海軍飛行豫科練習生を命ぜられ、勇躍當隊に入隊し、國家の干城としての教育をうくることとなつたのであるが、誠に諸子の本懐これにすぐるものなしといふべく、大いに慶賀にたへない。

今や帝國の國運を賭しての大戦は、御稜威の下、忠勇無双、世界最精強なるわが皇軍の力戦奮闘によつて開戦以來着々として大戦果をあげ、眞に世界を驚倒せしめる不動の戰略態勢を獲得したが、その前途は極めて遠遠にして、しかも戦の勝敗は實に航空決戦の歸趨如何にかゝつてゐることは、明々白々たる事實である。即ち、帝國の存亡は一にかゝつて諸子の双肩にあることを深く肝に銘ぜよ。

この日、この時、帝國海軍航空隊の一員となられたる諸子の重責と光榮とはたとへるにものなく、いづれの感激かこれに勝るものがあらうか。なほ當隊における諸子の教育は、海軍航空の特性に鑑み、精神教育に重點をおくことは説明を要しないところである。

諸子は克くこゝに思ひを致し、いよく自重、いよく勵精、その本分に邁進し、本教程において優秀なる成果をあぐるは勿論、諸子の先輩諸君の雄壯なる精神をつぎ赫々たる武勳を汚さざるやう奮勵努力せよ」

あゝ、憧れの希望に今ぞ花咲く。

清らかな感激と、盡忠報國の雄々しい決意とに皆の眼は金色に光つてゐる。

更につゞいて御眞影奉拜の位置につき、畏くも 兩陛下の御尊影を眼のあたり拜し奉る光榮に浴し、今更ながら皇恩のかしこさ、有難さに感激し、全力をつくして國難を打開し、宸襟しんきんを安んじ奉らうと固く心に誓つた。

今日からは大日本帝國海軍軍人なのだ 陛下の股肱こたうなのだ。しかもわが無敵艦隊の第一線に立つのだ。

今日の決心を一生忘れず一日も早く一人前の軍人となつて戦空に赴き、憎き敵空軍を叩きのめさう！

決意も固く見上ぐる青空には、爆音勇ましく先輩「海の荒鷲」が、今日も豪快比なき猛訓練を展開してゐるではないか。

準備教育

全國から選抜された一騎當千の少年飛行兵であるが、入隊したばかりでは軍人らしい歩き方も知らなければ、擧手の禮の要領さへも知らない。また軍隊内での口の利き方も判らない。そこで入隊するとすぐに準備教育が始る。大體豫科練は將來飛行兵となる者に基本となる教育を施すところであるが、入隊當初のこの準備教育はそのまた基礎であつて學生服を軍服にさかへたばかりの少年たちに軍人としての恰好をつけるのである。

陸戰、短艇漕法、御勅諭衍義、口達傳令等、海軍軍人として是非とも必要なことを教へこまれるのである。

朝ももうちやんと上級の少年飛行兵なみに起床して釣床をくゝる。昨日は班長が何度も親切に教へてくれたのであるが、もう忘れたのが大分ある。覚えこんだ者は忘れた戦友に

手傳つてやる。そして洗面がすむと駈足で練兵場に集合して宮城遙拜、明治天皇の御製奉唱があつて體操がある。朝の掃除は油マッチをもつてやる。マッチとは燐寸でなくて油のついた雑巾のことをいふのだ。火をつける燐寸とマッチの間違ひからいろ／＼の喜劇が起る。

掃除や食事がすむと、先づ軍人精神をねるのが目的であるから、總員講堂で御勅諭の講解がある。それは 明治天皇が軍人に賜はつた五箇條の御聖訓である。

聖訓 五條

- 一 軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ
- 一 軍人ハ禮儀ヲ正クスベシ
- 一 軍人ハ武勇ヲ尙ブベシ
- 一 軍人ハ信義ヲ重ンズベシ
- 一 軍人ハ質素ヲ旨トスベシ

軍人として一時も忘れることの出来ない尊い御訓へである。一同緊張して教官の講義に

耳を傾ける。これは少年飛行兵としての、皇國の軍人として一生を律すべき大きな覺悟と心構へである。この御訓へにそひ奉るやうに己をみがき、この御訓へに背き奉らぬやう努力せんと心に誓ふのである。

また全國各府縣からあつまつてくるので九州辯もあれば東北訛もある。「さうやろか」などといふ大阪言葉もあれば、「さうするん」などといふ群馬言葉もある。それを正確明快で語尾の正しい軍隊の言葉づかひになほされる。これを口達傳令といふ。

その合間には、来る日も来る日も陸戰教練である。初めの内は風にふかれながら、たゞもう無闇と廣い練兵場の真中で、分隊長か分隊士からその日の實施項目が達せられ、それに對する注意事項や説明がのべられる。終ると教員から一層詳しい説明をうけて教練にかかる。

「皆さけ！ 不動の姿勢は、軍人基本の姿勢である。だから内に軍人精神が充溢し、外は嚴肅端正でなくてはいかん。お前たちのはなつとらんど」などと鍛へられるのもこの頃だ。

十分間の休憩時間には、戦友と圓い輪を作つて愉快に語り合ふ。

「かゝれ！」の笛で一齊に立つて、また訓練を始める。かうして毎日三時間くらゐづつ猛訓練をやるし、その上今までの生活とはちがつてどこへゆくにもすべて駆足だ。本當のところ白狀すると初めの内は階段を上り下りするのも嫌なくらゐつかれてしまつたが、十日すぎ二十日すぎると、動作もだん／＼板についてくる。その頃から今度は執銃訓練が始まる。すつかり武装して兵舎から練兵場まで息を切らせて駆足をするが、秋とはいへ十月ではまだ暑い。汗と土埃で皆の顔は眞黒になるが、その中からやうやく精悍な色を示す眼玉だけが輝いてくる。

戦地にゆくと肌身はなさず持つてゐる拳銃の射ち方や、小銃、機關銃の照準のつけ方、海鷲得意の一發必中の射撃の仕方、も稽古をつんでゆく。

かうして一箇月近くたつと、準備教育の總決算、待望の教練査閲の日が近づいてくる。だがその前に戦友のNにきいた、陸戰教練中の面白い話を記してみよう。

「大變陽の照りつける日であつた。教練の最中にNと私の名をよばれた。續いて山本！

二人とも前へ出る。と班長がいはれた。何だらう。多分これは行進が下手なので、皆の前に出されてやらされるのではないかな。嫌だなあ、恥しいなあと思ひながら前へ出ると、案に違はず二人並んだところで『前へすゝめ』と號令が下つた。二、三十米を往復行進させられた。歩いてゐる間にも『どこが悪いのだらう。あゝ恥しい』よく人がいふやうに穴でもあつたら全く入りたいくらゐだつた。今にして思へばまだ入隊して間もないため、軍人精神も薄弱で、娑婆氣がぬけ切つてゐなかつたらしい。『分隊止れ』そして班長は並ぶる戦友たちの方に向つて『今の行進で悪いところが判る者、手をあげ』といはれた。正直なところこの時までには、『これは若しかしたら上手なので皆の前でやらされたのではないか』などと考へてゐたが、その頼みの綱も今の班長の一言でぶつゝりと切られてしまつた。矢張り下手なのだなあーと、諦めてしまつてゐたが、どんな批評がとび出すだらうかと思はず冷汗が出てきた。山本はどんな顔をしてゐるかと横目でみたら、彼も顔を赤くし、恥しさうにして、どんなことをいはれるだらうかと目を見張つてゐる。

暫く沈黙が続いたその間の長かつたこと。しかし誰も悪いところを指摘しない。すると

班長が『今のはどこも悪いところはない。大變立派だ。點數にしたら甲の上、満點だ。皆も今の二人のやうに立派に行進しなければいけない』と評された。

『行進が下手なのだ。悪いのだ』とばかり思ひこんでゐた苦しい氣持からこの時はやはり解放されて、急に太陽の照り輝く明るい世界へとび出したやうだつた。

入隊してから、まだ間もないことだつたので、今だに嬉しかつた思ひ出の一つとして残つてゐるのさ」

かうして準備教育の期間がすぎると、もう立派に軍人らしくなつてしまふ。

練習生の一日

入隊の式について、辛いが楽しい準備教育も嬉しく夢のやうに過ぎてしまふと、もうすつかり軍人らしくなつて、整然たる飛行豫科の生活が始る。

豫科練には、鐵の規律がびりつと漲つてゐる。

夏季ならば午前五時三十分、冬季ならば午前六時、それが練習生の起床時間だ。

先づ起床十五分前に傳令員が、「總員起し十五分前、釣床當番配置につけ！」の號令をかけて走り去る。冬ならばまだ兵舎には、沈々とした曉闇がたちこめてゐるであらうし、夏ならば、ほの白い曉の光に、整然と釣られた釣床がづらりと連り、その中に練習生のたぐましい肉體が眠つてゐるのが見られるであらう。

釣床當番は、戦友たちの眠りをさまさぬやう細心の注意をもつて自分の釣床を手早く

くり釣床格納所の位置について、皆の眼ざめるのを待つてゐる。

やがて擴声器は、「總員起し五分前」とつたへてくる。つゞいて擴声器を通じて、爽かな起床ラツパが、兵舎全體に鳴り渡る。瞬間それまで微動さへしなかつた無數の釣床が一齊にゆらりと大きくひとゆれしたかと思ふと、無數の練習生は健康な眠りからめざめ、ひらりと甲板にとび下り、眼にもとまらぬ早業で、毛布を整頓し、釣床をくくり始める。みんな取組むやうにして釣床をくくりつてゐるが、馴れぬ内には紐がもつれて慌てることもあるし、帽子を一緒くたにくくりつて慌てることもある。しかしこれも初めのうちで、少したてばこんなこともなくなつてしまふ。釣床當番は、釣床を順々に格納所にをさめるが、入りたての一年生でも五分内外、上級生になれば一分とかゝらぬ神速さだ。そしていち早く洗面にとび出す。便所の用もこの時に足すが、これも入隊後半年もたてば體の調子が整つて必ず起床時ときまり、あと一日は誰も大便に立つ者はないといふ。海戦の眞最中に持場を離れたり、飛行機上で大便にゆきたくなつたりしては困るから、ほんの一寸したことだが、訓練もよくゆき届いたものだと感じする。

洗面が終ると、早い者から順次隊伍を組んで、號令臺前に整列する。どんな短い距離をゆくの中でも隊内の動作はすべて駈足だ。闇を破つて隊内には、ざ、ざ、ざといふ駈足の音と、白い事業服をつけた無数の少年飛行兵の隊列が波のやうに迅速に動いてゐる。

そしてすぐに練兵場で、どんなに凜烈たる寒さのときでも、勇壯な號令演習が始る。冬ならば、寒稽古があるから、各班それ／＼銃劍道の防具に身を固めたり、軍刀術のための木刀をもつたり、或は海軍體操、鐵棒などにつく。これがすむと、當直將校が、颯爽と號令臺に登壇される。

間もなく人員調査の號令がすみ切つた練兵場にひびき渡る。直ちに各分隊は競つて整備をとどける。終ると當直將校の號令で、一日の最初の、最も嚴肅な行事である宮城の遙拜が嚴かに行はれる。

ついですが／＼しい朝の大氣の中で、この生活のうちで一番意義深い、御製奉唱のひとときがある。兵舎の黒板に謹書せられてある 明治天皇の御製の奉唱である。教官のあとについて、朗唱し奉るのである。

天つ神定めたまひし國なれば

わがくにながらたふとかりけり

或は

いかならむ事にあひてもたわまぬは

わがしきしまの大和だましひ

ゆつくりと味ひながら一首づつ毎日奉唱申上げるのだが、少年飛行兵の心には今更の如く君國に生れ、君國に死する身の心からなる喜悅と感激がわくのである。誦し終ると純眞な洗はれたやうな氣持となる。その純眞な心は少年たちの一日の活動の指針ともなり、嚴かな慰めともなり、生涯を通じての精神の安定力ともなる。かくて御製の中を脈々と流るる神ながらの我が建國の大精神は、一日々々と練習生の胸にしみ入つて、時には不撓の意氣となり、時には斃れて後やむ鞏固なる意志となり勇氣となつて發するのである。これらは相合して朝のやうに清く爽かな思ひとなつて、少年飛行兵の鐵壁の胸奥深く宿るのである。

あゝ一日も早く立派な搭乗員となつて米英撃滅に空征かう！ この時これを神明に祈り、その御加護をこひねがふのである。

この騒かな時がすぎると體操だ。合理的な海軍體操の十分間。若々しい血潮は、逞しい血管の中を通過して、膨れ上つた兩肩へ、はち切れさうな兩腿へ、脈々としてのぼつてくる。まるで元氣な練習生の體に調子のよいエンジンがかつたやうなもので、體はいよいよ活潑に廻り出すのである。

體操終り當直將校の「かゝれ」の號令が下ると各分隊はそれ／＼受持區域の掃除にかゝる。海軍のきれいなことは有名なもので、暇さへあればすぐに掃除だ。練習生は、短艇配置に、教室に、酒保に向つて駆け出してゆく。雑巾を手にして當直練習生、週番練習生の號令で甲板を盛にみがき廻つてゐるものもある。見てゐても氣持のよい位、みんなくると元氣にみがき廻る。かうして忽ちの内に靴置場も、便所も、洗面所も、花壇も、廊下も、さしにも廣い航空隊内は塵一つとゞめぬやうに光り輝いてしまふ。たとへ便所の掃除だといつてもこれは奥へられた任務であり、訓育の一つだからみんな一生懸命だ。

「解散、やすめ」のラツバがなると一心不亂に磨きあげた掃除部署の點檢がある。そして次には楽しい朝食がまつてゐる。

十五分の休憩がすんで、食事五分前になると、各班毎にガツチリした食卓の脇に整列する。味噌汁のうまさうな匂ひが、盛に鼻をつく。かといつて、五分前の整列は何も、早くたべたいといふ譯ではない。勿論たべたいことは食べたいのだが、これも海軍の五分前主義の現れなのだ。

擴声器からラツバがなると、「氣をつけ、つけ」の號令で一齊に禮をして、兄さん格の班長を中心に靜肅に食事を始める。起床してから一時間、それも相當運動をした後なのでお腹はすいてゐる。食慾はいづれも満點の連中なので、みんな陽にやけた元氣さうな顔の口一杯につめこんで、かつこむ手おそしとたべてゐる。残すやうな者は一人もゐない。又残すやうでは激しい豫科練の訓練にたへられるものではない。終ると當番は患者報告、豫定日課の報告などを各自の班の教班長や先任教員に報告する。その暇には、また例のきれいな好きを發揮して洗濯などやる。あつちでは歯をくひしばつたり、こつちでは口をとがら

せたり、ぎゆつくと洗つてゐるから、洗濯場をひとめぐりすれば、面白い百面相をみる
ことが出来る。兵舎内では新聞をよんで先輩があげた太平洋上の凱歌に一人で興奮してゐ、
るものがあるかと思ふと、被服の修理をする者もゐる。

午前八時五十分から午前中の授業が始るが八時四十分には「兵舎離れ」のラッパがなる。
ラッパがなりだすや朝禮の際と同様に、練習生は隊伍をくんで練兵場の整列位置まで駆足
でゆく。定刻近くなると副長が登壇され、教官文官も前方に整列され、さびくした練習
生の整列状況をみてをられる。

やがて番兵が進み出て定刻を知らせる。信號兵は「課業始め」のラッパを高々とふきな
らす。これぞ一日の訓練に對する挑戦譚だ。副長への敬禮を終り「かゝれ！」の號令と共
に、各分隊は當直練習生の號令によつて一齊に行進を起す。今まで水をうつたやうに静か
だつた練兵場には、各分隊の行進によつて濛々と砂煙が上り、勇ましい軍靴のひびきがわ
き起る。各分隊とも駆足で、それく所定の講堂へ向ふのである。

この授業課目は、普通學と軍事學とに分けられてゐて、普通學は文官教官によつて教

へられてゐるが、甲種の練習生は前にものべたやうに中學校からくるので、數學と物理化
學だけを教へられ、乙種練習生は、國民學校からくるものだから、數學、物理化學は勿論
のこと、それ以外に國語、漢文、地理、歴史、作文を習ふ。

この内で物理化學は相當の程度までゆくが別段難しいことはない。それといふのも實に
完備した教室で、豊富な材料をつかつて優秀な教官が手をとるやうにして教へて下さるか
らである。實驗では時にはラジオなどを作ることもある。そして休暇になると故郷へ持ち
歸つて、父母兄弟をよろこばせてやるのだ。また寫眞術なども非常に上達して素晴らしい
腕前となり、撮影は勿論のこと現像焼附も自分一人で出来るやうになり、玄人はだしてあ
る。しかし、この寫眞もラジオも將來飛行機にのつて敵艦隊や敵陣偵察に赴いたときに必
要かくべからざるものなのである。なほ歴史はわが國の國體、地理は太平洋を初め日本を
中心とした對外關係といつた方面に重點がおかれてゐる。

軍事學は巢立つ日の將來にそなへて武官教官によつて教授されるが、その内容は砲術、
航海術、水雷術、運用術、通信術及び航空術である。この外、狀況判斷、部下統御の方法

るやうになる。無味乾燥のトンツも、少年飛行兵にとつては、命よりも大切なものだ。これもだんくくと興味が湧いて、卒業間近には通信を専門とする通信学校の卒業生と同じくらの程度になつてしまふ。

航空術の講義では、飛行機は何故とぶかといふことや、現代の優秀機についての詳細な研究、検討なども行はれてゐる。練習生の黒板をみつめる眼も鋭く光り、盛にすべる鉛筆の調子もよふ。

手旗信號も面白い。數十名の練習生が眞白い事業服姿も勇ましく、紅白の手旗をふるのは實に見事だ。教員が基礎からよく教へて下さるのだが、その前觸れがある。

「手旗は相當さつゝいから、どこまでもやり通す覺悟が必要だ。よろしいか」

「はう」

といふ聲が、練習生の腹の底からひびく。

「原姿の姿勢、右手に赤、左手に白、姿勢は徒手教練の不動の姿勢と同じ。——第一原畫、右手上、左手はそのまゝ」

かうしてイロハ四十八文字を習ひ、やがてそれが自由自在にかけるやうになる。教員は列の間を歩き廻つて、兩手をあげさせたまゝ悠然と不動の姿勢などを直して歩かれる。あげた右手も、斜め上に伸した左手の附根もぬける程痛い。一同は「うん、こゝが我慢のしどころか」と齒をくひしばつて「何糞」と頑張る。

午前中四時間の授業がすむと、楽しい晝食だ。今日は鴨燻のよい匂ひが鼻をついてゐる。海軍では晝食に一番御馳走が出るから、實に楽しい。育ちざかりの少年たちだといふので、航空隊でもこの點ぬかりなく腕によりをかけて御馳走を並べ、一日四〇〇〇カロリーの榮養をとらせてゐる。班長を中心にまた楽しく食事をとるが、近頃では毎日のやうに途中で

「一寸聞け」

がある。「一寸聞け」といつては、今日の戦果や、海軍航空隊の勇壯な活動を話されるので、これが又一つの楽しみとなつた。

午後は十二時五十五分から課業整列で、二時間の坐學がすむと、活潑極まる體育が三時

二十分から五十分間行はれる。

「體力第一」といふのが、これまた豫科練の大きな眼目であるから、この時間には柔道、剣道、短艇、拳銃射撃の訓練、鬪球、陸戦訓練、デンマーク體操をもとにしてもつとすぐれたものとした體を柔軟にし、體の癖をなほす獨得の海軍體操、鐵棒、空中轉廻、逆轉などをやるマット體操等、あらゆる種類のスポーツが一齊に展開される。

鐵棒なども練兵場の片隅に幾十となくづらりと並べてある。入隊當時は何にも出来なくて牛肉をふら下げたやうな恰好をしてゐた者が、一年も修練をつむと尻上りなどお茶の子さいさい、大振り、宙返り、大車輪なども朝飯前といふ腕前となる。籠球、排球、鬪球などもチームを作つて練習してゐるが、かうした球技は飛行機乗りにはよい訓練となるので、盛に奨励してゐる。特に鬪球は豫科練の最も得意とするところで、中學校などは眼中に無く、相手にするのはいつも高専、大學の名うての強豪チームなのである。相手も名にし負ふ猛者連だが、こちらも一騎當千の豫科練チーム。負かしては復讐戦、また負かしては復讐戦と、くるたびに返りうちをくはせてゐる。これは技倆よりも何よりも豫科練傳統の意氣で勝つ旺盛な攻撃精神、日頃の訓練の賜物たる鞏固な一致團結の精神とともに、物凄しい體力がものをいふからだ。

また柔道、剣道も勇壯そのもので、ある航空隊では恐らく東洋一、否世界一とも思はれる一八〇〇疊敷の道場が二つ建つてゐる。二棟をそれ／＼柔道組、剣道組と分けて一つづつ使つてゐるが、時間になるとこの二棟には練習生があふれて、思ひ切りあはれ廻つてゐる。一同嚴肅に神前に禮拜を行ひ、各々防具をつけて稽古にかゝる。教官、教員の高段者が共に指導をするので忽ち上達、僅な在隊期間中に有段者が幾人も出てくる。この他是非知らなくてはならぬ水泳、鬪魂をみがく相撲、銃劍術などもそれ／＼教員によつて教へこまれる。水泳も冬だと練習出来ないの、ある隊には温水プールまで用意されてゐる。相撲も時には双葉山なども來て稽古臺になつてくれる。

この體育の時間も終ると、「課業やめ」がある。これから後は私用を足すことも出来る。花壇に咲きほこる花々に水をやつて素朴な喜びにひたることも出来る。また一日中で最も楽しいバスの時間があるのもこの時である。町ではみたこともないやうな五十人でも、百

人でも一遍に入れる大きな浴槽につかつて一日の疲勞を回復する。みんな真裸になつてゆつくり氣持よい湯にひたる。あつちこつちで盛に朗かな笑ひ聲が聞える。中學校の同窓の友達や同縣人などと、今日一日の面白かつたこと、失敗談などいろ／＼と話をする。

一日の汗をすつかり流して兵舎にかへれば當番の手で、もう夕餉の支度が出来て、みんなでたのしい夕食だ。五時からまた、うれしい酒保許しがある。一〇〇〇疊敷もある大きな酒保で、少年飛行兵だけに許される甘いお菓子、うどん、お汁粉などと好物を腹一杯につめこむ。うどん、お汁粉などは航空隊の人気ものだけあつて、到底市中のものなどは足許へもよれぬ。急いでたべて舌を焼くものもある。食後にうどんを四杯もたべて溜息をついてゐるのもこの時である。だがこれもあらゆる不足にたへ忍んでゐる銃後のことを考へながら、感謝の念をもつて胸をつまらせながら戴くのである。

酒保の壁には精神の修養や海軍知識の増大に役立つものが並べられている。海軍軍人の位階勳等や天氣豫報の旗や、各艦型の繪を始め敵機の識別に役立つやうボーイングB—一七やコンソリデーテッドB—二四型長距離爆撃機を初めカーチスP—四〇、ベル・エアラコブラ、ロッキードP—三八などさしづめ、少年飛行兵の相手となる敵のアメリカ第一線機の三面圖などが掲げてある。片隅には書庫もあつて航空知識や古今東西の偉人の物語や勇壯な戦記の類がきちんと並べられてゐる。

午後六時十五分には「總員釣床おろせ」がある。入隊當初教へられた通りに正確、迅速に居住區へ釣床をつるが、釣床教練が行はれるのもこの時だ。六時四十分、「温習始め」のラッパが鳴ると兵舎の掃除は整備班にまかせて組長の號令で敬禮を行ひ、定められた温習講堂へいつて二時間みっちり、今日の復習をする。「その日のことは、その日の内に」これも海軍の標語である。温習講堂には、晝をあざむくくらゐ明るい電燈が煌々とついで眼のためには至極よい。晝の各教室も採光がよく極めて明るい、これも飛行兵の「眼」を保護するための施設なのである。當直の教官も各教室を見廻つて練習生の質問に答へて下さるが、少しでも不審な點は徹底的に突込んで質問するので應接にいとまがない。この温習時間の間には十分間の休みがあるが、この時は一同外へ出て、時には皎々たる月光を浴びながら、時には肌をつんざく寒風をつきながら、壯快な號令演習を行ふ。數百の健兒

たちが、咽喉もさげよとかけ合ふ氣合のこもつた號令は、隊内の夜氣をゆるがしてひびき渡る。

中休みの後の一時間の終りには練習生の五省をとなへて一日を反省し、人格の向上に資する。

信義に悖るなかりしか

言行に恥づるなかりしか

靜かに反省して、蹶足で兵舎へかへる。

午後九時、先刻釣つたばかりの釣床にもぐりこむ。遠くに住む父母にあへるのも、ニューヨーク爆撃にゆけるのもこの楽しい睡眠時間の間のことである。

卒業するまで

少年飛行兵が卒業するまでには、毎年随分いろいろの事がある。行軍もあれば演習もある。競技もあれば短艇競争もある——といふ風で誠に多種多彩、有益に面白く潑刺たる生活繪卷を展開する。その元氣一杯の繪卷を諸君と共に一頁々々めくつてゆかう。それはまた平凡な市井の一少年が、どうして立派な海鷲となつてゆくかの發達の過程であり、將來勇壯な武人として大君の御ために決然たつて敵を撃滅するやうになるまでの精神の發展のあとを辿ることでもある。平凡なことをやるのにも、練習生がどんなに全力を打込み、魂をこめてやるかをよく読んでいたゞきたい。まづ準備教育が終ると、軍人らしくなつた威容を航空隊司令や副長の前に示す教練査閱がある。

教練 査閲

第一種軍装の上に劍帶をしめ、眞白な脚絆に身を固めて練兵場の所定の位置に整列した。過去一箇月間、汗と埃にまみれて連日の訓練に、海軍軍人としての基礎教育を受けて来たその結果を、今日こそ司令にみていたゞくのかと思ふと心も躍る。

間もなく陸戦隊指揮官が出て來られて豫行を一回やる。いろ／＼と御注意をきいて待つてゐると、いよ／＼その時間となつた。

司令が廳舎から出て來られた。紅白のH旗が風にはためきながら近づいてくる。絶好の査閲日和だ。「氣をつけ」の令が下つた。「しつかりやらう！」と氣をひきしめて、指をうんと伸ばし下腹に力を入れて胸を張り、教へられた通りに顎をひいて目を更に大きく見開いた。隣りの分隊の前にH旗がきて「頭！」の豫令がかゝつた。更に身がひきしまる。

「右ッ」の動令で、思ひ切り元氣よく頭を右にむけた。目を見開いて前を通られる司令を睨みつけるつもりで目迎目送をした。

H旗は、號令臺の上ではためいてゐる。

陸戦隊指揮官の指揮刀がきらりと光つて、部隊は堂々と右翼の中隊から動き始めた。最後の中隊である我々の第〇〇分隊が銃を肩にあげたのは、第一中隊が「左向け前へ」をやつてしまつた頃であつた。いよ／＼我々の分隊も動き始めた。踏み出す一歩々々が今までの訓練の成果を示し、努力のあとを示すのだと思ふと自然と足にも力が入る。並立縦隊のときは整頓に重點をおき、銃の保持にも氣を配つた。中隊縦隊になつて分列の線に入る。分隊の全員はみな左手の指をのばし、腿を出来るだけ高くあげ、ひかがみを痛いくらゐ伸して大地もさげよとばかり踏みつけた。整頓もうまくいった。分隊長の指揮刀一閃、「頭、右」の號令で一齊に臺上の司令に注目する。わが分隊員の氣持はぴつたりと完全に一致して、それが形に現れて足並もびつたりと揃つてゐる。練兵場には、輝かしい陽光をあびて無数の劍尖が光つてゐる。勇往邁進の氣概は横溢して我れながら實に見事であつた。案に

違はず臺上の司令の御講評は非常によく、わが第〇〇分隊ばかりでなく、この期全體の査閱は素晴らしい好評であつた。

準備教育は、これでいよいよ本當に終つた。何だか豫科練魂といふものが、幾らか判りかけてきたやうな氣がする。

明日からは、一層の猛訓練が展開されることと思ふが、今日のこの意氣をもつて、どしどしやつつけよう。そして太平洋上に偉勳をたてた先輩たちに負けないうやうな軍人とならう。感激こめて見上げる青空には、高く軍艦旗がはためいて、早く巢立てと叱咤してゐるかのやうである。

橈漕訓練

朝から雪がちらついてゐる。入隊後まだ日の浅い嚴寒の十二月。いくら何でも今日の午後の短艇は休みだらうと思つてゐたが、これは入隊後間もない私の考へちがひであつた。

ダビットの前まで駆足。

湖の畔までくると、筑波おろしがびゅーつと吹きつけて一際寒い。

「今から短艇について名稱を教へる。今日は少し涼しいが、寒さに負けず氣合を入れてよく聞いて速かにおぼえるやうにせい。よいか」

「ハイ」

元氣な聲で返事をする、「その元氣だ。その意氣でさけ！」といつて、短艇の話にう

つした。

教員は時々「判らないものは、直ちにその場で質問せよ。何でも最初が大切だ」さういつて教務はつゞけられた。筑波おろしが肌をさす。寒いので人のかげに廻つてゐる者もある。また手をこすつて温めてゐる者もある。

「皆判つたか」

「ハイ」

「判らなかつた者は手をあげる」

誰一人として手をあげる者はなかつた。しかし内心では今訊かれたら困ると思つてゐても質問する勇氣もなかつた。今考へると娑婆氣のぬけない頃の氣の弱さのせゐだ。

「今度は乗艇して橈漕をやる」といはれ定員をきめられた。番號によつて各々きめられた配置につく。「ストツパー掛け」「クリート解け」と次々と號令がかかる。皆元氣でさびくくと動作をする。

「ゆるめー」の號令で短艇索はするくと伸ばされてゆく。最後に「放て」の號令で、

短艇はダビットからバチャンと軽い音をたて、湖面へおりた。

「乗艇！」

みんな繩梯子で艇にのりうつる。

「橈用意、艇首放せ」

と次々に號令がかゝつてくる。ところが初めての悲しさ、號令に應じて動作がとれない。内心びく／＼のものであると教員は落着き拂つて

「皆判つたな。それでは今から出發する、用意！」と號令をかけられたが、誰一人として出来る者はゐなかつた。さあ大變だ。教員が立上つた。物凄い目附だ。

「今判らない者は手をあげろといつたではないか。なぜ男らしくはつきり手をあげなすのだ」

戦友は顔を見合せた。今になつてはもう遅い。

「初めてとあるから上手に出来る筈はない。だが出来なくてもよいから正直にやれ。これが軍人として一番大切なことだぞ」と四、五分間くらの説かれた。吹きまくる寒風に指

先は感覚を失つて、橈も握つてゐるのかどうか、それさへも判らなくなつた。

「早く漕がしてくれないかなあー」

手が冷いのでこんなことを思つてゐると

「初めからやり直し、用意」

今度は調子よくいつた。いよ／＼漕ぎにかゝつてビツビツと號笛に合せてこぐ。橈の先をみると、湖の水は渦をまいてゐる。

「さうだ。その調子だ。渦の出来るやうに引かなくては本當に漕いでゐるとはいへない。その調子で橈をとられないやうに注意してやるんだぞ」

いつしか艇はダビツトから六、七百米はなれてゐた。掌が痛くなつて來た。ぶつ／＼と話聲が出てきた。「俺は豆が出來た」と戦友のTが顔をしかめて隣りのOに話してゐる。教員はそれを聞いて「橈あげ、橈組め」といつた。一同はやれ／＼といふ思ひでほつとした顔をあげる。

「どうだ。さついか、面白いだらう」

「ハイ」

「本當か」と念を押す。

「手に豆を出したもの」

と聲をかけられた。前後左右をみると十六名の内十三名の者は手をあげてゐる。

「あとの三名は出來ないのか。貴様たちは一生懸命漕がなかつたな」

「違ひます」

とこの三名は、いさ／＼か得意氣に元氣よく答へた。これは入隊前に何か経験のあるものなのだ。

再び「橈用意」手を休めたためか、もう痛くて握る氣もしないが致し方がない。

ビーツ、ビーツ、なか／＼調子がよい。手もなれてきたのか痛くなくなつた。その氣になれば何でもなす。

「次はビーツと鳴つて次のビーツが鳴るまで、引いた姿勢でまつてゐるんだぞ」といふや否やビーツと鳴つた。

皆顔をしかめたり赤くしたりしてウツ／＼とうなつてゐる。

「まだ／＼。何だそのくらゐで！ 腹の皮が丈夫になるぞ、頑張れ！」

苦しいなと思つても仕方がない。後席の方でガタンと音がした。腹の皮がもたなくて後へ引くりかへつたらしい。教員は「この位で倒れてどうする。まだ／＼お前たちは意地と頑張りが足らない。われ／＼の入隊當時はもつ／＼荒波の上でやられたものだった。それでこそいざといふときに、どんなことでも出来るのだ。いつもこんな静かなときばかりではないぞ。訓練が一番大切だ」と冬の寒風で三角波が立つてゐる湖面をみていはれた。

波の工合がよく判らないものだから、橈が空廻りをしたのだ。風と波にまけないやうに夢中で漕ぐ。遂に「橈あげ」と號令がかゝつた。午後の作業時間がやうやく終つたと思ふとほつとしたが、ほつとしたと同時にぼうつと眼の前が暗くなつた。

橈漕訓練も終つて、短艇をつりあげて整列した。上陸してから分隊士から

「今日は初めてにもかゝはらず、非常に元氣があつた。これからも今日のやうに元氣を

出して何事も一生懸命にやれ！」

とほめられた。

だが、赤黒く両手に五つづつきちんと出来た豆をみると明日はどうして橈を握らうかともう明日の心配で頭が一杯であつた。

こんな猛訓練によつて、入隊時の子供々々した少年たちは、だん／＼と協力一致と頑張りぬく不屈の精神が養はれてくる。その豫科練獨得の頑張り精神が養はれる頃、帆走遠航や各班對抗の短艇競争がある。

×

×

×

例によつて兵舎からダビットまで二千米ばかり駆足。

いよ／＼各班の短艇は出發點に並んだ。今日の回頭點は、遙か沖合の爆撃標的だ。この艇からはぼつりと黒い一點としか見えない。往復約六千米はあらう。

指揮艇の合圖の赤旗がさつと下ろされた。

ばしやッ。

各艇の橈は一齊に水をうつ。戦は開始された。各艇は水を切つて進む。今日は絶対に負けられない。どんなことがあろうと、石に噛りついても勝たねばならぬ。腕に満身の力を入れて漕げば橈はたわむ。力漕、また力漕だ。橈漕してゐる間は、たゞ勝たう、頑張らう、倒れるまで漕ぎぬかうといふことばかりで他の艇の様子などに眼を配る餘裕はない。回頭點を廻つて歸りのコースにつくと、漸く疲勞の色が現れてくる。額をだら／＼と流れる汗は目に入り口に入り、その上眞晝の日光は眞上から照りつけるので、眼はひり／＼と痛み、開けてゐるのがやつとである。

橈をもつ手には力が入らなくなつて一漕ぎ一漕ぎが辛くなる。駄目だ、苦しい。橈を投げてしまひたいといふ氣持が起きてくる。だが班の名譽のためにどうしても負けられない。舵を握つてゐる班長も、躍起となつて

「意地を出せ、頑張れ！」

とどなられる。それに勵まされて氣をとり直してまた死物狂ひに漕ぐ。

今や班長の聲もかすれて、眼はつり上つてきた。額には汗がにじんで、ビーツビーツと

笛を吹くの懸念だ。艇は波を切つて進む。

もう直ぐ決勝點だと思ふとき、手の中でぶつと何かつぶれたやうな氣がした。急にすするとなつて橈をもつ手が痛み出した。豆がつぶれたのだ。だが橈を放すわけにはゆかない。もう直ぐ決勝點だ。死ぬ氣で漕いでもあといくらもない。こゝが意地の出しどころだと最後の五分間を頑張る。

遂に決勝點だ。「橈立て」の號令がかかる。立て終るとすぐ邊りを見廻す。うれしや一番だ。後から他の艇が波を切つて入つてくる。

一番になつたのだ。われ／＼は、天突き運動をやつた。負けた艇では神妙に橈立てをやつて精神をねつてゐる。だがともかく我等の奮闘が報いられたのだと思へば手の痛みなど吹飛んでしまひ豆のつぶれたのが自慢になる。

それもその筈、我々は競技の一箇月も前になると少しの時間も惜んで腹の筋肉をつよくするために長椅子を利用して、漕ぐ練習をくりかへす。夕食後の時間などは最も猛烈にやつた。日曜日の外出時間も利用しては血みどろの猛訓練をやつたのだ。手も腹も強くなり

尻などは皮がむけて血で眞赤になるが、わが分隊のためと思へば痛くもなかつた。遂に一番となつたのだが、焼漕法にも一つの極意がある。それは負けじ魂だ。齒をくひしばつて終始一貫最後まで頑張り通すことなのである。

一 萬米 駢足 競争

航空機搭乗員に要求される第一のものは精神力である。つぎに體力、術力である。近代戦は科學戦だが、その科學戦の最後の鍵は精神力が握つてゐる。だから豫科練の教育では何でもかんでもこの精神力の涵養に重點をおいてゐる。

毎年冬、十二月二十五日の大正天皇祭を期して一萬米耐久競技が行はれる。競技は一箇月ほど前に豫告されてゐたので、競技の直前までは毎日猛烈な駢足訓練が、別科後薄暗くなるまで繰りかへされた。この競技の特色は練習生は一人残らず参加し、しかも分隊單位であるから分隊員全部が協力して勝ちぬかなくてはならぬのだ。だから一人が落伍しさうになると同分隊の戦友が押したり、抱へたりして決勝點まで運びこむ。空中戦では個人の問題でなく、あくまで團體が勝たなければならぬからだ。尤も平常でも練習生は一寸、

一尺の距離も駈足であるが、殊に分隊の名譽をかけたこの競技をひかへては、たまの日曜の楽しい外出時間を制限してまで、練兵場の端から端までかけ廻る。

競走が明日に迫ると、練習生の若き血はもえてくる。分隊員同士の挨拶にも「お互に頑張らう」と、勝利の合言葉が交される。各分隊は必勝の信念にもえてくる。

いよ／＼その日は来た。雲は矢よりも早く天空をかけり、鈴鹿おろしは練兵場の砂塵をふきあげて、ために天地も暗いかとも思はれる絶好の錬成日和だ。分隊士、班長、教員から「必勝を祈る」と訓示をうけた各分隊員は決死の眦も固く出場した。

第一回の出發。物凄い勢で隊門に向つて殺到してゆく。二回目が出た。遙か遠い隊門も流石に一瞬の間にかけぬけてしまふ。「みな相當にやりよるわい」と思ふと、不敵な闘志が全身に漲つてくる。

分隊長が力強い聲で激勵される。皆凄い張切り方だ。號砲一發遂にスタートは切られた。速い、速い。

耳許で風がうなる。緊張で硬くなつた顔を眞赤にしてかけてゆく。駈足ではない、早駆けだ。隊門はいつしか過ぎて、廣い小石の多い海軍道路を眞直ぐに走る。

分隊は、前を走る者を抜け！一人たりとも自分の前は走らすなとばかり、ぐん／＼ピッチをあげる。

町の中へ入つた。もう夢中である。目の前には無数の赤い帽子がちら／＼する。一人、二人と若い期の者で落伍する者もある。町の人達は何事が起つたのかといふやうな顔をして、地ひゞき立て、駈けぬける無数の練習生をながめてゐるが、こちらには、それが男か女か、大人か子供かも判らない。自轉車なんかも手當り次第にぬいてかける。町外れまでに何人か赤帽子をぬいた。汗が頬を傳り、だん／＼呼吸が苦しくなつて體もつかれてきた。これからが精神力である。海岸に近い神社をすぎる頃から、耐久競技隨一の難所たる砂濱に出た。二名の分隊員が自分をぬいてゆく。抜かれつばなしでは男の恥。最後の力をふりしぼつて彼等をぬきかへした。精神力と精神力の戦ひだ。

だが如何にせん、柔い砂地で、足は錘をつけたやうで實に苦しい。

決勝點は松原越しにみえて、分隊士、班長、教員が「第〇分隊頑張れ、頑張れ！」とさかんに聲援を送つてゐるのが見える。氣ばかりあせるが最後の五分間が實に苦しい。ふらふらの足を闘志だけが克服して遂に決勝點にとびこんだ。

惜しくも、われらの分隊は優勝を逸したが、練兵場の真中に立つ審査官眼がけて、魚雷を抱いて突撃するやうな氣持で敢闘したのだから、悔はない。

捨身の精神、食ひついたが最後、離れない粘りの強さと、世界一の敢闘精神——この豫科練独自の精神こそ、敵不沈戦艦をうち沈め、空母集團を叩きふせたのだが、こんな精神がこの二里半を一氣にかけぬける耐久競技によつて練られてゆくのだ。

寒 稽 古

霞ヶ浦には朝もやが静かにおりて、各兵舎は黒々とした闇の中のまどろみの中にある。

「總員起し、十五分前」

擴聲器の聲に、釣床の中で眼をさます。隣りの戦友も、眼をさましたものゝ、また眠さうに毛布の中にもぐり込んでしまつた。釣床係が自分の釣床を括つてゐる音をかすかに聞きながら、自分も亦毛布の中にもぐりこむ。暖い、實に暖い。だが、また擴聲器が

「總員起し、五分前」

と叫ぶ。「さあ今日も張切つてやるぞ」と心にさめる。

「總員起し」

ラツバが元氣よく鳴りひびいた。ぱつと毛布をはねのけて、釣床教練の手並も鮮かに釣

床をくさり、白い事業服をつけて曉闇の洗面所へとび出した。手早く顔を洗ひ用をすませ、て練兵場へとび出す。兵舎から練兵場へ向ふ通路には、ささらぎの寒風をついて、白い事業服の隊伍が、週番練習生に引率されて、押しよせる波のやうに練兵場目ざして流れてゆく。風は湖面を拂つて指がちぎれるやうだ。

暗い筈だ。まだ五時五十分だ。

各分隊の整備が終つて六時十分、宮城を遙拜し奉つて直ちに廣い練兵場一杯に訓練が開始される。

われ／＼の分隊は、今日は銃劍術だ。

各分隊毎に準備運動を終へ、「面つけ」の號令で手早く面をつける。前後列が離れて向ひ合つていよ／＼練習だ。當つても當らなくても力一杯に突込んで劍を出す。決して退かないのが、われらの銃劍術だ。

「始め！」の號令で、互に駆けよつて猛烈にぶつかり合ふ。五、六度も突くと温泉にでも入つたやうにぼか／＼と暖つてくる。

いくら突いても、うまく入らない。猛烈に體當りをすると、相手も物凄く押しかへしてくる。バツと離れた瞬間、がんと頭に凄じい衝撃を感じてふら／＼とした。

見事に突きを一本とられたのだ。急に腹立たしくなつて遮二無二突込んでゆく。五、六回突きまくると、もう腕がいふことをさかない。癢に觸るが相手の銃劍はやけによく當るやうな氣がする。

畜生つと思つてばつと相手の劍を拂ふや、渾身の力をより絞つて、上脰目がけてとび込んだ。だつと見事に入つた。約五分で相手を交代するが、みんなふう／＼いつて、肩で呼吸をしてゐる。面の中が汗でぐつしよりぬれたころ、「止め」の號令があつた。

面を外した時の氣持のよさ！ 寒い風がす／＼と頭を洗つてゆく。

太陽が、湖面を黄金色にそめて、悠々とさし昇つてきた。實に爽かだ。

急に腹がへつて來た。みると皆の顔は眞赤で、頭からは白い湯氣が立つてゐる。向ふでは他の分隊が銃をとつて陸戦を續けたり、海軍體操に汗を流してゐる。

風が少し凪いだやうだ。

清く澄んだ大空には、附近の海軍航空隊からとび立つた海鷲の翼が白銀に美しく光つてゐる。

冬 休 み

急行列車も、虫が這ふやうだ。

入隊当初、いくたび釣床の中で夢みた故郷であらう。その後は軍務の忙しさに取りまぎれてゐたが、いざ矢張り休暇が出てみると、心はなつかしい故郷へかへる。

規律のある軍隊生活にも楽しいことは山ほどもある。夕食をすませてから、酒保へいつて甘い菓子をたべながら、雑談に興じて一日の疲れを忘れてしまふのもその一つであらうし、一週間の疲れを休め、明日からの勤務にそなへるための外出、或は行軍、演藝會、競技會などと、いづれも楽しいものゝ連続であるが、中でもこの歸省休暇は、一番楽しいことのひとつであらう。

勿論、楽しい間にも自づと大東亞戦争以前の休暇とはちがつた趣きがある。といふのは

我々はこの休暇を利用して、家庭にいつていろいろと整理をして、いざといふときに十分の御奉公が出来ると心掛けてゐるからだ。たゞ遊んだり、怠けたりするための休みではなう。

汽車を降りバスにのると、入隊の日、をどる胸をおさへながら、村人に送られて出たときのことか思ひ出される。バスを降りて、田圃道を歩くと、何か自分の氣持はのび／＼としてくる。住みなれた土地の親身のあたゝかさが、空氣の中にひそんでゐるからであらう。見なれた森の形、田畑の姿がなつかしく眼にうつる。

いよ／＼自分の家について、玄關の戸をあけたときの氣持は、到底筆舌につくしがたう。

兩親に新年の挨拶と歸省の挨拶をする。元氣な體をみ、朗かな顔をみた兩親のよろこびは非常なものであつた。我々軍人の一番のお土産は健康な身體と剛健な軍人精神だとしみじみと思つた。

挨拶をすませて氏神様に參拜にゆく。道であふ人も、七つ釘の新しい少年飛行兵の服が珍しいのか「あれが海軍少年飛行兵だよ」と、みんなこちらをふり向いてゆくので、些かくすぐつたい。氏神さまに歸省の旨を告げ、出征將士の御武運を祈り、併せて今後軍務に服することの出来るやうにと祈つた。

參拜を終へて村長さんのお宅へゆくと、非常なもてなし方で、何といつてお禮をいつたらよいか判らないくらゐであつた。村長さんも去年一番末のお子さんを、空の勇士として戦線へ送つてをられるので、同じ飛行兵たる自分をまるでわが子のやうに激勵して下さつし、「後のことは心配しないで、十分の御奉公をつくして下さい」と仰言つて下さつた。そこから、方々知人の家へ挨拶にいつたが、配給のお菓子を惜し氣もなく振舞つて下さつたり、いろいろと激勵のお言葉をかけて下さるので、ますます自分の責任の重いことを痛感した。これでは、歸隊後の訓練にも一層の力を入れて頑張らなくてはならないと、心に誓つた。

朝食の卓子にはいろいろな御馳走が並んでゐる。家中が顔をそろへて、いたゞく御飯は

また格別の味がある。ところがいつも金属製の大きな食器でいたゞきつけてゐるので、茶碗をもつとどうもコップのやうな気がしてならないし、隊にはお代りがないのでお代りを出すのを忘れてしまつて困つた。それにしては少いと思つて、お代りをもつていたゞくた。

自分は一寸小柄なので、みんなが「小學生の海軍さんだ」といふ。

隊の時間通りに過してゐる生活になれてみると、一般の生活は實に漠然としてゐて仕方がない。隊では朝食何時何分、課業整列何時何分、課業始め何時何分と、全部が時間表通り一分一秒の狂ひもなく行はれてゐるのに反し、娑婆ではかういつた時間が決つてゐないので、いつの間になつたのか、いつの間に夕方になつたのかと一向にピンと來ない。いつまでも今のやうな状態がつゞくのか、何が何だかさつぱり判らぬ内に一日がくれしまつた。自分の入隊當時、随分辛いと思つたこともあるが、その一つはこんなところにも原因があるやうに思はれるし、「娑婆氣をぬく」といはれた班長のお言葉の意味も初めて判つてきた。

三重空數へ歌

打ちつゞく松原が黒々と星影の下に連り、いつも早起きの鷗の群もまだ起きてゐない。

東天がやうやく薄明るく色づいてゐる。

こゝ伊勢灣に沿つた當隊には、連日寒氣を破る氣合もうれしく、勇壯な寒稽古が始つてゐる。

ともに、千數百疊敷、東洋一を誇る柔道場、劍道場には幾百の練習生が互に入り亂れて猛烈に暴れてゐる。練兵場では銃劍術や陸戰教練が展開されてゐる。凍てつく土の上によして、突撃の機をうかゞつてゐる。

白々と續く砂濱では駄足で頭から湯氣を出してゐる。自分は潮みつる早朝の砂濱を分隊員〇〇名とともに駆けてゐた。松原の中の漁師の家に白い煙の立ちのぼる頃、水平線には

今日も朗かな太陽が顔を出した。

磯の千鳥と追ひつ追はれつ、よせては返す波をふむやうに清らかな伊勢灣にそうてかけてゆく。

黒潮にひねもす戯れた幼い頃が、流星のやうに腦裡を流れてゆく。

「二つとせ、再び生きてかへらじと、故郷よ、御父母よいよさらば、そいつあ豪氣だね」
と、誰か豫科練の數へ歌を口ずさんである。私は口を尖らしてふう／＼いひながら走つしるる同郷の植野と顔を見合せて微笑した。とび立つた鷗の群を横目で睨んで走つてゐると、誰ともなしに

「一つとせ、日の本護れと選ばれた、三重空健兒は國柱、そいつあ豪氣だね」
と、みんなが聲を合せて歌ひ始めた。

「三つとせ、未來の榮譽はかへりみず、ひたすら守らん國の空」

「四つとせ、世にも名高き伊勢の海、白砂千里の鷺埒」

「五つとせ、命知らずの豫科練の陸々、短々猛訓練」

「六つとせ、無理もへちまもあるものか、意氣と勢とでやり徹せ」

「七つとせ、なして成らざることあるか、日頃鍛へしこの腕で」

「八つとせ、大和男子は散りてこそ、九段に薫る櫻花」

「九つとせ、この身藻屑と消ゆるとも、とどめおかまし大和魂、そいつあ豪氣だね」

楽しい朝の駆足だ。鷗が軽やかに舞つてゐる。足の裏で柔かくくすぐるやうに砂が崩れしゆくのが快い。松の緑はいよ／＼冴えて、對岸の島々が陽光の中にかび出た。

撥刺と鍛錬するわれらは、忠孝の大道に何のうれひもなく邁進してゐるのだ。

水平線を離れた太陽は、われらの心の如く眞紅にもえて鮮かだ。

「十とせ、とおと雛鷺育ち立ち、やるぞ自爆か體當り、そいつあ豪氣だね」

傍を駆けゆく友と再び顔を見合せて微笑んだ。

もう猛訓練をやつてゐるのだらう、荒鷺の爆音が海原を渡つてくる。鷗が一羽、すいと眼前を横切つていった。

軍 刀 術

支那事變が勃發してから、海軍では幾多の先輩が實戦に参加して、壯烈な肉薄、突撃に敵兵をなぎ倒し、敵陣を破つたが、どうも従來の劍道では、激しい實戦に際しては十分ではないといふので全般的に海軍の武道が改められた。そこで海軍獨得の實戦即應の新味が加へられ、新に軍刀術が考へ出されてこれが劍道の一部として加へられることになつたのである。

いはゆる刀必殺！ がその眼目である。

練習生は、毎日本刀をもつてこの實戦的な軍刀術を教へられる。各自の間隔を大きく開いて木刀を腰に整列すると、一段高い臺の上へのぼつた教員の聲がかかる。教員は劍道三段の猛者で、既に敵兵を二人も斬つたといふ實戦の勇者だから、いかにも白刃の下を潜つ

たといふ物凄い氣魄がある快男子だ。

「この抜胴といふやつは、相手がふりかぶるなと思つたら、すかさず前へふん込んで胴をとるのだ。……だがこれはその時、相手にぶつかつてしまつてはいかん。斜右前へ出るのだ。よし、よし、大分よし」

「今度は、奇數列が面をうつて、偶數列が胴をとるのだぞ。もう一回始め！」

練習生は互に向き合つて、「えい、おう」と打ちこみの稽古だ。

「ピー、注目。まだそれぢや人は斬れんぞ。一人臺の上へ登れ。」

さあよいか、今度は相手が面をうたう、胴を打たうとしてふりかぶるな。そのふりかぶると同時に、こちらはつと出て上り際の小手をとるのだ。始め！」

裂帛の氣合と共に、練習生のもつ木刀は、眞劍のやうな氣魄をこめて、ふり下ろされる。

「今度は、奇數列廻れ右！」

手ぶり用意、一、二、一、二……」

笛に合せて五、六十回もふり廻すと、兩腕のつけ根が痛くなる。「何のこれしき！これへたばつて人が斬れるか。米鬼英鬼の百や、二百」といふ意気込みでふり廻すが、ピ、ピーはいつまでも續く。流石に息も荒くなり、肩がみり／＼いふ頃にやつと、やめ！かかゝる。

「刀收め」で足をそろへて、深呼吸。朝のさわやかな大氣が若々しい胸の奥まで入つてゆくのが氣持よい。

かうして練習生は、初め停止技を教はり、次に歩行技、潜行技と次々と技を授けられてゆくが、この軍刀術の特色とするところは、一刀の下に完全に敵を眞二つにする意氣と腕ら、一人の敵を仆しても後にまだ敵があるならば直ちにこれに應じ、これを斬り仆すだけの體と心の構へ、即ち殘心の二つと、更にこれらの諸動作があくまで實戰的で實用的であるといふ點にあるのである。

そしてこの軍刀術は、體の運用、劍の運用をびつたりと型にはめ、節度正しくしかも滑らかに行動することを研究しなければならない。かうして努力してゐる内に、自づと精神もみがかれてくる。

いかに利刃をもつたとしても、海月のごとき精神の持主では、命をかけた戦には勝てよう道理はない。練習生は、死活をにぎるこの精神の錬磨にまた不斷の修練をつむのである。

整備實習

「かゝれ！」のラツバと共に整備服に身を固めた一隊は整備場へ駆足だ。サツ／＼と整備服のこすれる音がリズムミカルに流れる。まだ體にびつたりと服が合つてゐないので、まるで芋虫の一隊が動いてゐるやうだ。

われ／＼の一番期待してゐた發動機の整備實習が、いよ／＼今日から開始されるのだ。今まで教官から坐學で教育をうけたところを、今日は實際に實物について、我々の手で活用してゆくのだから非常な楽しみだ。

當直練習生の引率で、整備場へつくと、まづ整備教官から御注意をさく。

「今日から整備作業を行ふが、發動機は飛行機の生命ともいふべきものであるから、皆慎重にやらねばならぬ。また偵察員たるお前たちは時間が少いのであるが、これはいやし

くも航空機搭乗員の常識として教へるのであるから、教へられることは十分理解するやう努力せよ。また疑問があつたならばどこまでも積極的にきいて豫科練習生を卒業し、飛練にいつてから、これは何だと訊かれてまごつかぬやう各自張切つて實習に當れ」といはれた。

全くこの整備實習こそ大いに頑張らなくてはならぬと思つた。眞の飛行機搭乗員たるべき我々が發動機はおろか機體整備について十分なる理解をもつてゐることは、特に必要で、偵察員であるからそんなことは知らないでよいといふことはなく、その大切なことは日頃の教官のお話でもよく判つてゐることだ。

先輩の實戰談の中にも、敵機と空戦を交へ敵を撃墜したものゝ、我も亦操縦員が重傷をうけたとき、後席の偵察員が乗り出していつて無事愛機を着水せしめたといふ話や、敵の空母に雷撃をくはせた瞬間同じく操縦員が操縦席を血にそめて戦死をとげたとき、偵察員が發動機や機體、操縦をよく理解してゐたため、これに代つて操縦桿をとり、陛下の兵器をむざ／＼と毀すことなく無事に着艦せしめたといふ實例は數多くきくところである。整

備實習に際してはよくこの實例を念頭において勉強しなくてはならないのだ。

また整備には整備軍紀があるから、練習生は實習すると共に軍人精神を鍛錬することにもなり、そこに初めて軍人たるものの整備技術を學ぶことにもなるのである。

各班に分れて整備場に入り、各發動機の前に整列。早くも「〇〇教員、第何組よろしい」と届けてゐる力強い聲がひびく。

誰も早く分解してみたいなあ、といふ顔をして、ぴか／＼光る發動機をみながら「かかれ」の號令が下るのをまらこがれてゐる。

號令が下つた。

練習生は分解臺の上にまらかまへた壽式空冷發動機にとびか／＼つてゆく。分解要具筐から道具をもち出して分解を始めると、金属のふれ合ふ音で、實習場は忽ち一杯になる。

海軍では何でも競争だ。他の組に負けまいとして分解を急ぐ。あの大力を出す發動機も我々の手で忽ちバラ／＼にされてしまふ。

點火栓、辨、ボルト、眞白に美しく輝くピストン、翼車等をぞく／＼と取外す。いつし

か手も服も油で眞黒だ。

これまで教室で聞いてゐて何が何だかさつぱり判らなかつたものも、かうして實際に細部にわたつて扱つてみると、その複雑な構造や作動等もどんな者にも判る。百聞は一見にしかずだ。

始めてから〇時間で分解は終つた。

今度は組立だ。「組立は分解の逆行なり」と教員がいはれたので、どん／＼組立て／＼みるのだが、その前に一つ／＼、小さい割ピン、ナットに至るまで洗滌するのだ。寒いときだと、筑波嵐が、冷い霞ヶ浦の水の上をなでて整備場へふきこんでくる。ある練習生はふんわりとこがした餅のやうに霜焼けした手で作業に頑張つてゐる。

「よせ、よせ」

と／＼つても

「よせ」

と答へたまゝ、冷い油の中へ平氣で手を突込んで洗滌してゐる。これこそ豫科練魂だ。

かうして實習にいそしんでゐるとまた、地上整備員の奮闘の尊さが、身にしみて感ぜられる。將來地上整備員の組立てた發動機を、機體を、立派に活動させるのは我々なのであるから、しつかりと作業を身につけて、その努力にむくいるのだ。

演 藝 會

兵舎の黒板に「本日一四・三〇より演藝大會を開催す。總員ふるつて登場せよ。於兵舎」といふ字がでかくと書いてある。喜ぶ練習生もあれば、「フアー」と頓狂な聲を出して困つたといふやうな顔をしてゐる練習生もある。

この演藝會こそは、總員待望のもので、毎日軍紀の嚴肅な軍隊で、餘念なく軍務に精進してゐる練習生にとつては、時には楽しいかうした催しを開いて、嚴しい中にも明朗な氣分を養つて日々の戦闘に備へるには絶好のものであらう。

演藝會はまた肚をつくるのに非常によいものである。大勢の前へ出てやると何だか恥しいやうな感じがしてなかくやりにくく、この點號令とはまた別の味があるやうだ。

いよく時間到来、當直練習生が先任教員に準備完了を届けると、先任教員は例のこ

にこ顔を緊張させて

「本日の競技は、残念ながらまけた。しかし試合には勝つてゐる。氣魄、實力は十分にある。今日は御苦勞であつた。今から少しの間だが演藝會をやつて樂な氣持で過せ」といはれた。今日わが分隊は、鬪球の試合で他の分隊との試合に惜しくも敗れたのだつた。

當直教員が

「ヨーシ、一班からかゝれ！」

いよ／＼始つた。若い練習生の顔に、うれしさうな眼がかゞやいてゐる。

大體流行歌が多い。流行歌といつても入隊前に流行つたやうな古いものもあるが、「ラバウル海軍航空隊」や「一人一人が決死隊……」などといふ勇ましいのが矢張り多い。だが班には東北の者もゐれば、鹿兒島の者もゐるので、お國訛で腹がいたくなるほど笑はせる者もゐる。

中にはヒットラーや東條首相の演説の眞似を、口ひげや眼鏡まで用意して巧みに演じて一同を爆笑させてゐる者もゐる。兵舎をゆるがす歡聲がどつとあがる。かうなると演藝會もいよ／＼調子が出て、皆の前でやるといふ恥しさもどこへやら、次々ととび出して珍藝を御披露に及ぶ。

都々逸をやるもの、漫談をやるもの、義太夫の眞似をやる者、軍歌をやる者、「鳩ぽつぽ……」ぐらゐで誤魔化すもの……その面白さはまるで寄席にきてゐるやうである。

演藝會をやるのにも班對抗で、班員の足らぬところは班長まで出動して精を出すので、一個分隊ならば一時間や二時間の役者は十分にある。

だが十六・〇〇時には歸隊點檢があるので、先任教員のおけさ節を最後に一同解散した。さん／＼面白い藝の續出で、腹の皮をよつたので、たゞさへ朗かな少年飛行兵は、ますます朗かになつてしまつた。

「よし、明日からはまた張切つて軍務に邁進だ！」

喜ぶときは、分隊長、分隊士、教員を始め練習生一同喜び、残念がるときは一緒に残念がる。われらの分隊は、何でも一致協力して本分に當る明るい愉快な分隊である。

精神をねる

東西一萬哩、南北五千哩、想像を絶した廣大な大東亞戦争の全域にわたつて、開戦以來次々とあげられたわが海軍の大戦果は、果して何によつてあげられたであらうか。

かつての日、ワシントン條約によつて五・五・三のあの屈辱的な劣勢比率を押しつけられて以來、わが海軍は、爾來黙々として兵器の改善に、兵術の研究、訓練の徹底に全力を傾倒して來たのであつて、開戦以來の赫々たる世界戦史にいまだかつてない大戦果は、これらの綜合された結果であるともいへる。

ハワイ眞珠灣における特殊潜航艇の奇襲はわが兵器の優秀性を示す一例であるし、又珊瑚海、ソロモンその他數十度の海戦の勝利は、敵の意表をつくわが兵術の卓越性を證してあまりあるものであるといへよう。

しかしながら、どんなに立派な兵器があり、どんな勝れた兵術上の創案があつたとしても、訓練の徹底と、それにもましてこれらを活かす大精神力の躍動なくしては、絶対に勝利と成功は期待出來ないのである。いはゞ開戦以來の數々の大戦果は、海軍傳統の大精神力の賜物であるといへよう。

海軍精神！ 大御稜威^{おほみりいつ}を體し、身を鴻毛の輕さに比し 陛下の御爲、大日本帝國の爲、醜の御楯として死をみることに歸するがごとき精神、ねりにねつた求敵必滅の大精神、これこそわが大和民族の華であり、われら海軍少年飛行兵が、魂の底の底まで叩きこまれる海軍魂である。

さればこそ、東郷元帥は「武力なるものは、艦船、兵器等のみに非ずして、これを活用する無形の實力にあり、百發百中の一砲よく百發一中の砲百門に對抗しうるをさとらば、われら軍人は主として武力を形而上に求めざるべからず」と仰せられてゐるのである。

従つて少年飛行兵の一日はおろか、その一舉手一投足もすべて精神の陶冶、魂の鐵火の鍛錬に獻げられてゐるのである。

一億國民を泣かした珊瑚海上かへらぬ索敵機の犠牲的精神、雨とそゞく熾烈なる敵の防禦砲火ををかし、平然として敵艦上に自爆する果敢極まる攻撃精神！

かうした海鷲たちも入隊当初は、學生服が七つ釦の軍服に變つたといふだけのことで一向軍人らしい自覺のあるものは一人としてなかつたのである。しかし、海軍航空隊は鍊金術師のやうなもので、こゝへ入ると想像も出来ないやうな巧妙にして猛烈な肉體的、精神的な訓練によつて、動搖した精神もしつかりとした軍人精神となり、「教育の一年目には喜んでお國のために命を捧げるといふ氣になり、更に一年半たつて教育の度がすゝむと、敵を斃すまで死んではならぬ」といふ積極的な勇猛無比な盡忠精神となつてくるのである。そこで次に少年飛行兵自身の筆によつて航空隊における精神教育の實際を紹介してみよう。

一月二十五日、分隊點檢の際、分隊長常盤大尉は、われらの一人に向はれ

「木村、貴様の目的は何か」

「はいつ 天皇陛下を御護りする最後の城壁となることであります」

分隊長はうなづかれ「さうだ。軍人は最後の最後まで 天皇陛下を御護り致して散るのだ。それこそ、軍人として最大の幸福である」

次の質問に「山下、貴様の新年初頭の覺悟如何」その答に「皇紀二六〇四年の元旦を迎へ、聖壽の無窮を壽ぎ奉り、大東亞戰爭必勝の決意を新にし、昨年よりも一步前進し、大御心に副ひ奉らうと誓ひました」次の質問に「毛利、貴様、日々立派な行ひをしてゐるか、難事に面した場合はどうするか」答に「私は御勅諭を心の糧とし、難事に出合つた場合は五箇條を心に唱へ、わが心に『出來ぬか。本當に出來ぬか、それは何遍やつてみた後の言葉か』と鞭うち、自ら省りみて正しいと思ひましたら、千萬人我に向うとも私はそれに體當りします」

分隊長は「よし、かういふ歌もある。

しきしまの錦の御旗もちさしげ

すめら軍の魁ぞせん

分隊長は、お前たちと錦の御旗をもち捧げ、さうして第二、第三の眞珠灣にとび込むのだ」といはれた。

さうだ。我々は軍神のあとにつゞくのだ。我等は 天皇陛下を御護りする最後の城壁である。我等はたゞ／＼没我歸一、盡忠の魂あるのみだ。我等が帝國日本を背負つてゆくのだ。我等少年飛行兵の健在なる限り、わが日本の本國は泰山の安きにあるのだ。

君のため何か惜しまん若櫻

散つて甲斐ある命なりせば

軍神の一人のこの覺悟を年頭に當つて、更に新にしたのである。

また一人はかう書いてゐる。

「懐しの故郷を去り、帝國海軍軍人として軍籍に入つたのは、もはや去年のことである。入隊以來度々の精神教育は常に感激の連続だった。分隊長の眼には涙が光つてゐたときも

あり、また或時は分隊全員が思はず手を握りしめる感激と興奮を覺えるときもあつた。

事實帝國海軍存立の根本は、唯々嚴正なる軍紀と堅實なる軍人精神のみである。しかうして、この兩者の一致投合によつて日清、日露の戦役以來ゆるがざる必勝の信念は培はれてきたのである。しかして帝國海軍に勇躍身を投じた憂國の士我等をして、從來の世俗人の心境を一擲、速かに軍紀に慣熟せしめ軍人は軍人の道をゆく確固たる信念を與へしものは即ち日々の、秋霜烈日の如き猛訓練、猛訓育、或は嚴正假借なき精神教育であつた。

顧みるに私が入隊した當初、旬日の間は確かに「自分は軍人なのだ」といふ自覺がうすかつた。といふよりは、むしろこの自覺を保つのに相當の意識的努力を要した状態であつた。かくの如き精神動搖期において、想像も及ばなかつたあの肉體的、精神的の猛訓練は到底たへがたいものであつたに相違ない。それを「軍人は 陛下を護り奉る最後の城壁である。歴史を推進させるには捨石が必要であつて、それあつてこそ初めて光輝ある歴史は推進するのである。さうしてお前たちがその時代の捨石たる軍人なのだぞ」

この一言によつて見事にやり通した。誰もが立派にやり通すことが出来たのだ。それほ

どの猛訓練にたへ得たこの體。とても自分の體とは信じられなかつた。思ふにこの頃は「俺は帝國海軍飛行兵だ」といふ自覺を無意識のうちにもつまでに進歩してゐる。そして日頃骨髓に徹するまでに教へこまれた『肉體がつかなくなつたら精神力で頑張れ』といふその精神力で頑張ることが出来るやうになつたと信じてゐる。

「ハワイ・マレー沖海戦」の映畫を見學した翌日の精神教育の時のことは、いまだに忘れられない感銘を残してゐる。分隊長は靜かに熱のこもつた聲で次の如く話された。

「お前たちは昨夜、ハワイ・マレー沖海戦の映畫を見學したが、皆それ／＼大いにうるところがあつたことと思ふ。あの映畫でみたやうに、お前達の先輩方はあんなに立派に戦ひ大戦果をあげてゐるのだぞ。皆先輩に負けないうやうに確りやれ。お前たちの將來は實に有意義な世界なのだ。そして國家興亡の運命は一にお前たちの双肩にあるのだ。分隊長の同期生だつた岩佐中佐もお國のために立派に死なれたのだぞ。我々軍人は、陛下をお護りする最後の城壁たるの信念を更に強め自己の本分に邁進せよ。お前たちの健在なる限り、わが海軍、否大日本帝國は泰山の安きにあるのだ。又俺の戦友岩佐中佐は出陣の前に、俺

に次のやうなことを話した。『俺とても人間である。今でも親が戀しい。また幸福な生涯も送りたい。しかし俺は敢てこの身をすて、一億國民に警鐘を放つのだ』そしてその結果、中佐の肉體は眞珠灣の露と消えてもその大精神は永久に脈々と一億國民の心魂に刻まれて、軍神と崇められるやうになつたのである。肉體は滅びても精神は千古不滅である。お前たちも先輩の傳統を汚すな。しつかりやれ！』

大尉の火を吐くやうなお言葉は、一語々々肺腑にしみ込んで熱い涙となつて我々の頬をぬらしたのである。若い心をうつたのである。

さうだ。我々の將來には素晴しく働き甲斐のある世界がまつてゐる。我々は帝國海軍の軍人である。榮譽ある航空機搭乗員なのだ。我々が愛機を操つて突撃する日も遠くない。それまでの修養だ。勉強だ。陛下の御爲には泰然自若として水火の中にとび込む人間となるのだ。攻撃につぐに攻撃をもつてし、肉體破れなば精神力をもつて攻撃し、精神力破れなば魂魄この世にとゞまつて敵を撃滅しよう。死んでこそ我々の値打は判るのである。死んでこそ初めて我々の精神は永遠に残るのである。すべて立派に死ぬために、立派な精

神を千載に残すために頑張らう。後から後から陸續として来る後輩に輝かしい傳統を残し、更に帝國海軍の誇をつがせるのだ。頑張つて突撃するのだ。最後の最後まで米英を叩きつけるために……」

かういふ偉大な精神は、全く航空隊に入るまでは誰ももつてゐはしない。しかし、この本をよまれる少年諸君は、みんな日本の少年たちだ。日本の少年たちならば、いまかうした立派な精神をもつてゐなくとも、一向差支へない。航空隊へ入つて鍛へられれば誰も彼もが日本人なのだから、必ず不滅の海鷲魂の持主となるのだ。祖國のために若き血を捧げようではないか。日本帝國のために一身をなげうつて蹶起しようではないか。そしてその時は「今」なのである。

しかも、この精神は難しい哲學の先生や聖人の悟りのやうに大悟徹底しなくてはならぬといふ譯ではない。いはれた任務を誠心こめて、たゞ一心に萬難を排してやればそれで立派な航空機搭乗員なのだ。

飛行機乗りは、單身機を操つて任務に赴かなくてはならない性質のものだから、特にか

げ日向なく、命令には絶対服従する——といふことが絶対に必要なのである。

ハワイ海戦のときに三番機でいつた少年飛行兵出身の海鷲は、烈しい十七米の横風に流されて射点を外れた。そこで彼は一分間何萬發といふ敵の防禦防火ををかして平氣で二回やり直しをして、三度目にこれならば必ず命中するといふところで、初めて必殺の魚雷を放つたのである。

「目標にあてる！」

それが彼に與へられた任務である。

弾丸がいくら来ようが、僚機が火を吐きつゝ自爆してゆかうが、與へられた命令を素直に、正直に實行する。

少年飛行兵の精神は、これでよいのである。この素直といふか、誠心といふか、それが時には犠牲的精神となり、鬼神もなかしむる攻撃精神となつてあらはれるのである。しかもこの隊ではこれらが口先だけのお説教ではなくて、どこまでも生活に結びつて實行されてゐる點に大きな特色がある。

楽しい幕営

漸く、學課目は時間表一杯になつてやつと上級生並になる。學課も相當にきつくなる。その内夏休みが近づくと上級生は歸郷が許されるので、よると觸ると夏休の計畫を話し合つてゐる。

だが一年生には一年生の楽しみがあるのだ。歸郷の代りに幕営だ。幕営は八月中旬から約半箇月の間行はれる。その幕営の近づくの練習生はどれ程ながい間待ち續けることだらう。あと十日、あと五日、いよ／＼明日ともなればオチ／＼眠ることさへ出來ないほどの楽しい空想で心は一杯になる。

いよ／＼出發だ。起床のラツバがいつもの十倍位朗かに鳴り渡る。だがラツバの鳴る前からもう幕営に胸躍らせて、四時頃から便所に起きたまゝゴツ／＼歩き廻つてゐるのがあ



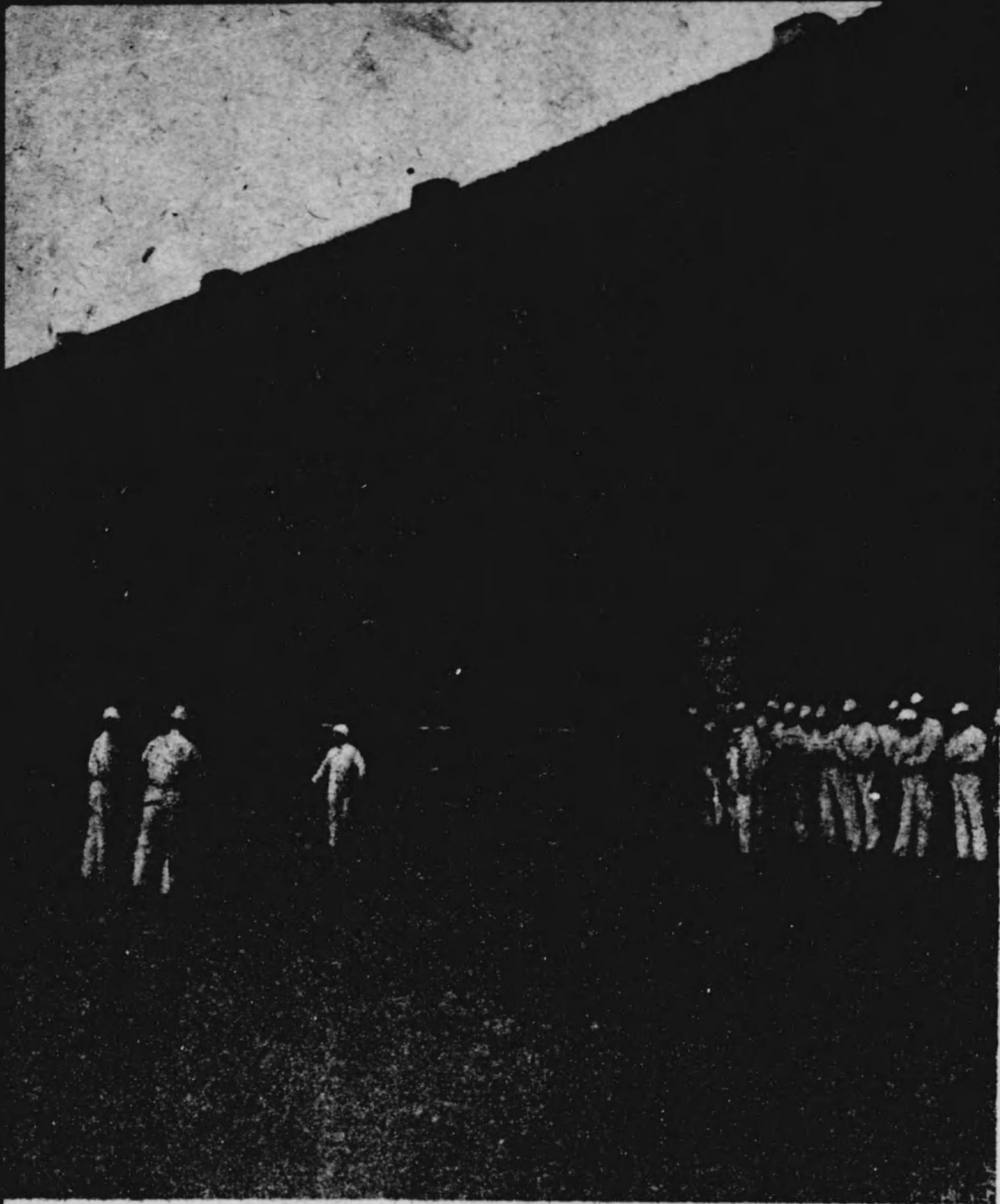
立派な兵舎の前で午後の業課を始めるのを待つ

楽しい幕営

漸く、學課目は時間表一杯になつてやつと上級生並になる。學課も相當にきつくなる。その内夏休みが近づくと上級生は歸郷が許されるので、よると觸ると夏休の計畫を話し合つてゐる。

だが一年生には一年生の楽しみがあるのだ。歸郷の代りに幕営だ。幕営は八月中旬から約半箇月の間行はれる。その幕営の近づくの練習生はどれ程ながい間待ち續けることだらう。あと十日、あと五日、いよ／＼明日ともなればオチ／＼眠ることさへ出來ないほどたのしい空想で心は一杯になる。

いよ／＼出發だ。起床のラツバがいつもの十倍位朗かに鳴り渡る。だがラツバの鳴る前からもう幕営に胸躍らせて、四時頃から便所に起きたまゝゴソ／＼歩き廻つてゐるのがあ



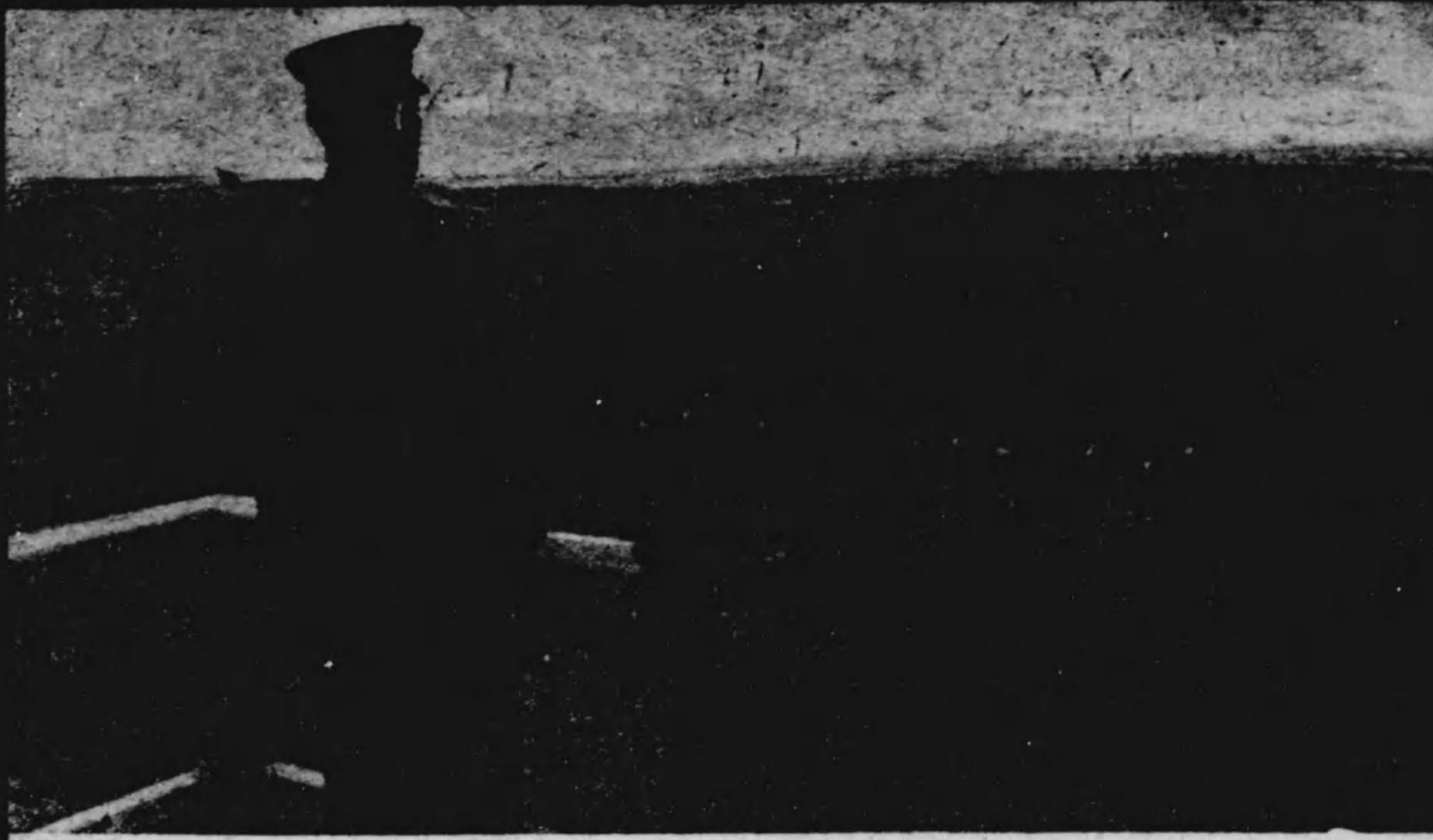
立派な兵舎の前で午後の業課始めを待つ機を



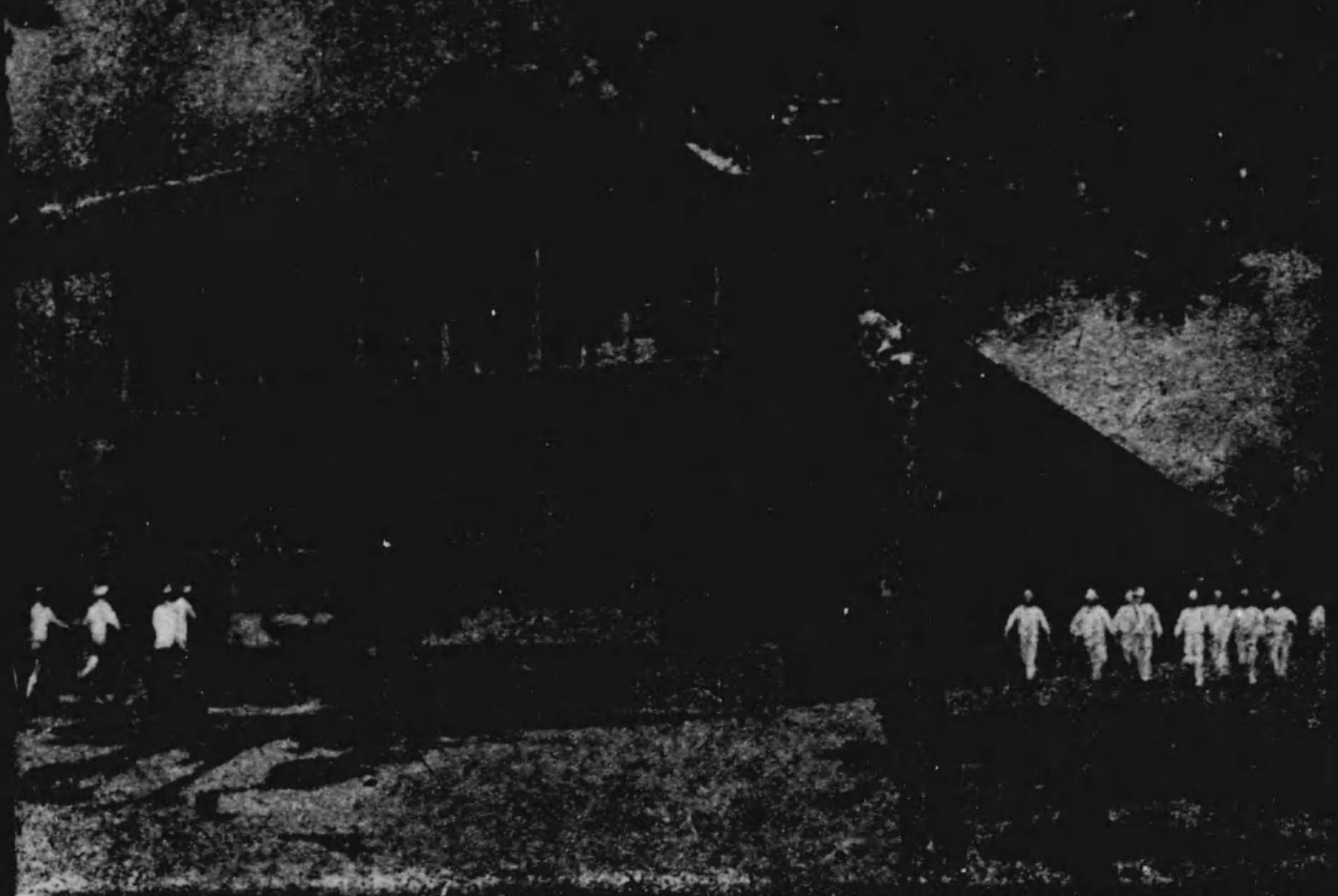
れ入手の花草に間合の練訓



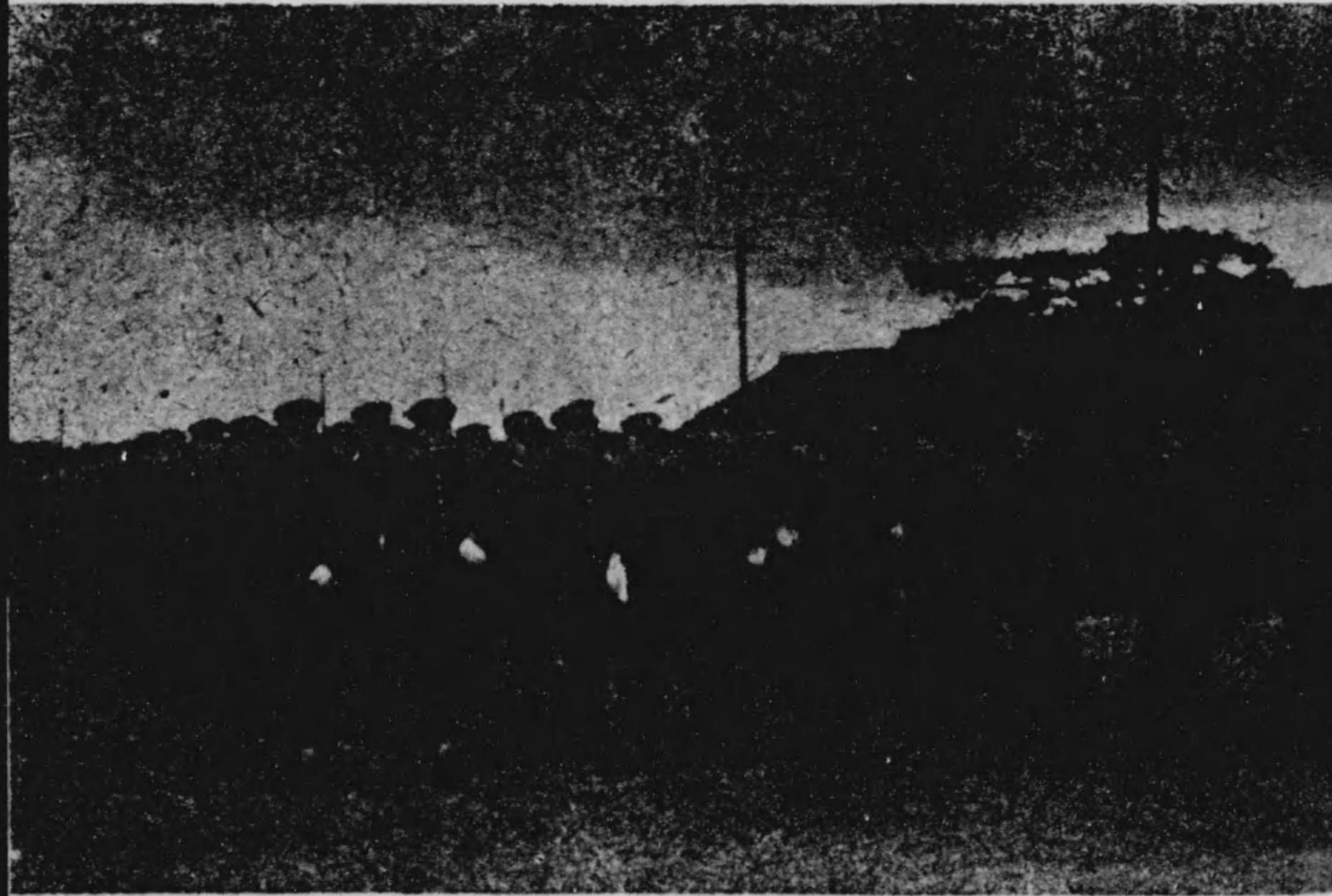
ひ憩の夕いし樂てへ終を練訓猛の日一



く 聴を意注の出外てつ持を當辨おに手に手 出外曜日いし樂



るゐてつ待ゝてたを題い温もんどうも粉汁 たれか開が保酒あさ



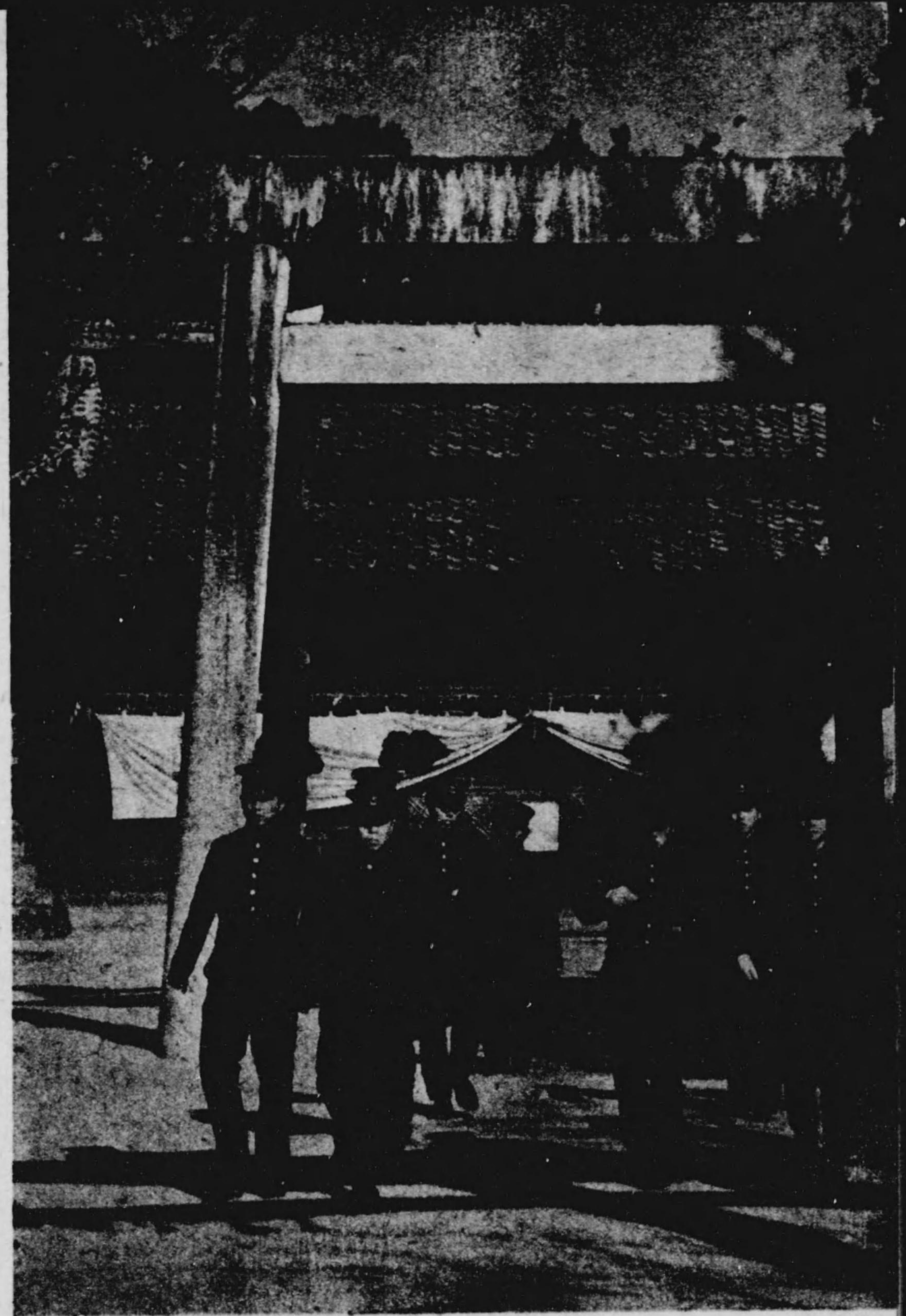
る出を門正でん組を伍隊々堂



るせば愚をさ烈猛の練訓は一リロカ千四日一食加増のみ並艦水潜



母小 だ楽團のブラクはみし樂の出外
つ打を鼓舌に芋摩薩のしくづ心のんさ



る練を心てつ詣に社神づまもに出外の曜日



日一のブラックいしかつなも觸感の疊(上)
るれさ開展が戦撲相腕ち忽 慢自力ぬら劣れづい(下)

る。洗面も朝食も皆にこ／＼顔ですます。だが連日の水泳で眞黒になつた連中が、皆にこにこするのだから、こりや一寸珍妙な圖柄だ。

隊門を夏風に送られて、楽しい小旅行の後、めざす幕營地に威風堂々と乗込んでゆく。前には長く美しい砂濱がつゞき、眼前には先輩たちが日夜勇壯な活躍をつゞけてゐる太平洋が碧波を満々とたゞへてゐる。

讚へよ、幕營、少年飛行兵のキャンピング！ つくや否や輸送班の運んで來た荷物を運搬し、顔から汗を流して敵前上陸のやうな勢ひで忽ちの中に片付けてしまふ。次は十五日間の宿舍たる天幕の建築だ。これも教班長が羽柴秀吉のやうに采配をふるつて片づけてしまふ。

朝日が太平洋の水平線から朝雲を紅にそめてをどり出ると、「起きろよ、起きろよ、皆起きろ、起きれば隊長さんが笑つてる」と起床ラッパが楽しく鳴り渡る。忽ち明けつ放しの天幕からは明けつ放しの笑ひが起る。みんな楽しいのだ。うれしいのだ。

すが／＼しい朝の濱邊で訓育が始る。手旗信號、發光信號、旗旒信號と、朝の日課は流



日一のブラクいしかつなも觸感の疊(上)
るれさ開展が戦撲相腕ち忽 慢自力ぬら劣れづい(下)

る。洗面も朝食も皆にこ〜顔ですます。だが連日の水泳で眞黒になつた連中が、皆にこにこするのだから、こりや一寸珍妙な圖柄だ。

隊門を夏風に送られて、楽しい小旅行の後、めざす幕營地に威風堂々と乗込んでゆく。前には長く美しい砂濱がつゞき、眼前には先輩たちが日夜勇壯な活躍をつゞけてゐる太平洋が碧波を満々とた〜へてゐる。

讚へよ、幕營、少年飛行兵のキャンピング！ つくや否や輸送班の運んで來た荷物を運搬し、顔から汗を流して敵前上陸のやうな勢ひで忽ちの中に片附けてしまふ。次は十五日間の宿舍たる天幕の建築だ。これも教班長が羽柴秀吉のやうに采配をふるつて片づけてしまふ。

朝日が太平洋の水平線から朝雲を紅にそめてをどり出ると、「起きろよ、起きろよ、皆起きろ、起きれば隊長さんが笑つてる」と起床ラツバが楽しく鳴り渡る。忽ち明けつ放しの天幕からは明けつ放しの笑ひが起る。みんな楽しいのだ。うれしいのだ。

すが〜しい朝の濱邊で訓育が始る。手旗信號、發光信號、旗旒信號と、朝の日課は流

れるやうに進んでゆく。

それが終つてそろ／＼暑くなる頃には水泳の時間だ。先づ砂濱で準備運動をして白波蹴つてとび込んでゆく。晝食後は晝寝の時間だ。みんな凄じい軒をかいてねてしまふ。

あとは又懸命の水泳練習だ。そして夕食をすますと濱邊の涼風に當りながら張切つて砂濱で相撲をとる。待つたも糸瓜もない。土俵のまはりに體格のいゝ真黒いのが、胡坐をかいて圓く坐り、一人が倒れれば、すぐ組みついてゆく。體がそのまま電光となり石火となる。行司がよくも勤ると思ふが要は攻撃精神と頑張り精神が充實したのが技のうまいのより勝ちだし、よしまたいくら技が早くてもそこは少年飛行兵、入隊當時の適性検査で椅子にのせてぶん廻されて、視力のいゝのが選んであるから、ちつとも心配はない。

幕營にはかうした日課の外に、見學、遠足、水中遊戯、映畫會、場合によれば地引網、雨がふれば演藝會といふやうなものまであるが、こゝでは水中遊戯を練習生の日記に偲んでみよう。

「私達は腹一杯の御馳走にすつかり眠くなりかけたが、水中競技があるときかされて、

先刻の眠たさがうれしさに早變りした。準備をさ／＼怠りなく濱邊にうつて出る。

ついたのは午後一時半頃だと思ふ。真先に騎馬合戦である。紅白兩軍に分れて水の中に入つてゆく。

ひやり！ 冷い。「何くそ」と自分は我慢してゐるのであるが、眠くなりかけてゐた神經が承知しない。しかしよく見ると私ばかりが冷いのぢやないらしい。その證據には大きな波が一つくると、きまつて前から順々に用もないのに矢鱈ととび上る。時々とび上りそこなつて「ウフフ……」なんて力んでゐるものもある。皆が寒いのだと思ふと、いくらか温くなつた。

やがて、「用意」のラツバが鳴る。私は騎手になりたかつたが、體が小さい上に比重が重く組討は全然だめ。あんまり調子が外れすぎてゐるので、遠慮して馬の脚になつた。

「始め！」のラツバと同時に敵陣目指して白波を蹴る。出發するが早いのか、最早三、四騎の敵に圍まれる。しかし友軍の大將はなか／＼強い。あつさり水漬けにして味方の後を追ふ。私は馬の脚でも戦ふ權利は十分あると思つて、大いに敵の騎手の足をひいてやつ

た。すると「馬のくせに、手を出す奴があるか！」とどなられた。なるほど、馬の脚には手がなかつた筈だと苦笑した。だん／＼名譽の落馬をする者が増してくる。自然現象か化學變化かは知らぬが、とにかくばちや／＼、どぶん／＼、ぶく／＼の連続があらちちらで起る。

みる／＼内に馬の體が減つてゆく。或は左足が倒れたり、或は右足が行方不明になつたり、胴體が勝手に泳ぎ出したり、全く古今東西稀にみる珍馬である。私たちの大將も既に名譽の落馬をしてしまつた。しかしまだ馬の胴體と兩脚は大丈夫分解しなかつたので、馬の突貫をやらうと思つたが、また呶鳴られたのでやめた。

折から休戦を告げるラツバの音。どちらが勝つたかと思つてゐたら、敵軍から萬歳、萬歳との叫びがあがる。これはをかしい、負けた筈はなかつたが！

しかし皆が名譽の落馬をしたらしいのだから仕方がない。敵にばかり叫ばせては腹が減つて氣の毒だらうと考へて、天まで届けとばかり、今度は味方の方で萬歳を叫んだ。

次々に自由形競争、ボート上げ、プレスト班競技などがあつたが、しかし半金槌の私には苦手である。そんなものはぬきにして、今度は綱引。元來私は綱引は陸上でのみ行はれるものだと思つてゐたので

「綱を水の中に入れてどうするのですか」と質問して叱られた。「用意」のラツバが鳴る。一齊に綱につく。誰かゝ腰を落せといつた。腰を低くすると水が頭のあたりまで来ていかにも深さうである。片方ばかり深いところでは釣合はない。向ふの軍も深いところへやれといふことになる。そこで味方が一度に立ちあがつて綱をひくらしい。なか／＼頭がよゝ。

「始め！」のラツバが鳴つた。ニュツと跳びあがるが早いか無茶苦茶に引いてやつた。味方がどん／＼勝つてゆく。蓋し握力二十八の私が無茶苦茶に引く結果らしい。皆の顔が元氣一杯だ。引いて引いて引きぬいてやつた。勝つたうれしさに、まだ終らぬ内に萬歳をやつて笑はれた。

次に獲物拾ひである。獲物はまくは瓜、あひる、トマト等である。プブプブとか何とかラツバが鳴つた。私には恥しながら意味は判らぬが、しかし「始め！」の號令にちが

ひない。一度にどつと水の中へとび込んでゆく。パツ／＼と白波があがる。その度に大きな尻が跳上る。まるで尻の突貫である。みる／＼海が深くなる。半金槌はそろ／＼恐ろしくなつてくる。それでもどうやら人の尻を拜みながら、競技場につく。もう盛に奪ひ合ひが始つてゐる。私達も見てゐても面白くない。半金槌の腕前を示してやらうと、びしやびしや中へとび込んでゆく。「しめた！」と思ひながら、まきは瓜を船に投込まんとしたとき、あら悲しや敵の一人に鹽漬けにされ飲みたくもない鹽水をしたま飲まされた。太平洋も水が減つて大いに困るだらうが、私だつてなか／＼苦しかつた。見渡すと、あそこにもこゝにも、まきは瓜や果實の破片が散亂してゐる。外のことはピンからキリまで一切頭の働かぬ私は、不思議やたべ物を見ると慈悲心が起つて——エエ——勿體ない、船へあげてやれ。これでも大きいのは〇・一點ぐらゐにはなるだらう。さうすれば矢張り味方のためだい——と妙なところへたぬを使ふ。

さて「あひる」はどうなつたらう。彼奴は一羽で二〇點だつたな——と思ふと幾らか心配になる。しかもだん／＼敵の方へ取られてゆくらしい。いくら金槌の親類でも、たゞ見

てゐる譯にもゆかぬ。義をみてせざるは勇なきなり。「俺だつて勇氣ぐらゐある」と空元氣をつけて「あひる」に向ふ。しかしどこにゐるのか少しも判らぬ。突然現れたと思ふと、どこか破けたやうな聲を出し、人騒がせをさせて、また行方不明になる。よく／＼見てゐるとKの奴、自分で尻の下へ突き込んでゐて「どこだ、どこだ」と叫んでゐる。その圖々しさに顔まけしてしまつた。

よし——、その儀ならばと近よるより早くKにくみついた。「あひる」先生は得たりとばかり息の苦しさに大いに暴れて水面に首を出す。Kの奴、慌てゝ隠さんとしたが時既におそい。大勢のために分捕られてしまつた。やうやくこれで胸がすーつとしたと思つたのも束の間、また／＼二羽のあひるは敵軍にとられてしまつた。

かくて遂に五〇何對二八でわが軍は敗れた。

今日は天氣加減で味方はふるはないらしいと、天候にかこつけてしまつた。最後に寶探しがあつた。矢張りこれも苦手であつた。一つも拾はず御上陸とは情ない。折柄今まで曇つてゐた天空やうやく晴れ渡り、われらの競技をほむるがごとく、太陽は微笑んでゐた。

おゝ！ 何と楽しかった今日よ！

私達は足音高くといひたいが、砂濱ではお話にならぬが、とに角元氣一杯、勇氣一杯で街の中に出る。

おゝ！ また天幕には御馳走がまつてゐるであらう。

われらの前途に幸あれ、われらが國に幸多かれと心から叫んだ。

行幸を仰ぎ奉りて

練習生は日夜「軍人は 陛下を御護りする最後の城壁である」と胸に刻み、御勅諭の精神を胸奥に銘じて猛訓練をつんでゐるが、去る昭和十七年七月十三日、第十一聯合航空隊行幸の御途次、土浦海軍航空隊へ行幸を賜はつたのは、無上の光榮であつた。

×

×

七月九日の十八時、突如總員集合が令せられたので、全練習生は課業整列のときと同じやうに整々と號令臺前に集合した。やがて號令臺上に立たれた副長は、おもむろに「畏くも 大元帥陛下におかせられては、來る十三日午後一時五分、霞ヶ浦海軍航空隊及び當隊に臨幸あらせらるゝ旨の御沙汰を拜するところがあつた」とつたへられた。

大元帥陛下、當隊に臨幸あらせらる！

突如、全練習生は、嵐のやうな感激にまきこまれた。

戦時下、御軍務御多端の折をもかへりみられず、一天萬乗の大君御自ら當隊へ臨幸あそばされるとは！ 練習生の耳には正に青天の霹靂であつた。その感激、誠になきたい程にうれしかつた。

早速十日からは學課を全部停止し、全練習生をあげて、隊内の清掃にとりかゝつた。皆一生懸命である。隊員一同一丸となつての作業に隊内はみる／＼美しくなつていつた。或者は作業隊として感泣しながら 陛下の御座所として指定せられた號令臺周圍の清掃に奉仕してゐる。ある者は、天覽作業に出るための準備演習に全力をふるつて精進してゐる。

十一日には分隊長より 陛下の御日常生活についての謹話があつたが、あまりの畏さに話される分隊長も泣き、さく全練習生も大御心の尊さに涙してゐた。更に分隊長は語をついで

「お前たちは、全くの幸福者だゾ。お前たちは近き將來において 陛下の御爲に『萬歳』

を叫んで潔く死んでゆく者が多いのである。陛下は辱くもこの事を思召され、特にお前たちに、海軍少年飛行兵に御訣別のために、當隊に行幸あらせらるゝものと解釋し奉らねばならない」と結ばれた。

遂にその日は來た。昭和十七年七月十三日！

この日こそ一生一代を通じて忘れることの出來ない日だ。

「さあ、今日は臨幸あそばさる」

と思ふと自分では絶対に落度はないと信じてゐるのだが、何か重大な落度でもあるやうな氣がして仕方がない。靜かに今日までの班長、分隊長、分隊長の諸注意事項をもう一度頭の中でくりかへしてみる。

家々の門毎にたてられた日の丸の旗が、折からのそよ風にひらめいて、晴れの行幸をおまち申上げてゐる。清掃された御通路に當る兩側には「この千載一遇の機を逸すまい」と、ひたすら御待ち申上げる國民學校生徒、工員、老幼男女等が、いづれも至尊の龍顏を拜し奉らうと緊張の面持で居並んでゐる。

この日 陛下には海軍式御軍装に大勳位副章、功一級金鷄勳章副章を御佩用あそばされ、天機殊の外御うるはしく、蓮沼侍従武官長陪乗の略式自動車鹵簿にて松平宮相、木戸内府、百武侍従長、角倉行幸主務官等を従へさせられ、午前九時四十分、宮城御出門、同十一時二十分土浦驛着御、直ちに略式自動車鹵簿にて同驛發御、霞ヶ浦航空隊へ向はせられたのであつた。

少年飛行兵の一部は、午前十時三十分から軍装に威儀を正し、霞ヶ浦航空隊への路上に堵列して御待ち申上げる。

遙か彼方から清浄な大氣を破つて「氣をつけ」のラツバがひびいてくる。堵列の少年飛行兵はもう無意識のうちに不動の姿勢をとつた。その瞬間にはもう隣兵のゐるのも、眼の前の木立も視界からかすんでゆく。その無我の境にある儀仗隊ぎちやうたいの前を、軍樂隊の「君が代」吹奏のうちに鹵簿は肅々としてすすんでゆく。まづ先驅のオートバイがすぎ去ると 陛下の御車が御通りあらせられる。感激が背筋を走つて、銃を捧げもつ手がふるへる。拜すれば、おゝ！ 陛下には忝くも御舉手の禮を賜はりつゝ御過ぎあらせらるゝではないか。拜

する龍顔、あゝ、何たる光榮ぞ。思はず大聲で 陛下の萬歳が叫びたくなつた。

ぐつと胸にこみあげる感激、遠き後までもこの感激と光榮の思ひは脈々と脈うつであらう。「大君の邊にこそ死なぬ」——火の中でも水の中でも莞爾として大義に赴かうではないか。日本人としての感激が湧然として心からわき上る。

あとで士官の方々からお話をうかゞつたが、海軍へ入つて二十年も三十年もたつて初めて儀仗兵としての光榮にあづかつたといふことであるが、少年飛行兵は、入隊後僅々一年、しかも二等飛行兵の身でありながら、この重大なる儀仗隊に加へられたのだ。何たる至福であらうか。感泣せざるをえなう。

ついで 陛下には、午後一時、略式自動車鹵簿にて霞ヶ浦海軍航空隊を發御あらせられ、同五分海の雛鷺の巢土浦海軍航空隊に着御、同航空隊司令以下高等文武官の奉迎裡に練兵場にもうけられた玉座にすゝませられ給うたのである。

掲揚臺には燦たる天皇旗が、神々しくひらめいてゐる。

隊門附近から居並ぶ儀仗隊の捧げ銃の中を通つて、御召車が玉座近くにとまると、

陛下には諸員奉迎のうちを、畏くも玉歩を號令臺上にすゝめ給うた。

副長の凜とした號令によつて、練兵場に整列し、今日を晴れの天覽作業に眞新しい純白の事業服にくろがねの肉體をつゝんで待機してゐる練習生は、凜々しい海軍式御軍装を召され、玉座につかせられ給うた。陛下に對し奉つて、「敬禮」を行つた。

陛下には、おもむろに御答禮あそばされた。

みれば練習生の中には、皇恩の有難さに涙ぐんでゐる者もある。

ついで「課業始め」の號令で、豫定の御前作業が始められた。みんな一生懸命に精魂をうちこみ、一代の元氣をふるつて航空術（整備）、手旗信號教練、柔道、劍道、銃劍術、徒手並に器具使用の海軍體操を廣い練兵場一杯に展開、演練に演練をつんだ作業を天覽に供し奉つたのである。

陛下には、畏くも双眼鏡を御手に御覽あそばされる。もし作業を間違つては不忠の上もないと思ふと、練習生の體には知らず識らずの内に汗がにじみ出る。柔道組も劍道組も渾身の力で闘つてゐる。皆は暑いのも暑いと感じないらしい。

「課業やめ」で、課業をびつたりとやめる。この間十五分。

陛下には、司令以下、勳章、記章を佩した諸員奉送のうちに、御親閲を終らせられて再び霞ヶ浦海軍航空隊へ向はせられたのであつた。

一時三十二分、聯合航空隊麾下の三〇〇機が、爆音勇ましく堂々の編隊を蒼空に展開してとんでゆく。我等の先輩が錬磨の飛行作業を窺覽に供し奉つてゐるのである。

さるにても、至尊を咫尺の間に拜し奉つた全練習生の感激は、誠に筆舌につくしがたいものがあつた。分隊標語の第一條には「軍人は 天皇陛下を護る最後の城壁である」とあるが、この日ほどこの言葉が胸にしみたことはない。

仰げば、明るい夏空よりは燦々と日の光がふり注いでゐる。さうだ、大空の護り！ これこそ自分たちに與へられた務めなのだ。

陛下の御尊影を再び拜することがあるとは思はれないが、今日は畏れ多くも心中ひそかに訣別申上げ心には深く決することがあつた。「陛下萬歳」と叫んで、硝煙の中に突込む

ときも間近であらう。敵艦へ體當りだ。軍神以上の働きをして、靖國の華と散らう。

やるぞ。さつとやるぞ!

御勅諭にも「朕は汝らを股肱とたのみ……」とあるではないか。全練習生は眦を決し拳をふるつて、盡忠報國の決意を新にしたのである。

また今日、聖駕を當隊へ迎へ奉る無上の光榮をになつたのも、大東亞戦線全域にわたつて血戰奮闘、敵米英を完膚なきまでに叩きのめしてゐる諸先輩の偉勳のしからしむるところである。その先輩の偉大なる勳をよみせられ、その修練と同じ修練をうけつゝある我々後輩の状況を天覽、御激勵あそばさるゝ思召にて臨幸賜はつたのだと思へば、今後ますます我々はこの大御心にそひ奉らんがため奮勵努力して、幾多の先輩が築きあげた偉大なる大日本帝國海軍をしますくゝ偉大ならしめんがために、全力をつくさなくてはならぬ。

また一同には御煙草を賜はり、練習生一同には御菓子まで賜はつたが、それにつけてもどんなに 陛下がわが海軍航空隊に御期待あそばされてゐるか、拜察するさへ畏き極みである。

現在の課業を完全に終了して立派な飛行兵として出陣することこそ、大君への忠義の道なのだ。海軍大臣の謹話にも「わが航空軍備に注がせ給ふ 聖慮の優渥なるに對しましては關係將兵一同は申すまでもなく、又たゞに海軍のみならず全國民とその光榮と感激をともにする次第であります。……將兵一同は感奮興起、一死もつて聖戰を完遂、鴻恩に報い奉らん決意を固くしたのである」とあるが、本當に身も心も投げ出して御宸襟を安んじ奉らなくてはならない。

夏 休 み

いつもの起床時間が身につついてか、五時すぎになるとバツと眼がさめる。その瞬間、思はず航空隊の釣床の中を思ひ出す。今にも擴声器が「總員起し十五分前」と鳴り出しさうな気がしてならない。

夢からさめたやうに、家にゐるのだと思ひ出してみると、確に布團の中だ。

「さうだ。自分は昨日から歸省してゐるのだ。一分でも惜しい時だ」

と思つたので、床を蹴つてとび起き、釣床をたゞむ要領で目にもとまらぬ早さで布團を片附けた。

氣持のいゝ朝だ。深呼吸をして「朝だ、夜あけだ……」をうたひ出した。洗面を終へてから朝食まで庭木の手入れをすることにした。入隊前に挿してあつた木が、もうすつかり

一人前となつて、緑の大きな葉と赤味がかつた細長い芽をする／＼と伸してゐる。

弟たちも起きたらしい。今年五つの弟がちよ／＼と走つてくる。

「お早う」といふと

「もう起きたの。兄さんは早いんだなあ」といふ。なか／＼口が達者になつた。

「兵隊さんは、いつも早く起るのだよ」といふと

「そんなら眠る暇がないね」と答へる。いつも自分の方が早く眠つてしまふのだから、兄さんは眠る暇がないのだと一人できめてゐるのだ。可愛いものだ。

ラジオ體操が始つた。庭で弟たちと一緒にやつてみたが、もう大分忘れてしまつた。弟が笑ふので、海軍獨得の海軍體操を教へてやつたら、これは流石に難しく中學へいつてゐる弟でも出来ない。恐らく自分だつていきなりやらされたら出来なかつたに違ひないが、何といつても不斷の訓練の賜物で、手と脚が連動して複雑な運動が出来るのだし、體がしなやかに動くのだ。

食事をすませて墓參に出かけ、滿洲事變に戦死なされた叔父の墓に詣で、自分も君國の

ために命を捧げて働きますと墓前に固く誓つてきた。

午後は、弟達をつれて海水浴に出かけた。太陽はかん／＼と照らし、日向灘は紺碧にすんでゐる。絶好の海水浴日和だ。みんなで飛びこんで泳いだ。海軍仕込みの自分に齒の立つ泳手はない。太平洋の向ふ岸まで泳いで行つても仕方がないと思つたので、砂濱へ上つて背中をやくことにした。胸や腹に當る柔い砂の感觸が、またとなく楽しい。のびやかに時が流れてゆく。

夕食後の縁に出て、弟と一緒に線香花火をあげた。夕顔がほのかに匂つて、星が流れ、夏の夜は静かにふけてゆく。

水泳競技

鈴鹿の連山の上にむく／＼と積亂雲の屏風が立ち、海の色がひと際青く、沖をゆく白帆が眼にしみるやうになると、暑い夏がくる。練兵場で猛訓練をつゞける練習生の頭上からは、眞夏の太陽がいやといふほど照りつけて、あたり一面に眼のくらむやうな陽炎がたちよぼつてゐる。

三伏さんげの極暑も近い七月の半ばともなると、橈漕訓練とともに水を相手のわが海軍軍人には是非とも必要な游泳術の訓練が始る。

航空隊にすぐ迫つてゐる美しい紺碧の伊勢の海！

こゝには毎日午後になると赤い帽子、白い帽子をかぶり禪一本になつた筋骨隆々たる練習生の潑刺たる姿が見られる。わが分隊も今日から水泳が始るが、それに先立つて教員か

ら訓示をうけた。

「皆も、今日から水泳を始める。

海軍では常に水が相手であるから、水泳は特に重要である。中には山國に生れて當隊へ来て初めて海を見たなどといふ者もあらうが、さういふ者は特に熱心に練習をして、夏の終りまでには必ず泳ぎに自信をもつやうにせよ。

海軍では水泳は、單なる運動競技とはちがふ。水泳は武技である。

なほ、海軍の水泳は速く泳ぐばかりが能ではない。實用的な耐久力のある泳ぎをものにするのが目的である。

艦にのる以上、時には暴風雨が来て海におちる場合もないとはいへない。また太平洋上の空戦によつて、自分一人洋上に不時着しないこともないとはいへぬ。そんな場合に落ちても無駄な死をしないで、あくまで生きて敵を仆すために泳ぎが必要なのである。

また一人ばかりでなく、十名、二十名といふ者が海へおちた場合、もし假りに半分の名の者が泳げないで、残り十名の者にかじりついていつたら、結局二十名全部が溺れてし

まふ。即ち泳げぬ者が半分おたらみんな死んでしまふことになるから、さういふことのないやうに、全部が全部何時間でも泳げるやうになれ。終り」

なる程、教員は流石長年海できたへただけあつて、うまいことをいはれるなど感心した。

沖合をみると、四列の縦陣をつくつて、すい／＼と泳いでゐる。他の分隊の河童連である。早く水にとび込みたいが、それに先立つてまづ自分の分隊では、泳げる者、金槌の者を區別し、更に泳げてもどのくらゐ泳げるかをみる検査が始つた。この結果、全く泳げない者は赤い帽子をかぶらされる。それよりも少し泳げる者は四級の眞白い帽子。その上の者が三級、二級、一級となつて、それ／＼白い帽子に赤い筋が一本、二本、三本と入つてゐるのかぶらされる。

だが泳げるとはいへ、大抵の者は我流があつて海軍式ではないので、最初に我流の叩き直しがある。

かうして十日、二十日と猛訓練をつむと、全く泳げなかつた金槌組も、相當な荒波でも

乗切つて鮮かなところをみせるやうになる。すると、夏の末近くに行はれる各分隊對抗の水泳競技の日が迫ってくる。

雨の日も風の日も、飛沫をとばして訓練をやつてゐたのだが、競技まであと数日となる。と各分隊内では連日競技の豫行をやつて、各自の成績をとつて各兵舎に張出し、めい／＼の心を勵ましてゐる。練習生はこの張出しをみては、自分の負け勝ちが同時に分隊の勝敗を左右するので、各分隊の名譽を思ふ一心で懸命に練習をつむのである。

練習の初めには、潮の流れで随分流されてゐたが、次第に海の癖のみこみ、潮をのりきる術もおぼえて、競技の前にはこの「航法」もうまくなつて大體元の出發位置にかへれるやうになつてきた。

いよいよ／＼競技の日、分隊員は總員デツキに整列して分隊の必勝を固くちかつて濱へ出た。夏の初めにはまるで泳ぎを知らなかつた練習生もこ／＼顔で自信満々としてゐる。かうなると皆はアメリカぐらゐまで泳げさうな氣になつてゐる。

青い海原の上、海岸からはるか五〇〇米の地點にうかぶ回頭ブイには、青旗がゆれてゐるが、何だかあんな近くでは泳ぎ足りないやうな氣もしてくる。

出發點について沖をにらむと、何だか胸がどき／＼する。

第一回が出發した。

青々とした海原も、一瞬にして眞白な飛沫と變る。三重空健兒がわれ劣らじとふり廻す手足で、さしにも広い海面も眞白に泡立つてゐる。

よし、自分も前の者を追ひぬく氣持で頑張らう。負けるものか！

「用意——ター」の號令で一齊に波を蹴立て、とびこみ、無我夢中で泳いだ。からい鹽水が鼻から入つたがそんなことでは驚かぬ。からいぐらゐで負けてたまるか全馬力をあげて力泳した。見ればもう回頭ブイも近い。幾らかほつとしたが今からが大切な時だと、先登切つてすゝむ戦友目あてに、それを追つて一生懸命に泳いだ。決勝點まであと十米といふとき、急に手足が固くなつて身動きも出来ぬやうになつた。途端に波が来てガブリと一口また飲まされたが、負けじ魂を發揮して這ふやうにして遂に決勝點にとび込んだ。

この時自分の分隊からは三組に分れて出場したが、順位はその三組の綜合成績でさまる

のである。一人だけいくら早く泳いでもだめなので、いつも團體の成績できめられる。飛行機なら編隊の強味がみられる譯で、こゝに海軍の特色がある。

さてその結果は、偵察隊におされて二番になった。その後分隊長から

「水泳競技には負けたけれども、お前たちはよく最後まで頑張った。負けたことは實に口惜しいが、この負けた口惜しさを長くもちつゞけて、今後行はれる各種競技に二度とこのやうな思ひをせぬやう日頃からよく心がけて一生懸命頑張れ」と訓示された。

さうだ何事も平素の心がけが肝腎だ。頑張らうと分隊員互に誓ひ合つた。

帆走遠航

帆走遠航！

何と魅惑的な言葉であることよ。

今日も亦上天氣。豫科練のダビットを離れた十隻の短艇は、陽に映えて眼に痛いやうな真白い夏服に身を固めた練習生を満載して伊勢灣にうかび、指揮艇からの信號をまつてゐる。

間もなく指揮艇の檣頭高く、「帆走用意」の信號があがる。

一そらッ、帆走だ。

ぐつと白帆を張ると、颯々とふきよせる追風を一杯にはらんですく／＼と走り出した。

艇は波のうねりに、氣持よくゆられながら青海原を走つてゆく。海邊の松並木の向ふの兵

舎がだん／＼と小さくなつてゆく。

初めの内は皆で、並んで帆走してゆく各艇内の偵察だ。双眼鏡を手にとつてみると、遠くを走る艇内がよく見える。

・「やあ、向ふでEの奴水筒から水をのんでゐるゾ」

「どれ／＼見せろ」

などと、一つしかない双眼鏡のとり合ひである。

次は海圖をひろげて、位置を測定する。

「おい、目測、海岸までいくらあるか」

「二千米だ」

「三千五百だ」

一人が羅針儀と定規をもつて暫くやつてゐたが、海圖に入れられた位置をみると、海岸からは四千米の沖合と判つた。

「二千米だなんて、貴様の眼は節穴か」

艇尾には小さい軍艦旗がちぎれるばかりにはためいて、小艦隊ながら流石に威風堂々たるものがある。艇は、決戦のソロモンの海へも通ずる紺碧の海を、軸に白波をたて／＼んでゆく。

間もなく指揮艇からは、「食事をなせ」と信號を送つてきた。

皆は教班長とも／＼お辨當をばくつき始めた。快い海風に頬をなげさせながら、海上でたべる晝食の味はまた格別にうまい。

食事が終ると再び指揮艇から信號があつて「手旗教練を行ふ」といつてきた。

「了解々々」

「貴艇の帆走見事なり」

と早速手旗で送つてきた。さてその返事だ。

「おい、何て送らうか」

いつもの茶目なNが、「敵もさるもの、引つかくもの」とやれといふ。わつと笑聲が艇内にわく。

よし送らうと立ち上つて、手旗をふり始めた。途端に、艇が波にゆれてぐつと大きく傾いたので、信號員はあつと思ふ間に、漕手座の間にころがり落ちた。

「貴様、海の中に落ちこめばよかつたのに……」とまた爆笑がわく。

「ざあーと波を切るたびに、艇首からは白い飛沫があがる。

後から第四カッターが迫ってくる。

「抜かれるゾ、抜かれるゾ」と思つてゐる内に鮮かに抜かれてしまふ。

「よしッ」といふので帆を直すと、今度はみる間にこちらが抜きかへしてしまふ。暫く抜きつ抜かれつ快走する。

伊勢灣の沖合はるかで、今度は方向を變へて歸途につく。

各艇とも風を間切りながら、見事に帆走してゆく。互に抜きつ抜かれつ、猛烈なせり合ひを演じて練習部前のダビットに近づく。後から急ピッチで追跡してくる第四カッターをそのまま打ちやつて、わあつと萬歳を叫んだまゝ第一番にゴールインだ。

ダビットには、後輩たちが微笑しながら出迎へてゐる。

上陸してからも體はゆらくと柔くゆられてゐるやうな氣持が、體の中に残つてゐる。

帆走遠航は、本當に忘れがたい楽しさがある。

東京行軍

明日は帝都の見學だ。少年兵たちは全国各地から集つたものが多いので、大部分は初めてみる帝都である。

いよ／＼待望の東京行軍だ。若葉かをる初夏の風がふいて、楽しい今日の行軍を天までが祝つてくれてゐるやうである。

朝日に照り映える霞ヶ浦の湖を右にみて土浦驛着。土浦からの列車は初の東京見物に胸躍らせる練習生を満載して上野へ向ふ。まるで遠足のやうに楽しい旅だ。しかしつい去年までの國民學校の兒童とはちがつて、今は烈しい訓練にきたへられた名立たる少年飛行兵である。うれしい楽しい氣持の中にも凜たる軍律はみなぎつて、同じ車にのつてゐる人々も、「あれは海軍の少年飛行兵だよ。流星に立派なものだね」と、その潑刺として規律正

しい行動に感歎の聲を放つてゐる。我等はかうした國民の輿望にこたへるため、ますます／＼猛訓練をつまなくてはならない。

列車や電車の乗降りにも秩序整然と行動し、一同東京驛頭に降り立つた。さてここから帝都訪問の第一歩を宮城へとすゝめる。中央郵便局、丸之内ビルディング、明治生命ビル等の壯大な建物の群立に目をうばはれながら、鋪道の上をすゝんでゆく。

馬場先門を越え、新芽をふいたばかりの緑の柳が、風情ゆかしく風になびいてゐるお濠を越せば、もう宮城前の廣場へ入る。廣い道を横切つて、肅々と、美しく敷きつめられた砂利を踏んで二重橋前にゆき整列する。鬱蒼と茂る老松につままれた緑深い大内山、自づと身も心もひきしまり、思はず襟を正すのである。

みれば自分たちよりも先に召されて戦線へ征くか、國民服に包んだたくましい肩から日の丸の旗をかけ、これからの奮闘を誓ふ決意も固い眉をあげて、聖壽の萬歳を唱し奉つてゆく出征兵士もあるかと思へば、老幼男女をとはず、いづれもこの二重橋前に頭を垂れて、聖戰の貫遂と 聖壽の彌榮を祈つて、伏し拜んでゐる人々がひきも切らない。

「最敬禮！」

分隊長の凛たる號令に、一同深く頭を垂れて、盡忠報國の念をますます固くするのである。

宮城奉拜が終ると、隊伍堂々今度は九段の靖國神社に向ふ。氣象臺の前をぬけてお濠を左に見てすゝむ。宮城をとりかこむ老松は昔をしのばせ、お濠のそばに立つ和氣清麻呂の像は、かつての日の盡忠の風貌を彷彿たらしめてゐる。九段の坂をのぼると右に尼港の記念碑がある。大きな鳥居をくぐるとわが兵備の先覺者たる大村益次郎の銅像が、上野の山の方を見てゐる。その側を通つておごそかな神前へとすゝむ。

號令一下、最敬禮を捧ぐれば、日清、日露の兩役を始め支那事變、大東亞戦争に醜の御楯となつて戦線に散つたわれら先輩の幾多の英靈が、「お前たちは今こそ、祖國の礎となつて散れ、粉骨碎身して敵米英を屠れ」と叱咤激勵してゐるやうな心地がする。

靖國のこの御社には、海軍航空部隊の先輩諸勇士が祀られてゐることは、今更申すまでもないのだが、さうした航空隊の勇士たちの力戦奮闘あつたればこそ、かつまた諸先輩の

英靈の御加護があればこそ、廣大極りない戦線を馳驅し、潮のごとくよせくる敵機の群を蹴散らして、われらの兄鷲たちは勇壯極りない敢闘をつゞけてゐるのである。

雄々しい少年飛行兵たちは、緑濃い櫻樹の蔭で、護國の神となつた丈夫たちの壯烈な心事をしのび、更に靖國神社宮司の訓話を肝に銘じ、感激に胸はづませて、遊就館に入り、過去の戦役の歴史をしのぶのである。

再び整列して、明治神宮へ向ふ。

檜造りの神さびた鳥居をくぐると、もうそこは別天地である。明治天皇の大精神は、この代々木の森に神しづまりますかのやうに、しんとした敬虔の氣が神域にあふれてゐる。更に砂利道を幾曲り、崇嚴極りない神前に立つては、明治天皇の御聖徳と御偉業とを今更のごとく思ひうかべ、國威を四海に輝かせ給うた高邁なる大御心に感激の情は抑へがたゝ。練習生一同は、速かにわが海軍の第一線に立つて、存分に醜夷を屠り、御鴻恩の萬分の一にも報い奉らんものと感奮せずにはゐられない。

この一日の東京行軍は、頗る有益であつた。朝な／＼遙拜する宮城を目のあたり拜し、さらに明治神宮の神前に額き、また靖國の御社に詣で幾多忠勇なる將士の靈を慰めては、われらも亦、われらの後につゞく若い後輩がぞく／＼と現れ出ることを期待しつつ、寸刻も早く太平洋の決戦場裡に赴くべく、日々の猛訓練に更に一層精魂をうちこまなくてはならないと心に決するのであつた。

釣床教練

夕食後の楽しいひととき――。

練習生はめい／＼の兵舎の中で、各班の酒保係がもつて來た菓子を平げたり、靴下のつぐろひをしたり、雑談をしてゐる。

この静けさを破つて當直練習生の「釣床係整列」の號令がひゞき渡つた。そら來た！ 海軍獨得の釣床教練だ。

練習生は皆一齊に腰をあげ、掃除當番は寒風がびゅ／＼吹き込む冬の眞最中だらうがお構ひなしに急いで兵舎の窓を全開する。皆上衣をとつて元氣一杯、袖の短いシャツ一枚になると總員甲板に整列する。甲板といつても軍艦の甲板ではない。海軍では兵隊の居住する板の間をすべて甲板といふのである。入隊以來の訓練が物をいつて、練習生の筋骨は

隆々とたくましい。

がらつと戸が開いて、當直教員の姿が見えた。今夜の當直はいつもの〇〇班長である。擴声器が「配置につけ」と令した。釣床係は素早く草履をぬぎ、頸紐をかけ、身輕にするすると釣床格納所に昇つて釣床をおろす準備をする。係員以外の者は、格納所の下に待機して、釣床がなげ出されるのを待つてゐる。

やがて教員がやつて來られ

「今日も元氣一杯におろす。どうだ、三十秒で卸せるか」

「ハイッ」

「よし、三十秒だな。一秒でも餘計かゝつたら出來るまで何回でも教練をやり直すゾ、さいか」

「ハイッ」

皆は元氣一杯の返事だ。

自分はうまく三十秒で卸せるか少々不安だったが、軍隊では一度出來ますといつて行動

を起してから、「駄目です、駄目でした」では通らないのだ。一度出來ますといつたことは、何回でも出來るまでやり通さなければならぬのだ。

間もなくブザーが鳴り「總員釣床卸せ」の號令がかゝると同時に、當直教員のパイプー聲、「卸せ！」と、耳が破れるやうな大きな聲が聞えた。そらッといふ間もなく、ネツチング（釣床格納所）にのぼつてゐる釣床係の手からは白い丸太のやうな釣床が、流れるやうに落ちてくる。練習生は宙にうく釣床を手にするると銘々の場所へかけつけて、釣りにかかる。一瞬にして静かだつた居住區は前代未聞の大地震でも始つたやうに、だ、だ、だ、だ、と大きな音がひびいて床が鳴る。數十名の練習生が目をいからし、肩をはつて、指定の秒時内に釣り終はらうと無我夢中で釣床ととつ組んでゐる。腕に一杯力をこめてぐんと鑿を鈎にかける。ガチャリ、ガチャリと方々に音がする。まるで五、六挺の機關銃を連續射撃してゐるやうだ。狭いところだから、隣りの練習生の脇がいやといふほど頬や脇腹に當る。どこからか長い索の先がとんで來て首筋をびしりと打つてその後眞赤な筋をこしらへたりする。

括り索がばたん／＼とデツキを叩きつける。或る者は索の端に足をからめて、顔をしかめ、片足をあげてふりほどかうとしながらも、釣床つる手は休めずにふう／＼いひながら懸命である。「おそい／＼」と時計片手に當直教員がどなる。早く／＼と氣ばかり焦るが手が動かぬ。釣り終つて整列すると

「今のはおそい、三十一秒」

當直教員の聲がした。當直練習生が届ける聲が聞えた。

「よろしい」また教員の聲がした。「今のは三十四秒だ。四秒も経過してゐる。駄目だ。もう一度教練を行ふ——總員起し！」

そらッ、總員起しだ。居住區にはまた地震のやうな音がしたと思ふと一分以内には完全に括り終る。

「今の總員起しの状況は、元氣があつてよろしい。早く出来た。卸す場合も今のやうに元氣にやれ。しかし確實でなくてはいかん。それに伴つて靜肅でなければいかん。海軍の三要素は皆知つてゐるな。確實、迅速、靜肅。これは飛行兵たるお前たちにはこの三要素

がどれほど大切か、いふまでもなく十二分に知つてゐることと思ふ。このことを忘れるな。では、これから海軍の三要素を十二分に發揮せい。もう一回卸す。出来なかつたら何遍でもやる」

「ハイ」

「卸せ！」

再び教練は始つた。……「二十五秒、二十六秒、二十八秒……」「三班！ 八班！ 一班！……」と各週番練習生の大きな聲がひびく。

「よろしい。二十九秒。今日はこれで教練を終る」教練が終ると居住區の拭き掃除である。勇壯活潑なる教練の終つたあとのよい氣持で、飛行兵に大切な眼を護るため、照明に苦心された明るい講堂へいつて練習生はひとしきり夜の溫習に勵むが、母のふところのやうに安樂な釣床は、デツキの上に長い影をおとしながら、溫習の歸りをまつてゐるのである。

兎狩り

「注目、陸戦隊命令。」

敵はこの白米城址の麓を根據地とする約〇〇名の兎軍にして、日夜田畑に出没して農作物を荒し農民を苦しめてゐる。よつて本陸戦隊は、農民の苦しみを救はんがため、只今よりこれを包圍殲滅せんとする。第一中隊は網隊となり速かに適當なる位置に網を張り、その整備を届くべし。第二、第三、第四中隊は勢子隊となり、兎軍を包圍攻撃しこれを網に導くべし。陸戦隊命令終り」

おゝ！ 何と素晴らしい命令だらう。われ／＼は「待つてゐました」といふ聲をのみこんでこの命令をうけた。

朝の總員起しから、皆大いに張切つて、われ／＼は野山の兎軍を根こそぎ捕虜にするんだと、元氣に武装を整へて網隊を先登に、つゞいて本隊が強い風の中をもとせす、霜柱をべんで敵地へ向つて來たのであつた。

中隊長は、命令がすむと

「一匹ものがすな。逃げるならば體當りでゆけ！」と激勵された。

網隊は準備完了したらしい。本隊もそれ／＼配置についた。各部隊はやがて行動を起した。皆は手に／＼棒切れをふり廻し、大きな鬨の聲を張りあげて兎軍の陣地へ突入していった。小高い丘の頂に網を張つて待機してゐる網隊から突撃開始の合圖があつたのだ。勢子隊はワッ、ワッ、と山をゆるがす鬨の聲をあげる。相手が兎軍では、鬨の聲でおどかすより外に手はない。

足許から二米ほど前を一匹の兎がかけてゆく。「ソラッ」と追ひかけ棒をなげつけたが當らなかつた。敵は全速をかけて藪の中へ遁走した。

網隊では、息を殺して兎がかゝるを待つてゐる。鬨の聲がだん／＼近づいてくるが、敵兵らしい影は一向に見當らない。

「畜生、さては逃げうせたか」

と思つてゐると、一段と高い関の聲が起る。途端に誰か

「あつ、ゐたゾ」

と叫ぶ。

いよく、我が軍の總攻撃に敵し得ず、退却し始めたなとますく警戒を嚴重にし、來たらば、たゞ一打と待機してゐるがやつて來ない。

包圍攻撃中の勢子隊は、もう網の近くまで來てゐる。しかし兎はおろか鼠一匹とびこんで來ない。勢子隊は、たまりかねてか「ワーツ」と一齊に突撃を敢行して來た。

「見參、見參」

「兎軍、いづこにありや」

「たしかに一匹ゐたのだが……」

と互に口惜しがつたが、致し方ない。

だが、かうなつたら意地づくでも一匹捕虜にしなければ本陸戦隊の名譽にかゝはる。今

度こそは！ と場所をかへてやつて見たが、やつぱり兎軍の影もみえない。残念ではあるが、流石のわが精銳も、大分燃料を空費したので引きあけることにした。

だが、別の場所で殲滅戦を展開してゐた友軍の報告によると、大分好調で、網隊では歡聲があがる。大きな兎が網にからまつて、はね廻り、中隊長は「やあ、これで今日は、兎汁が少しは吸へるねえー」といはれたといふ。そこで調子を出して五回戦ばかり行つて四匹の獲物を得たといふ。われ／＼から見れば素晴らしい戦果だが、これも仕方がない。

食事の號令で皆一齊に辨當を開いた。大體各班毎にあつまつて、兎汁を作り、飯盒炊爨はんがふすゐさんをやつて、野戦食に舌づつみをうつた。

皆は面白い戦況にうち興じてゐる。

うまい晝食を終ると、わが中隊にはまた第二の命令が下つた。

「注目、敵はわが陸戦隊の勇猛果敢なる突撃に對しえず、北東に退却せるものごとし。獲物はわづかであつたが、兎軍も今後は諸君の猛攻をおそれ農民を苦しめるやうなことはしないと思ふ。元より本陸戦隊の任務は、農民の苦しみを救ふにあり。これを要するに

本陸戦隊の任務は、完全にこれを果し得たといふべし。よつて只今より白米城址に急行軍を行ひ、もつて心身の鍛錬に供せんとす。たゞし、そこにおいて約一時間半ばかり休憩して、露天大演藝會を開き、諸子の慰勞を促す」

おう、今日は何といふ素晴らしい命令の連続だらう。兎狩り、演藝會！
われら若き荒鷲の群は、意氣揚々と進軍を起した。

白米城址は、よく練習生の散歩にゆく眺望のよい山頂にあるが、もと北畠氏の巨大宮尾張守の居城であつて、足利勢に包圍され水路を絶たれたが、城兵はこれみよがしに白米をもち出して馬を洗つた。敵はこれを遠くからみて、豊富に水があることを知つて遂に圍みをといたといふので、白米城といふ名があるのである。本當は阿射加城といふが、いまからわれらはそこへゆくのだ。

腹の虫も兎汁でいゝ心持になり、演藝會ときいて脚はいよゝゝ快速調にすゝむ。

面 會

課業が終つて講堂から兵舎にかへると班長が「おい齋藤、お母さんが面會に来てをられるゾ、早くゆけ」といはれた。

「ウワツ、占めたぞ」

かねて面會にゆくといふことは、手紙にかいて寄越してあつたけれども、まさかこんな早く來れるとは思つてゐなかつた。

「早速隊門の近くにある面會所まで馬力をかけて早駆けだ。道にゆきあふ戦友の顔を見ても何だかニヤリと笑つてみたくなる。途中走りながらも、なつかしい母の笑顔を思ひ出しては獨り悦に入る。だが、面會所の近くへくると、母に會つたら先づ初めに何といつたらいいものか、又どんな顔をしてゐたらよいものかなどと、つまらぬ事が氣になつてくる。

衛兵所のあたりには、和服や背廣や國民服の人達が大勢おしかけてゐて、白い事業服と紺の軍服ばかりの隊内生活の單調を破つてゐる。皆、練習生のやつてくるのを待つてゐるのだ。

面會所の前で元氣よく敬禮して

「第十一分隊、一班、齋藤榮造、面會に参りました」と大きな聲でとゞける。するとこれも亦大きな聲で

「ヨオーシ、面會かゝれ」といはれた。

勢よく面會所へとび込む。

おゝ!! ゐるゝ。母がある。なつかしく優しい母は、御苦勞されたためか大分鬢髪にも霜をおかれたやうだ。母をみて舉手注目の敬禮をすると、眼には涙さへうかべて、自分の頭先从ら足の爪先までつくゝと眺められた。暫くたつてから「立派になつたねえー」といつた。さうだらう、入隊以來の猛訓練で、腕も脚も太くなつて體重も四キロ近くもふえたのだもの、母が驚くのも無理はない。

自分は胸が一杯になつて、何を話してよいか判らなかつたが、たゞこの元氣な顔、立派な海軍軍人となつたこの姿を見てもらひさへすればそれで満足だ。面會しても外に何も望むことはないと思つた。

母と話してゐると、しかしだんゝと滿身に鬪志が漲つてくるやうに思はれた。よし、やるゾ、明日からはもつとゝ張切つて大いにやるゾ。

面會所にゐると、時間のたつのが頗る早い。面會所の一時間は、いつもの五分間に當るやうだ。母を見送つて「第十一分隊、一班、齋藤榮造、面會終りました」と届けて兵舎まで駆足でかへる。

この豫科練の生活では楽しいことがいろゝとある。食べることも、眠ることも、猛訓練の後に入る「バス」(お風呂)の味も亦格別だ。だが面會くらの楽しいものはない。誰かゝ面會にやつて来てくれた日は一日中愉快で何となく楽しい。

夕食がすみ、溫習が終つて柔い釣床の中へ入つても、思ひ出されるのは今日の面會のことだ。母の笑顔のなつかしさだ。「あゝ、あの村の小學校で一緒だつた彼奴は元氣である

か聞けばよかつた。小さい時から可愛いがつてくれた隣のお爺さんは、相變らずに大きな聲を出して鶏に餌をやつてゐるかしら……」あれも聞けばよかつた、これも話したかつたと思つてゐる内に、巡檢のラツバが静かな兵舎に鳴り渡つてきた。戦友たちは、もう深い眠におちてゐる。

辻堂演習

痛快なのは野外演習だ。年に一度、全員總出動でいろ／＼の科學兵器を加へて大仕掛の野外演習をやる。辻堂といふ海軍の演習地に一週間ばかり泊り込んでの演習だ。

少年飛行兵は、練りに練つた陸戦の腕前を發揮するのはこの時とばかり、凜々しい陸戦隊姿も勇ましく一齊に繰り出してゆく。

三浦半島を縦斷して相模灘側へ向つて行進し、その邊の松林で遭遇戦といふことになるらしい。

途中は斥候を出したり、連絡係を出したりして警戒行軍をやつてゆく。鎌倉八幡宮では武運の長久を祈り、化粧坂あたりで一合戦交へる。そして地圖と睨めつこをして夕方辻堂へつく。宿舎は普通の農家に泊るのだから、久しぶりに娑婆の布團にねることが出来る。